

幼児と高齢者の世代間交流に関する  
発達心理学的考察

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科児童保育専攻

南部 登志江

# 論文の要旨

本論文では、幼児と高齢者の世代間交流の実際を知り、その効果ならびに交流を継続するための課題を検討することを通して、世代間交流の意義を発達心理学的な立場から明らかにすることを目的とした。

「序章」では、世代間交流を「子ども、青年、壮年および高齢者という世代の異なる人々が相互に交流し、互いに自分たちの持っている能力や知識・技能を出し合い、自分自身を向上させるとともに、互いの生活文化や価値観への理解を深め、かつ、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動である」と定義し、世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を研究する意義として次の四つを挙げた。

一つ目の意義としては、人間における世代の重なりには、他の動物に見られる世代の重なりとは異なる文化を育み、継承し発展させるという特別な意味があることが挙げられる。

二つ目の意義として、世代間交流を通じて相手を理解しようとするかかわりが、自分自身の成長・発達を促し、またお互いに影響し合い、さらなる発達へとつながっていくことが挙げられる。

三つ目の意義として、幼児期の発達課題の達成がある。すなわち、幼児期は、歩行をはじめ様々な運動能力が著しく発達し、認知能力が増し生活空間が拡大する時期である。また自分の体験や自己覚知を自己概念としてもてるようになり、自己意識が明確になる。そして自己意識がかかわる恥や罪、誇りなどの自己意識感情をもつようにもなる。これらがその後の児童期での意識的で自覚的な認知の基礎形成につながる。この時期に高齢者をはじめとする多世代とかかわることによって、言語や運動のみでなく、情緒の発達が促進されると言える。

四つ目の意義として、老年期は人生の最終段階であり、それまでの人生を意味づけ直し統合する時期であるので、高齢者にとっても発達を促す意義があることが挙げられる。またほとんど完結しているライフサイクルに対し英知の感覚を統合していく課題もある。この課題の達成に向けて、高齢者には、文化や英知を次の世代へ伝承していくことが求められる。エリクソン(2001)が述べているように、人生を振り返り、自分が価値ある存在であったか否かを考えるとき、文化や英知を次の世代へ伝承していくという課題の達成が求められるが、子どもとの世代間交流は、その課題達成につながるのである。これによっても、

幼児と高齢者の世代間交流が一つの重要な交流と捉えることができる。

第1章「少子高齢化の現状と世代間交流の必要性」では、我が国の少子高齢化の現状と世代間交流の必要性を確認した。さらに交流を困難にしている要因の一つである高齢者の認知症症状の理解や支援の必要性が確認できた。

第2章「世代間交流に関する歴史と近年の動向」では、世代間交流を定義した上で、文献研究を通して、我が国における世代間交流の歩みを明らかにするとともに、我が国の世代間交流の現状と課題を明確にした。

第3章「各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流」では、各世代と高齢者との世代間交流の現状と課題について検討するとともに、世代間交流の中でも幼児と高齢者の世代間交流に着目することの意義と必要性を明確にした。これにより、本研究の立場と目的を確認できた。

高齢者と幼児が触れ合うという交流体験は、子どもが「高齢者を大切にできるようになる」、「人のことを思いやることができるようになる」、「家族を大切にできるようになる」、「性格がやさしくなる」などの効果があることが示唆された。また幼児期に高齢者と親密な交流をもった経験がある子どもは、児童期、思春期において、高齢者に対してポジティブなイメージをもっていることが分かった。

しかし実際に行われている活動では、交流回数は年に数回であったり、内容も行事中心であったりすることが多い。これには、交流の仲介を勤める職員の負担の大きさや、施設をはじめとする周りの職員の理解不足、さらには効果的な交流プログラムや進め方などの知識・経験不足などの要因が考えられる。

第4章「幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究」では、保育所(園)・幼稚園の職員を対象とした世代間交流のアンケート調査の結果について発達心理学の観点から考察した。これらを通して、子どもと高齢者の世代間交流は、それぞれの発達課題の達成や自我の発達において重要な役割を担っていることが確認できた。

第5章「世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査」では、日常的に世代間交流を行っている施設の保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査から、具体的な交流内容の実際や職員が考えている課題、さらに高齢者の認知症症状に対する子どもたちの反応や交流に当たって職員が留意していることなどが確認できた。

第6章「幼児と高齢者の世代間交流場面の観察」から、仲介する保育士や施設職員の進

行方法などの観察を通して、より具体的に幼児と高齢者の交流の状況、相互のコミュニケーション、仲介する保育士や施設職員のプログラム構成や進行方法の工夫などを知り、交流の効果や課題を確認できた。

交流場面の観察や交流後の子ども、高齢者、職員へのインタビューから、世代間交流は子どもの感情の表現を豊かにし、自分たちの握手が高齢者の感情を高める効果があることを実感し、自己昂揚感を高めていた。高齢者にとっても難聴や認知機能の低下などがあるため、子どもたちが行ったプログラム内容はよく覚えていないが、涙が出るほどかわいく感じたり、笑顔を引き出したり、身体面や精神面、意欲や自己肯定感などの効果につながっていた。これらにより、エリクソンが述べている遊戯期（幼児期後期）の発達課題である「自主性対罪悪感」という社会的葛藤から自主性を獲得したり、高齢期の「統合対絶望」から英知を発揮したりしていることが確認できた。

第7章「子どもと高齢者の世代間交流の望ましい在り方」では、世代間交流活動が活発となり発展していくための方策として、交流を支えるコーディネーターの育成、自治体や地域を巻き込んだ世代間交流の必要性、学問としての分野の構築などを挙げた。

終章「今後の課題」において、幼児と高齢者施設を利用している高齢者との交流だけでなく、もっと年代を広げて考えることや地域の健康な高齢者と子どもの世代間交流についても考えることなどが今後の課題として残された。

# 目次

序 章	1
I 問題の所在と本論の目的	1
II 本論の構成	4
第1章 少子高齢化の現状と世代間交流の必要性	6
I 少子高齢化と世代間交流	6
II 我が国の高齢化と認知症	11
第2章 世代間交流に関する歴史と近年の動向	14
I 我が国における世代間交流の歩み	14
1 1960年～1970年代	15
2 1980年～現在	15
II 世代間交流の近年の動向	17
III 世代間交流の地域化と多様化	22
1 子どもを対象とする地域活動	22
2 高齢者を対象とする地域活動	24
3 伝統芸能を取り入れた活動	25
4 ボランティア活動	26
第3章 各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流	28
I 子どもと高齢者の世代間交流の現状と課題	28
1 乳幼児期にある子どもと高齢者の交流	28
2 児童期にある子どもと高齢者の交流	30
3 思春期にある子どもと高齢者の交流	31
4 大学生と高齢者の交流	32
II 高齢者から見た世代間交流の現状と課題	32
第4章 幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究	36
I 幼稚園・保育所の職員を対象とした世代間交流のアンケート調査	36
1 目的	36
2 方法	37

3	結果	37
4	考察	46
第5章	世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査	49
1	目的	50
2	方法	50
3	結果	51
4	考察	66
第6章	幼児と高齢者の世代間交流場面の観察	70
I	大阪府B保育所幼児及びC保育所幼児とD高齢者ケア施設の高齢者との交流	70
1	B保育所幼児とD高齢者ケア施設高齢者との世代間交流	70
2	C保育所幼児とD高齢者ケア施設高齢者との世代間交流	71
3	B保育所幼児及びC保育所幼児とD高齢者ケア施設の高齢者の交流の考察	73
II	O市にある複合型福祉施設における世代間交流の観察	73
III	大阪府S市にある保育所幼児と併設する高齢者施設の高齢者の世代間交流の観察	77
1	目的	77
2	方法	77
3	結果	79
4	考察	91
IV	意識調査並びにインタビュー、観察から見た世代間交流の研究方法の考察	94
第7章	子どもと高齢者の世代間交流の望ましい在り方	95
I	世代間交流の実態と成果	95
II	発達の観点から見た世代間交流	96
III	世代間交流の継続・発展	98
1	子どもと高齢者を仲介するコーディネーターの育成	98
2	自治体や地域を巻き込んだ世代間交流	98
3	学問としての分野の構築	99
終章	今後の課題	101
1	保育士と高齢者ケア施設職員の合同学習会や支援マニュアルの作成	101

【参考・引用文献】 .....	103
Abstract .....	108
あ と が き .....	112
【資料】 .....	113

# 序 章

## I 問題の所在と本論の目的

「世代間交流」は1960年前後から注目されるようになり、自然発生的な世代間交流が活発化してきたが、筆者は、草野（2004）が『インタージェネレーション—コミュニティを育てる世代間交流—』において、「世代間交流」を「子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを实践する活動で、一人ひとりが活動の主役となることである」と定義しているのを受けて、世代間交流を「子ども、青年、壮年及び高齢者という世代の異なる人々が相互に交流し、互いに自分たちの持っている能力や知識・技能を出し合い、自分自身を向上させるとともに、互いの生活文化や価値観への理解を深め、かつ、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを实践する活動である」と定義する。しかし、筆者の調査によれば、都市部での年間の実施回数は少ない（南部，2014）。その要因として、便利な日常生活で世代が支え合う必要性が希薄になってきたことや子どもが高齢者と触れ合うことに対する不安を抱く保護者の存在などが報告されている（關戸，2006）。高齢者も子どもも同世代同志や介護者、保護者とのかかわりだけでは、お互いに対して苦手意識を抱き、また子どもにとって高齢者とは笑顔などの表情があまりなく怖い人という誤った認識を抱いてしまうことが危惧されている。また、この結果は同様に文献研究からも職員の時間的な負担や事故が起こらないかという不安が顕在していることが示唆されている（藤原，2012）。

一方、国外においては、アメリカで1986年に「ジェネレーション・ユナイテッド（諸世代連合）」という世代間交流全国組織の結成（Sally, 1987）や、英国をはじめとする北欧でのインタージェネレーション・コミュニティに関する活動報告がある（木林，2005）。このことから、我が国においても世代間交流に関する組織的な研究及び実践活動のさらなる進展が急務な課題となっている。

ところで、エリクソン（Erik Homburger Erikson, 1902-1994）（2001）は、精神分析学を提唱したフロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の心理・性的発達段階を基盤としつつ、心理・社会的側面を強調し、人間の一生を人生の周期（ライフサイクル）として捉え、8段階に区分した。すなわち、①乳児期、②幼児期初期、③遊戯期（幼児期後期）、④学童期、⑤青年期、⑥前成人期、⑦成人期、⑧老年期である。そして、彼は、各発達段階の対立す



る課題の心理・社会的葛藤をいかに克服していくか、が人間の人格形成に深くかかわるとした。

乳児期に関してエリクソン(2001)は言う。乳児期の支配的な対立命題は「基本的信頼対基本的不信」であり、「基本的信頼なしには乳児は生き延びることさえできない……。つまり、現に生きている人は、皆、基本的信頼を獲得し、それによってある程度まで希望という強さを得ているということになる。基本的信頼は希望の証であり、この世の試練と人生の苦難から我々を守る一貫した支えである」と。幼児期初期に関して、彼は、「それは自律性対恥、疑惑……という危機を有する段階であり、その解決から意志……が現われてくる」とし、具体的に「子どもが二歳ぐらいの頃、驚くほど意欲的になり、自分の手でなんとかスプーンや玩具を握ろうとしたり、なんとか自分の足で立とう」としたりする。「子どもの動きは遊び的だが、確固として自足している。彼らには歩こうとする強い意志があり、また歩くことができることを誇示している。意志が強ければ強いほど、歩こうと試みる。……しかしやはり限界はある。子どもは、度を越えてコントロールを失うと、不安定な状態に戻りし、自信を失い、自分の能力に対する疑惑と恥の感覚に襲われる」と述べている。この時期に子どもは自らの「身体の主人公」になり始め、排泄と保持を通して自分の活動をコントロールできる自律性を獲得する。さらに、遊戯期(幼児期後期)は、エリクソンによると、「自主性対罪悪感」という心理・社会的葛藤が訪れる段階であり、自主性は、つまり「目標達成への執念、征服の喜び」を指している。この時期に、子どもは自らの「心の主人公」になり始め、自分の心に決めたことを実現する自主性が育つ。第一次性徴に伴う性差への興味や歩行による活動範囲の拡大も、自主性の獲得につながる。母親への依存とともに母親からの自立への意欲が見られ、自信をつけるとともに、昂揚感を身につけることによって外界に積極的に働きかけるようになる。

一方、「老年期における支配的な対立命題及び最後の危機のテーマ」は、エリクソンによれば、「統合対絶望」である。老年期が「人生行路の最期(それがいつ、どのようにやって来るかは分からないが)に示されているので、(絶望という)失調要素のほうにまず頭に入ってくるが、しかし統合は、この最後の対立命題から熟して生まれると我々が仮定する人間的強さが要請するものと同じもの、つまり英知……というひとつの特質を要請するように思われる」という。英知とは「死そのものに向き合う中での、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」にほかならない。この時期は自らの人生を振り返り、自分が価値ある存在であったか否かを考える時期であり、文化や英知を次の世代へ伝承していくという

課題の達成が求められる時期でもある。それゆえ、幼児と高齢者との世代間交流を通じて相手を理解しようとするかかわりが、自分自身の発達を促し、またお互いに影響し合い、さらなる発達へとつながり、発達課題の達成にもつながるのである。

守屋(2010)は、発達の観点から、人間には「生物的自己(biological self)」、「社会的自己(social self)」、「時間的自己(temporal self)」の三つの自己があり、生物的自己とは自己の生物的側面に関する意識内容であり、社会的自己とは自己の社会的側面に関する意識内容であり、時間的自己とは自己の過去から未来へと向かう時間的側面に関する内容であると述べている。さらに、自己の三つの側面のうち、生物的自己は誕生まもなくの時期からすでに認めることができ、社会的自己も、生後2か月頃より目立ち始める対人的な反応（他者に対して笑うなど）にその原始的な表現を認めることができ、幼児期初期の第一反抗期に明確に認められるとする。一方、時間的自己は、青年期初期の第二反抗期から明確に認められるようになると述べ、人間の独自性として次の7点を挙げている。

1. 意志未来がある（未来を意識し、未来に向かって能動的に生きること）。
2. 遊びが生涯みられる（常に本能から自由である）
3. 発達が生涯みられる（常に未熟から完熟への途上にある）。
4. 長い老後がある（寿命が圧倒的に長い）。
5. 親子の絆が生涯続く。
6. 回想や追憶によって過去を意味付け直すことができる。
7. 知識を叡智に変えていくことができる。

以上の考察から、筆者は世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を研究する意義として次の四つを挙げたいと思う。

一つ目の意義は、人間における世代の重なりには、他の動物に見られる世代の重なりとは異なる文化を育み、継承し発展させるという特別な意味があることである。

二つ目の意義は、世代間交流を通じて相手を理解しようとするかかわりが、自分自身の成長・発達を促し、またお互いに影響し合い、さらなる発達へとつながっていくことである。

三つ目の意義としては、幼児に対する幼児期の発達課題の達成が挙げられる。すなわち、幼児期は、歩行をはじめ様々な運動能力が著しく発達し、認知能力が増し生活空間が拡大

する時期である。また自分の体験や自己覚知を自己概念として持てるようになり、自己意識が明確になる。そして自己意識がかかわる恥や罪、誇りなどの自己意識感情を持つようにもなる。これらがその後の児童期での意識的で自覚的な認知の基礎形成につながる。この時期に高齢者をはじめとする多世代とかかわることによって、言語や運動のみでなく、情緒の発達が進められると言えよう。ここに、幼児と高齢者の世代間交流の持つ重要な意義の一つがあるのである。

四つ目の意義としては、老年期は人生の最終段階であり、それまでの人生を意味づけ直し統合する時期であるので、高齢者にとっても発達を促す意義があることが挙げられる。老年期は、老年期以前を生きる年代の者に対し望ましい老年像を示すことができる。またほとんど完結しているライフサイクルに対し英知の感覚を統合していく課題もある。この課題の達成に向けて、高齢者には、文化や英知を次の世代へ伝承していくことが求められるのである。エリクソン(2001)が述べているように、人生を振り返り、自分が価値ある存在であったか否かを考えるとき、文化や英知を次の世代へ伝承していくという課題の達成が求められるが、子どもとの世代間交流は、その課題達成につながるのである。ここにも、幼児と高齢者の世代間交流が一つの重要な世代間交流と捉えることができる意義があるのである。

少子高齢化にある現在の我が国において、子どもと高齢者の世代間交流は、子どもにとっては育ちを支援し高齢者へのポジティブな認識をもたらすとともに、将来の社会的活動への参加を促す原動力になる。また高齢者にとっても今までの経験や知識が生かされることにより、自尊感情や有用感も高まるものとする。

## II 本論の構成

本論は、次の7章から構成されている。

第1章「少子高齢化の現状と世代間交流の必要性」では、我が国の少子高齢化の現状と世代間交流の必要性を述べる。

第2章「世代間交流に関する歴史と近年の動向」では、世代間交流を定義した上で、文献研究を通して、我が国における世代間交流の歩みを明らかにするとともに、我が国の世代間交流の現状と課題を明確にする。

第3章「各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流」では、各世

代と高齢者との世代間交流の現状と課題について検討するとともに、世代間交流の中でも幼児と高齢者の世代間交流に着目することの意義と必要性を明確にする。これにより、本研究の立場と目的を確認することができる。

第4章「幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究」では、保育所(園)・幼稚園の職員を対象とした世代間交流に対するアンケート調査の結果について発達心理学の観点から考察する。これらを通して、子どもと高齢者の世代間交流には自我が深くかかわっており、それぞれの発達課題の達成や自我の発達において重要な役割を担っていることを明らかにする。

第5章「世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査」では、日常的に世代間交流を行っている施設の保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査から具体的な交流内容の実際や職員が考えている課題、さらに高齢者の認知症の症状に対する子どもたちの反応や交流に当たって職員が留意していることなどを明らかにする。

第6章「幼児と高齢者の世代間交流場面の観察」から、仲介する保育士や施設職員の進行方法などの観察を通して、より具体的に幼児と高齢者の交流の状況、相互のコミュニケーション、保育士や施設職員のプログラムや進行方法の工夫などを知り、交流の効果や今後の課題を検討する。

第7章「子どもと高齢者の世代間交流の望ましいあり方」として、交流を支えるコーディネーターの育成、自治体や地域を巻き込んだ世代間交流の必要性、学問としての分野の構築について検討する。

終章「今後の課題」として、幼児と高齢者ケア施設を利用している高齢者との交流だけでなく、もっと年代を広げて考えることや地域の健康な高齢者と子どもの世代間交流について考えることが残されている。

# 第1章 少子高齢化の現状と世代間交流の必要性

## I 少子高齢化と世代間交流

我が国では、世界に類を見ない速さで少子高齢化が進み、総務省統計局発表の「人口推計」(2017)によると、2017年1月1日現在の総人口は1億2682万2千人で、その内65歳以上の人口は3469万9千人で、全人口に占める65歳以上の高齢者の割合は約27.6%である。厚生労働省が発表した「人口動態統計」(2017)によれば、2016年の出生数は97万6979人であり、1899年に統計を取り始めてはじめて100万人を割り込んだ。また、1人の女性が生涯に産むであろうと想定される子どもの数である合計特殊出生率は2016年には1.44で、前年を0.01ポイント下回った。この数値は、人口を維持できる水準からはほど遠く、今後も減少が続く見通しである。参考として図1の年齢区分別将来人口推計と図2の出生数及び死亡数の将来推計を示しておこう。

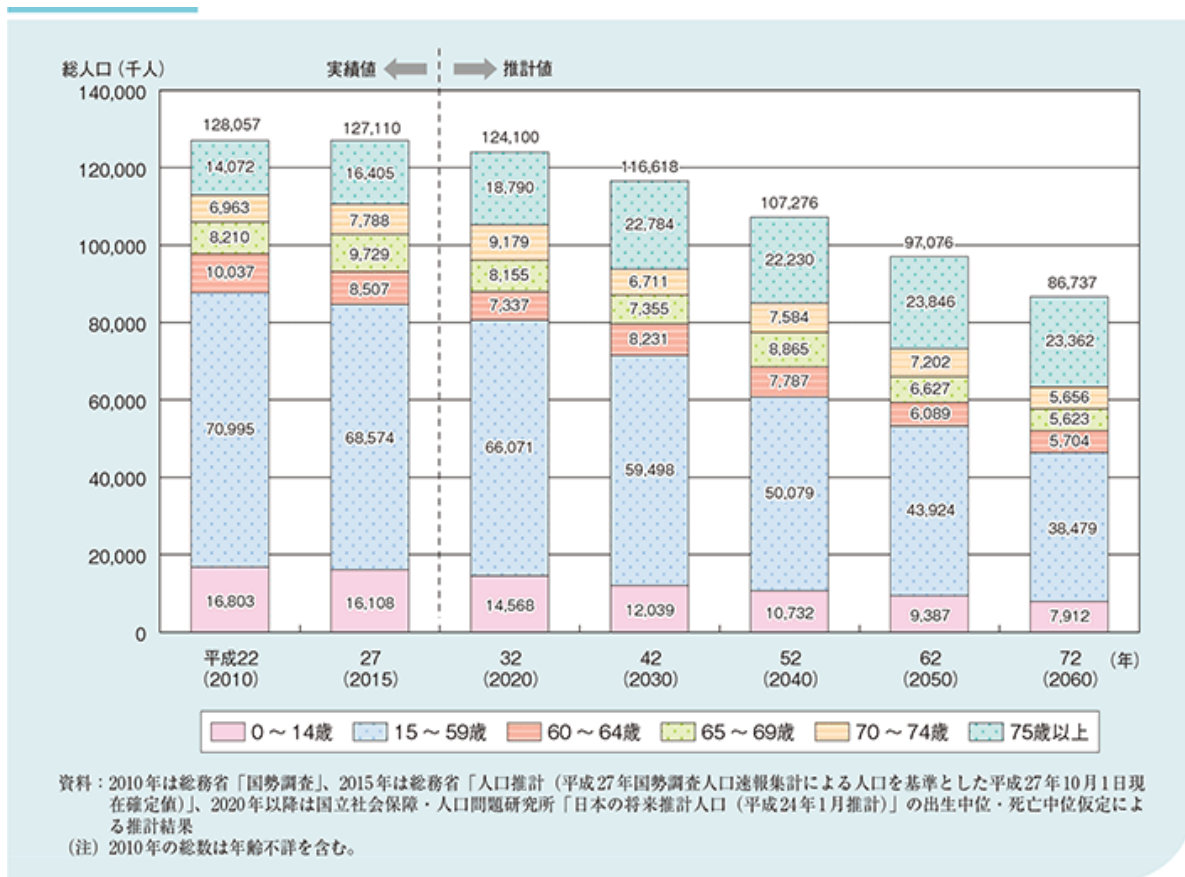


図1 年齢区分別将来人口の推計 平成28年度版高齢者白書（全体版） 内閣府

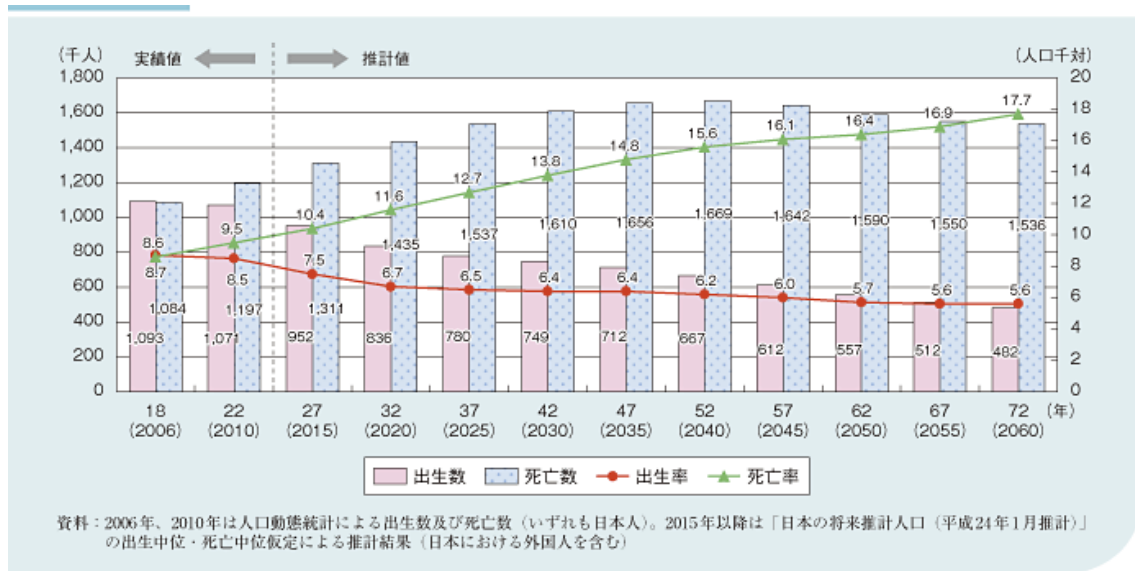


図2 出生数及び死亡数の将来推計 平成28年度版高齢者白書（全体版） 内閣府

高度経済成長期に産業構造が変化したことに伴い、社会構成の基本単位である家族の関係が大きく変化した。家業が厳然と存在し、家族全員で営んでいた時代では、高齢者は重要な働き手であると同時に、家庭の中で子どもの養育という役目をも担っていた。しかし、昨今では、親と子、孫といった三世帯世帯が5.9%と減少し、夫婦と未婚の子のみの世帯が29.5%と最も多く、次いで単独世帯が26.9%となっている一方で、65歳以上の高齢者のいる世帯は全世帯の48.4%で、高齢者夫婦のみの世帯や高齢者の独居世帯が増加している（厚生労働省、2016）。

今日の我が国においては、高齢化が急速に進展し、高齢者の数が増加しているにもかかわらず、都市化や核家族化の進行により、日常の生活において、子どもたちが高齢者と接する機会は減少している。このため、子どもたちが、自然に高齢者と触れ合う中で、高齢者に対する感謝と尊敬の気持ちや思いやりの心を育んだり、高齢者のかかえる問題や「老い」や「死」ということの重さを、身近な問題として学んだりすることができにくい状況となっている。

さらに、三世帯世帯の減少によって、子どもが大人や高齢者との日常的なかかわりの中で学んでいた社会性や風習といった「英知の学び」が減少した。また少子化による兄弟数の減少は異年齢の子ども同士が遊ぶことの減少につながった。その上、テレビやスマートフォン、ゲーム機の普及などにより屋外で遊ぶことが減少するなど、遊びの内容や形態が

変化したことにより、年長者から年少者への生活の知恵の伝承や仲間意識による子ども同士の結束などの経験が少なくなった。

また子どもだけでなく、親世代においても、女性の社会進出、仕事の多忙さ、個人主義的考え方や家族主義による生活から、育児不安や子どもへの過度の干渉などが増大するとともに、地域によっては地域力の低下から子どもの健全な育ちへの支援が少なくなった。このことは子どものいじめ問題や非行、犯罪などに結びついていると考えられる。

高齢者においても、図3に見るように、三世帯世帯の減少や高齢独居者の増加などから今までの経験や判断力を生かす機会が減少し、反対に生産性の低下や加齢変化などから、社会で支援・保護される立場となることが増えている。

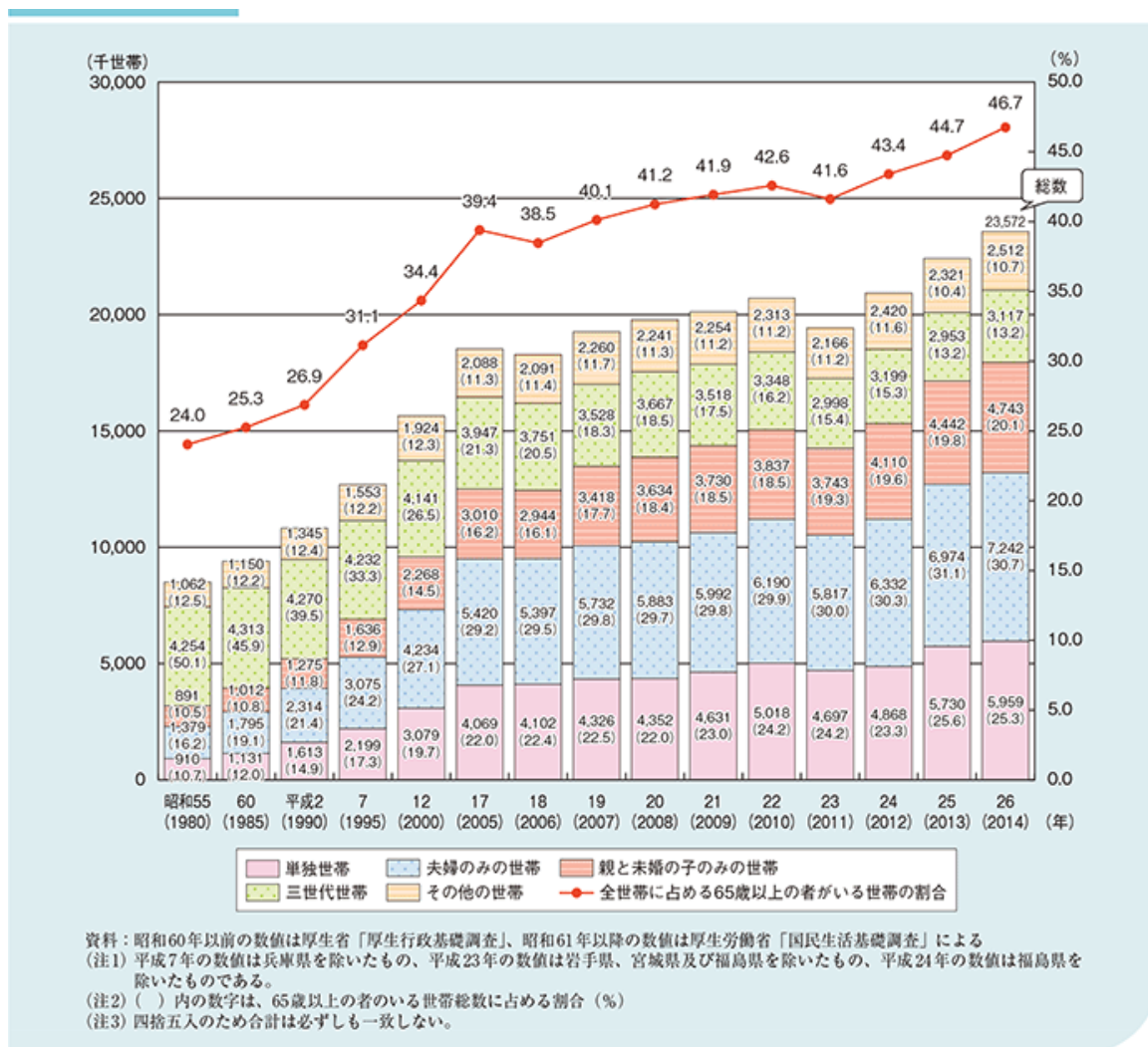


図3 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合 平成28年度版高齢者白書(全体版) 内閣府

地域の老人会、老人福祉センターや老人大学、デイサービスなど高齢者同士によるかわりや生活は見られるが、孫や子どもと触れ合う時間も機会も減っていることから、成

人や子どもが高齢者をお荷物のように考え、「なにもできない」、「きたない」などと決めつけることも多くなり、子どもによる浮浪者襲撃事件や高齢者に対する犯罪などの問題も起きている。これらのことから幼児期から高齢者に対して適切な知識を身につけていくことができるよう、意図的に高齢者との交流を図っていく必要があり、それが世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を意図的に行う意義であると言えよう。

図4は、内閣府による高齢者のグループ活動への参加状況である。何らかのグループ活動に参加した人は年々多くなっており、2013年では61.0%の人がグループ活動に参加している。

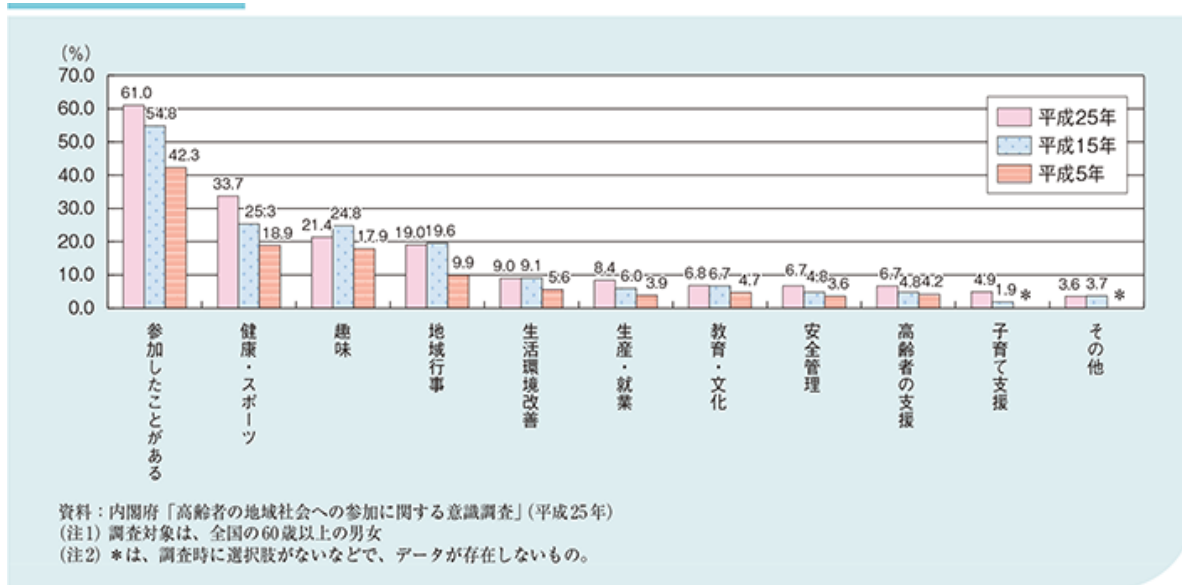


図4 高齢者のグループ活動への参加状況  
平成28年度版高齢者白書（全体版） 内閣府

図5は高齢者のグループ活動による効果である。「新しい友人を得ることができた」「生活に充実感ができた」「健康や体力に自信がついた」「お互いに助け合うことができた」など、グループ活動をすることによって、身体面にも社会面でも効果が見られている。また「地域社会に貢献できた」という回答にあるように、自分自身の有用感も感じている。



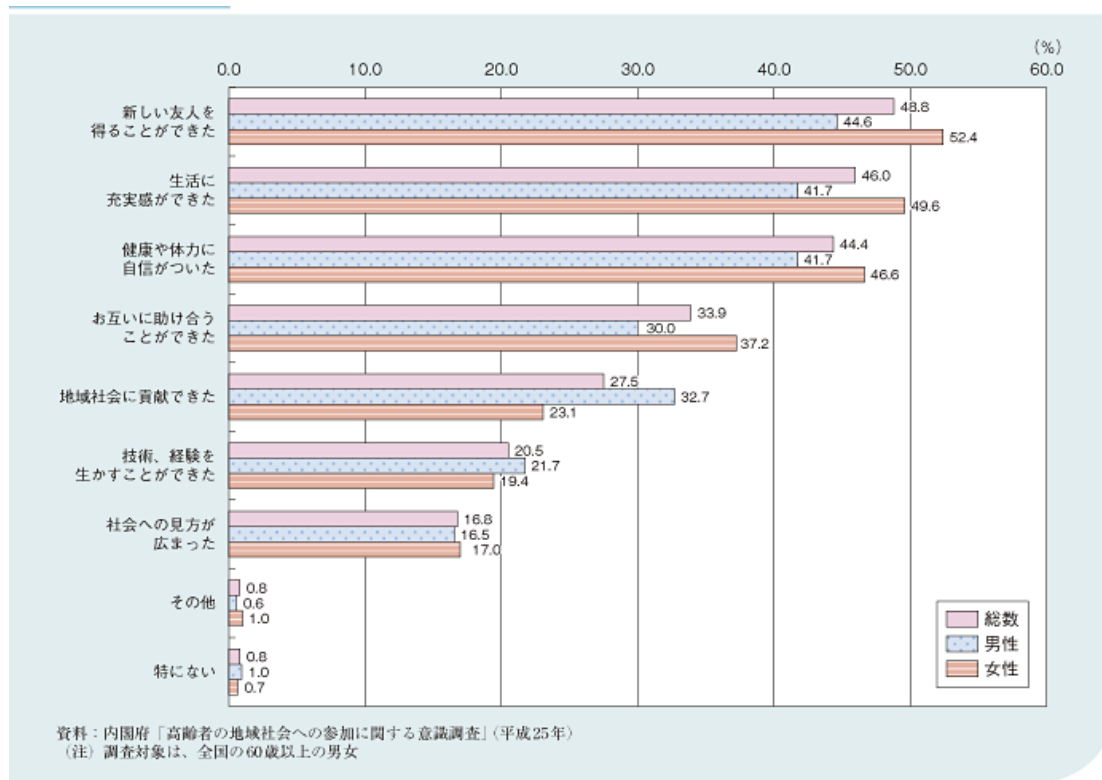


図5 高齢者のグループ活動参加による効果（複数回答）  
 平成28年度版高齢者白書（全体版） 内閣府

金森（2012）は、家庭で高齢者と接することが少なくなった子どもと生きがいを持ち自立した生き方を求められるようになった高齢者の互いの社会的ニーズに対応することができるのが高齢者と子どもの仲介世代が意図的に行う世代間交流であると述べている。しかし、これらの交流はまだ少なく、その頻度も年に数回であったり、非定期的であったりすることが多い。1990年代以降には、高齢者ケアが施設でのケアから在宅ケアへ移行され、また子育て支援策が打ち出され、高齢者施設と、保育所(園)・幼稚園など、子どもの施設とを合築または併設し統合ケアを行う傾向が増してきた。しかし、実施率は半数にも及んでいない状況である。

このような状況に鑑み、本論では、保育所(園)・幼稚園の幼児を中心とした子どもと高齢者の世代間交流の実際を知り、その効果並びに交流を継続するための課題を検討することを通して、世代間交流の意義を発達心理学的な立場から明らかにすることを目的としている。

## II 我が国の高齢化と認知症

幼児と子どもの世代間交流において、交流を困難にしている要因の一つに高齢者の認知症症状が考えられる。

### (1) 認知症とは

認知症とは、脳の器質的病変によって記憶を中心とした知的機能が徐々に低下し、日常生活の遂行の不具合を生じた状態のことであり、成人期以降の発症に対して用いられる(北川、2010)。症状は認知症の中核をなす必須かつ永続的な症状でどの人にも見られる中核症状と BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia、行動・心理症状)と言われる症状が見られる場合がある。

中核症状としては、記憶障害、見当識障害、失語・失行・失認・実行機能障害などが見られる。また BPSD としては、徘徊、妄想、せん妄、不安、焦燥、興奮、攻撃、無関心などの症状が見られる場合がある。この BPSD による症状が、周りの人たちにも不安やかかわりに難しさを感じさせることが多く、子どもにとっても慣れていないとびっくりして、時には怖いと感じる原因ともなる。保護者も暴言や暴力的な行動が子どもたちを怖がらせたり、心理的影響を与えたりするのではないかと危惧して、高齢者との交流を躊躇する理由となっている。

2012年の厚生労働省の調査によると、図6にあるように、全国の65歳以上の高齢者について、認知症有病率推定値15%、認知症有病者数約462万人と推計されるという。また、全国のMCI(正常でもない、認知症でもない、「正常と認知症の中間状態」の者)の有病率推定値は13%、MCI有病者数約400万人と推計される。団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になる2025年には、認知症高齢者は700万人になると推計され、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症になると推計されている。

### (2) 認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)及び認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)

認知症高齢者数の増加に対し、国の施策として2000年に介護保険制度の制定、2012年の認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)の策定が挙げられる。

オレンジプランは、「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた

地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」の実現を目指すものである（厚生労働省、2012）。この実現のため、新たな視点に立脚した施策の導入が積極的に進められ、2012年度から2017年度までの5年間の計画として、必要な医療や介護サービス等について数値目標を定めて整備が図られている。さらに2015年には団塊の世代が75歳以上となる2025年を目指し、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会を実現すべく、「認知症施策推進5か年計画」（オレンジプラン）（2012年9月厚生労働省公表）を改め、新たに「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」（新オレンジプラン）を策定した。具体的な施策としては次の7項目である。

1. 標準的な認知症ケアパスの作成・普及……「認知症ケアパス」（状態に応じた適切なサービス提供の流れ）の作成・普及
2. 早期診断・早期対応……かかりつけ医認知症対応力向上研修の受講者数、認知症サポート医養成研修の受講者数、「認知症初期集中支援チーム」の設置、早期診断等を担う医療機関の数、「地域ケア会議」の普及・定着
3. 地域での生活を支える医療サービスの構築……「認知症の薬物治療に関するガイドライン」の策定、精神科病院に入院が必要な状態像の明確化、「退院支援・地域連携クリティカルパス（退院に向けての診療計画）」の作成
4. 地域での生活を支える介護サービスの構築……「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」の実現を目指す。この実現のため、新たな視点に立脚した施策の導入を積極的に進める。2013年度から2017年度までの5年間の計画として、必要な医療や介護サービス等について数値目標を定めて整備を図る。
5. 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
6. 若年性認知症施策の強化……若年性認知症支援のハンドブックの作成、若年性認知症の人の意見交換会開催などの事業実施
7. 医療・介護サービスを担う人材の育成……「認知症ライフサポートモデル」（認知症ケアモデル）の策定、認知症介護実践リーダー研修の受講者数、認知症介護指導者養成研修の受講者数、一般病院勤務の医療従事者に対する認知症対応力向上研修

認知症の出現率は年齢が高くなるにつれて上昇するため、今後もさらに増加すると推計される。子どもと高齢者の世代間交流を考えると、認知症症状についての理解や支援を考える必要があるであろう（2012年9月厚生労働省公表 新オレンジプラン）。

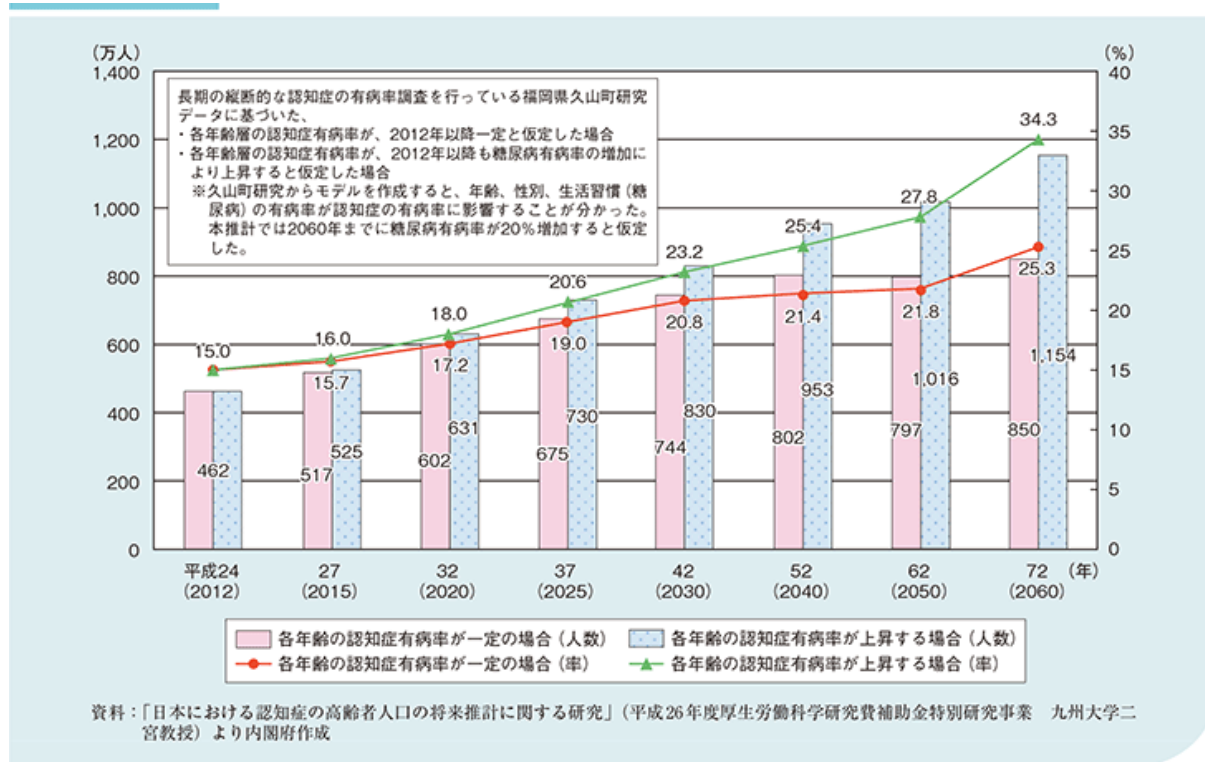


図6 65歳以上の認知症患者数と有病率の将来推計  
平成28年度版高齢者白書（全体版） 内閣府

## 第2章 世代間交流に関する歴史と近年の動向

現在の我が国において、世代間交流は、その必要性は理解されてきている。しかし、世代間交流はあまり進んでいない。そこで本章では、我が国の世代間交流の歴史的進展と近年の動向について明らかにする。

### I 我が国における世代間交流の歩み

今日、世代間交流が様々な場で注目され、その必要性が叫ばれるようになっているが、世代間交流とは何なのか、その定義を確認しておこう。すでに述べたように、筆者は、草野（2004）が『インタージェネレーション—コミュニティを育てる世代間交流—』において、「世代間交流」を「子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人ひとりが活動の主役となることである」と定義しているのを受けて、世代間交流を「子ども、青年、壮年及び高齢者という世代の異なる人々が相互に交流し、互いに自分たちの持っている能力や知識・技能を出し合い、自分自身を向上させるとともに、互いの生活文化や価値観への理解を深め、かつ、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動である」と定義する。

草野（2004）によれば、19世紀の日本において世代間交流は、ごく普通のことであり、明治初期に日本を訪れた欧米人も、日本ではどこへ行っても子どもの姿が見られ、家族で農作業をしたり、大人がどこへ行くにも子どもを連れて行ったりといった光景が見られたと感動的に述べているという。もちろん、現代の日本においても子どもの姿や子どもを連れてくる大人たちを見ることはできるが、かつての欧米人たちが述べているほど印象的な光景ではないのではないかと考えられる。そんな印象を与えていた日本であるが、いつの間にか日本においても世代間交流は計画して、意図的に行わなければならないものになってしまった。

草野（2004）は、その世代間交流の歴史について1960～1970年代と1980年～現代に分けて述べている。

## 1 1960年～1970年代

日本では、第二次世界大戦後に新憲法、新民法などが制定され、「家」制度の廃止、夫婦家族制度の導入により社会の価値観や意識が大きく変化した。1960年前後から産業構造の変化により、第一次産業から第二次産業、第三次産業が急激に増加し、人々は農村から都市へと移住し、人口の都市集中、地方の過疎化がもたらされた。また三世代家族が減少し、核家族化がもたらされた。家族形態の変化により家族の機能も変化して、家族の教育力の低下が指摘されるようになった。

この時期には、日本の伝統や文化を次世代に伝承することや高齢者の社会的孤立を防ぐことなどを主な目的として、自然発生的な世代間交流が地方にも都市部にも生まれてきた。老人クラブや保育所(園)、子ども会など、地域を中心とした取り組みが見られたが、その数はまだ少ない状態であった。1970年頃からは学校を中心とした形態のものも少しずつ実践されてきた。

この時期の世代間交流には、現在の世代間交流に連なるような活動が増えてくるが、まだ「世代間交流」という名称は使われていなかった。

## 2 1980年～現在

1980年代から「世代間交流」という言葉が、家族以外の世代間交流、地域での世代間交流の意味で使われるようになった。全日本社会教育連合会の月刊誌『社会教育』が1981年12月号において初めて「世代間交流と社会教育」という特集を組み、文部省(当時)が1984年に開始した「高齢者の生きがい促進総合事業」の一つとして「世代間交流事業」という名称が各地で用いられるようになると、世代間交流は家族以外の世代間交流として認知されるようになった。

1980年ころから、高度成長期に入り、都市化、過疎化が本格的に進行した。大都市、首都圏への一極集中から多極分散型のコミュニティづくりが言われるようになり、家族は、核家族化、単身家族化、個人化傾向を強め、同時に女性の就業、高学歴化が進み、子育てや介護に関連した諸問題が社会問題とみなされるようになった。

1990年代以降になると、少子高齢化はさらに進行し、そのような中で、高齢者施設と保育所(園)・幼稚園などの子どもの施設を合築・併設し、そこで「統合ケア」を行うといった試みも増えていった。しかし、それによって各施設に、世代間交流の計画・実施等を行うスタッフ、コーディネーター等が配置されていないこと、世代間交流の必要性が十分に

認識されていないことが明らかになっていった。1990年代以後、高齢者福祉施策として施設から在宅重視の施策が打ち出された。また少子高齢化への対策として、国や地方自治体による子育て支援の方策が打ち出された。

1993年、総務庁老人対策室では、同年に行った「世代間交流に関する調査研究」の結果を基に、市町村の施策担当者向けに「高齢者との世代間交流の手引き」を作成している。

1994年3月、厚生労働大臣の私的懇談会「高齢社会福祉ビジョン懇談会」が「21世紀福祉ビジョン～少子・高齢社会に向けて～」を提言し、そこにおいて、「高齢者、障害者、子どもたちがともに安心して暮らすことができるゆとりとふれ合いの住宅・まちづくり」と併せ、高齢者、障害者、子どもなどを含め、「地域に住む人々の精神的な絆を強めるような交流の促進、世代間の文化や生活の知恵・知識の伝承が図られる」ような「現代の井戸端会議」を意識的に現出していくことが大切であると強調された。そして、そのような世代間交流の一環として、学校や福祉施設、社会教育施設における地域住民との交流や、学校と福祉施設、保育所(園)と老人ホームの合築・併設、隣設や交流を進めていくことも有益であると提唱された。

1997年9月の中央教育審議会第二次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」は、第5章において「高齢社会に対応する教育の在り方」について論じ、今日、子どもたちが日常生活の中で、高齢者と触れ合う機会は減少する傾向にあるので、「今後、幼稚園から高等学校までの各学校段階において、子どもたちと高齢者が実際に交流し、触れ合う体験活動や、子どもたちが高齢者の介護や福祉に関するボランティア活動を体験することなどを一層重視していくことが必要である」と述べている。こうした取組を進めるに当たっては、学校のみではなく、地域社会や学校外の関係施設と積極的に連携していくことが大切であり、具体的には、介護や福祉の専門家の協力を求めたり、青少年教育施設や公民館等の社会教育施設、高齢者福祉施設や青少年団体、社会教育団体、福祉関係の団体などと連携を図ったりすることを提唱している。

さらに、答申は、具体的な体験活動として、地域や学校の実態に応じ、幼稚園や小学校の段階においては、地域の高齢者を学芸会や運動会などの学校行事などに招待したり、高齢者福祉施設を訪問し、高齢者の豊かな体験に基づく話を聞いたりするなど、高齢者との触れ合いを行うプログラムに積極的に取り組むことが大切であると提言し、幼稚園や小学校段階で、実際に介護体験を行うことについては、子どもの発達段階から難しい面もあるが、高齢者福祉施設などを訪れ、実際に高齢者を介護している様子を見たり、介護の簡単

な手伝いを行ったりするなどの工夫をしつつ、取り組んでいくことも考えられると述べている。

1998年6月30日の中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために」は、子どもたちが創造的で活力に満ちた国をつくる営みや地球規模の課題に取り組み、世界の中で信頼される日本人として育つよう、社会全体で子どもたちの「生きる力」を育むことが大切であるとし、この「生きる力」を育てる学習活動において「世代間交流活動が担う役割には大きいものがある」と指摘し、身近な地域のボランティア・スポーツ・文化活動、青少年団体の活動、地域の行事に積極的に参加させることを推奨している。

これらを受けて、1998年12月に公示され、2002年4月に施行された小学校学習指導要領において、その第1章「総則」の第5「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の(11)に、「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間や幼稚園、中学校、盲学校、聾学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること」が規定された。

## II 世代間交流の近年の動向

21世紀に入っても、我が国における少子・高齢化は一層進行し、高齢者と青少年との世代間交流の必要性とその意義が強調され、かつ、国及び地方公共団体を挙げて様々な施策が講じられているにもかかわらず、各種調査を総合すると、高齢者は、とりわけ若年層との交流機会が少ない状況にある上、少子化による若年層の減少はこれをさらに推し進めるであろうと予想される。

保育所における地域に向けた取り組みは、1987年の「保育所機能強化費」の予算措置に始まり、1989年には、「保育所地域活動事業」が創設される。さらに、1994年のエンゼルプラン策定以降、保育所には、地域に存在する最も身近な児童福祉施設として、地域の子育て支援の役割がより積極的に求められるようになった。渡辺(2004)も言うように、厚生省は、1987年から、保育所措置費の中に保育所機能強化推進費加算項目を作って、延長保育、地域の実状に応じた特別の保育科目（老人福祉施設訪問等世代間交流事業、地域の異年齢児との交流事業、入所児童の保護者への育児講座、郷土文化伝承活動）を設定するなどの保育所機能の強化推進を図るための経費について加算するようになった。これは、1989



年度からは「保育所地域活動事業」に組み込まれ、補助金に切り換えられた。保育所における地域活動事業は、保育所が地域に開かれた児童福祉施設として、日常の保育を通じて蓄積された子育ての知識、経験、技術を活用し、また保育所の場を活用して、子どもの健全育成及び子育て家庭の支援を図るものである。このため、保育所は、通常業務に支障を及ぼさないよう配慮を行いつつ、積極的に地域活動に取り組むように努める。保育所地域活動は、市町村の保育担当部局や他の保育所など関係施設や機関とも密接な連携をとりつつ、多様化する保育需要への対応、地域に開かれた保育所として専門機能を地域に生かすことを趣旨として、12項目の事業の中に「世代間交流」も含められ、老人福祉施設・介護老人保健施設等を訪問したり、施設や地域のお年寄りを招待したりして、劇、季節的行事、玩具製作、伝承遊び等を通じて世代間の触れ合い活動が行われている。

1998年12月に改訂され、2000年度より施行された『保育所保育指針』や『幼稚園教育要領』では、幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園や保育所における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること、その際、地域の自然、人材、行事や公共施設などを積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫することが求められている。そして、『保育所保育指針』には、「幼児の生活と関係の深い人々と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、高齢者をはじめ地域の人々などに親しみをもち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること」が規定されているし、『幼稚園教育要領』にも、「人間関係」において「高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」という内容が規定され、その取扱いとして、「幼児の生活と関係の深い人々と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、高齢者をはじめ地域の人々などに親しみをもち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること」が挙げられている。

なお、2008年3月に改訂され、2009年4月より施行された現行の『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』においても、ほぼ同様の趣旨のことが規定されている。すなわち、幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園や保育所における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること、その際、地域の自然、人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫することと

されている。また、「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」という内容が規定され、その取扱いとして、『幼稚園教育要領』では、「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみを持ち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること」が挙げられている。

さらに、2017年3月に改訂され、2018年4月より施行される『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『幼稚園教育要領』においても、ほぼ同様の趣旨のことが規定されているが、これまで、例えば、『幼稚園教育要領』で「幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること、その際、地域の自然、人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫するものとする」とされていたものが、「地域の自然、人材」に新たに「地域の自然、高齢者や異年齢の子供などを含む人材」と「高齢者」が「異年齢の子供」と共に書き加えられていることが注目に値する。そして、これまでと同様、「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみを持ち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること」も挙げられている。

このように、高齢化・長寿化が進む中で、保育所や幼保連携型認定こども園、幼稚園の段階から高等学校までの各学校段階において、子どもたち自身が高齢者となったときに生き生きと充実した生活を送ることができるような基礎を培うことが極めて重要であることが繰り返し強調されるようになってきている。同時に、子どもたちの発達段階に応じ、子どもたちが、高齢社会はどのような社会であり、今後、どのような問題が生じるかなどといった、高齢社会についての基礎的な理解を深め、介護や福祉の問題などの高齢社会の課題について考えを深めていくことも重要であることは言うまでもない。

もちろん、高齢者と触れ合う体験活動を行うに当たって留意すべきことがあることも事実である。

まず、何よりも、子どもたちと高齢者が対話を通じて、「心の交流」をすることが重要である。今日でも、様々な交流が試みられているが、ややもすれば、子どもたちが高齢者

の話聞くだけという一方的な形にとどまっている場合も見受けられ、一層の工夫が望まれる。

次に、体験活動を具体的に展開していく方法は様々であり、子どもたちの個性や、学校・地域社会の実情に応じて柔軟に考え、できるところから始めることが大切である。一例を挙げれば、それぞれの地域では、伝統的な祭りや町おこしの行事、スポーツ大会やレクリエーション大会、環境美化や防災の活動、図書館・公民館や福祉施設での催し、外国人との交流行事など、様々な活動が盛んに行われるようになってきているので、子どもたちがそのような活動に積極的に参加して、地域の伝統や文化に目を向け、愛着を深めたり、地域で活動している様々な人々、なかでも高齢者とのつながりを求めたりすることが考えられる。

さらに、介護などの体験活動を行う際には、子どもたちが「高齢者のために何かをして役に立つ」という気持ちを持つことに止まらず、「高齢者から自分たち自身が学んでいる」という気持ちを自然に培っていくことが重要である。かくして、世代間交流は、高齢者が若い世代、なかでも子どもたちとの交流によって生き甲斐を感じ、地域社会に貢献するとともに、若い世代、なかでも子どもたちも高齢者との交流を通して地域の文化に目覚め、地域の人々と豊かな関係性を持って成長して行くことを目指して、各地で盛んに行われるようになった。また、『平成28年度版 高齢社会白書』（2015）によれば、高齢者で若い世代との交流に参加したいと考える人の割合（「積極的に参加したい」、「できるかぎり参加したい」と回答した人の合計）は2013（平成25）年で59.9%となっており、10年前に比べると7.2ポイント増加している（図7）。

それにもかかわらず、残念ながら、我が国における世代間交流は欧米のように進んではいないのである。關戸(2006)は、全国の700の幼稚園及び700の保育所に対して、幼児と高齢者の触れ合いに関する実態調査を行った。その結果、交流の機会が多くなると考えられる高齢者の利用施設が併設されている幼稚園・保育所はまだ少ない状態であった。また、高齢者と触れ合う機会をまったく設けていない幼稚園が2割、保育所が1割あった。高齢者との触れ合いを実施している場合でも、年に1～2回から数回という回答が多かった。また「今後ふれあいの頻度を増やすか否か」という問いには、「増やしていきたい」と「このままでよい」がほぼ同数であった。「もう少し減らしたい」という回答はなかった。「現在のままでよい」と回答した理由では「仕事が多く職員の負担をこれ以上増やせない」という内容が最も多かった。

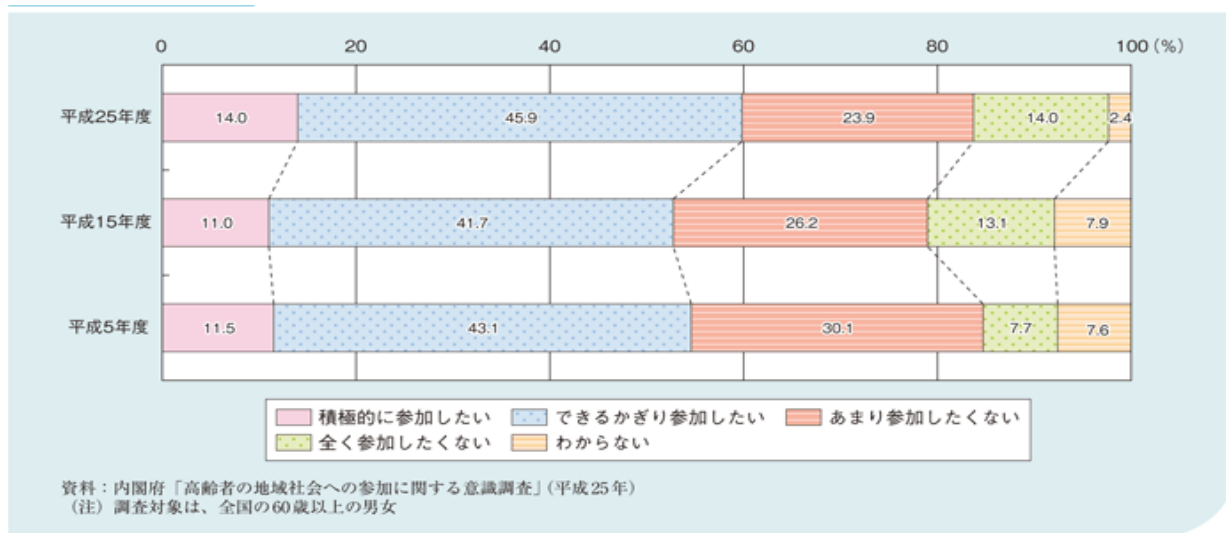


図7 高齢者の若い世代との交流の場の機会の参加意向  
平成28年度高齢者白書（全体版）内閣府

また、もう一つの理由として、「幼児と高齢者の健康面」が挙げられていた。藤原（2012）によれば、世代間交流プログラムの普及を阻害する理由として次の三つがあるという。一つ目は心理・社会的側面から生じる世代間の確執で、世代の離れた人々が、安易で短期間の交流でポジティブな効果が得られるとは考えにくいというものである。二つ目は便利な日常生活で世代が支え合う必要性が希薄になってきたというものである。「おばあちゃんの知恵袋」よりインターネットやスマートフォンなどで直ぐに必要な情報が検索できる。携帯電話やコンビニエンスストア等の発達で、小学生くらいになると祖父母に頼まなくても留守番をさせられる。子ども自体も学童クラブ、塾、習い事などで忙しい。また高齢者を取り巻く環境も変化しており、スーパーで惣菜を買い、介護サービスを利用すれば子どもと同居しなくても自立生活ができるようになった。三つ目は世代間交流を企画・運営するのは施設の職員がすることが多いが、そのことによる職員の負担が増加していることである。

本章では、次に、世代間交流を広げ深めていくための方策として、世代間交流を施設での交流に限定しないで地域に広げていく「地域化」と、ゲームや発表などの交流のみでなくプログラム内容の「多様化」を図ることが必要であることを文献より説明する。

### Ⅲ 世代間交流の地域化と多様化

#### 1 子どもを対象とする地域活動

##### (1) 児童館での世代間交流

児童館は児童福祉施設の一つとして児童福祉法第40条に規定され、地域児童の健全育成を主たる目的とする「児童厚生施設」として位置づけられている。児童（児童福祉法上0歳～18歳未満の子ども）に健全な遊びを与え、その健康を増進し、または情操を豊かにすることを目的として設置される屋内型児童厚生施設である。屋外型児童厚生施設は「児童遊園」という。児童の遊びを指導する専門家によって、季節や地域の実情などに合わせた健全な遊びの指導が行われている。また児童への直接処遇のみでなく、子育ての地域拠点として、主に在宅子育て家庭への支援もする。

地域の実情に応じて、子ども会や母親クラブなどの地域組織活動の基地としてその育成指導を行うとともに、放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業）を併設することもあり、地域の子育て環境づくりや放課後児童の居場所づくりを担っている。現在では、全国に約4300（2011年現在）を数える施設数となり、児童福祉施設としては保育所に次いで多い施設となっている。「児童養護施設」や「保育所」などの施設は「措置」や「契約」を基本として、入所もしくは利用者である児童が限定されている。しかし、児童館は、0歳から18歳までの児童と児童の保護者であればいつでも自由に利用できる。

児童館は屋内型の福祉施設であるが、その活動は建物内にとどまらない。地域児童の健全な発達を支援するための屋内外の地域活動をはじめ遠隔地でのキャンプなど、必要な活動の一切を含んでいる。子育て家庭の子どもたちが安定した放課後を過ごせるように、登録制で毎日学校から直接来館する放課後児童クラブ事業や、育児不安に陥りがちな子育て中の母親を支援する午前中の幼児クラブ活動などは、まさに児童のデイサービス事業と言える。また、不登校やいじめへの対応、虐待など深刻な児童問題の早期発見の場としても期待されるほか、家庭や学校、児童相談所と連携しつつ、子どもが自立できるよう支援する活動も増加している。

豊倉（2009）は、児童館での活動について次のように報告している。2008年に、子どもふれあいフェスタを開催し、町内の自治会をはじめとする人たち、小学生、高校生、高齢

者、乳幼児と母親グループなどが参加しイベントを盛り上げた。その後も町内の人々による保育や事業への参加・協力があり、子育てや子育てを応援している。

さらに、「遊びの施設」として根づいてきた児童館は、子どもの最善の利益を保障する地域福祉活動の拠点施設として、福祉的機能を発揮し、高齢者との世代間交流も今後さらに増えていくことが期待される。

## **(2) 地域子ども教室での世代間交流**

地域のまとまりや地域の人々の関係性が薄れて行く中で、世代間の交流や学習で地域社会の活性化が図られ、「明るい住み良いふるさとづくり」や「ふるさとふれあい活動」など、様々な活動が行われてきた。

佐々木ら（2006）は、山口県内の「地域子ども教室」を対象に質問紙調査を行った。その結果、特定の活動を行うタイプと、様々な活動を行うタイプがあった。多かった活動内容は、「スポーツ活動」と「ものづくり・科学的な活動」、「自然体験活動」、「世代間交流」であった。具体的な活動場所としては、小学校、公民館、図書館、民族資料展示室、体育館などがあった。自由記述による意見として、「地域住民の協力を得ることや、コミュニティの再生などのきっかけ作りにはなると思うが、地域での理解を得るにはかなりの時間がかかると思う。また子どもにとって安全であるべき学校は様々な事情で利用できないことなどから、ただのイベントで終わってしまう」「子どもたちはスポーツ少年団などの活動をしている場合が多く、小規模な所では子ども教室の必要性を感じない」などの意見があった。

## **(3) 保育所機能の強化推進による世代間交流**

幼児の保育についても、単に保育所の同年齢の集団保育だけでなく、地域の人々と高齢者との交流、異年齢児交流、地域の伝統を生かした保育内容、地域の福祉的需要への貢献、地域の子育て支援等の必要性が認識され、「地域に開かれた保育園」を追求する方向が国の施策として打ち出されて来た。

厚生省では、1987年から、保育所措置費の中に保育所機能強化推進費加算項目を作って、延長保育、地域の実状に応じた特別の保育科目（老人福祉施設訪問等世代間交流事業、地域の異年齢児との交流事業、入所児童の保護者への育児講座、郷土文化伝承活動）を設定するなどの保育所機能の強化推進を図るための経費について加算されるようになった。こ

これは1989年度からは保育所地域活動事業に組み込まれ、補助金に切り換えられた。事業の実施状況は初年度で世代間交流は578カ所、郷土文化伝承活動は105カ所であったが、急速に拡大して、2000年度は、延べで、世代間交流は8715カ所、郷土文化伝承活動は1710カ所であり、2001年度は郷土文化伝承活動が世代間交流に統合され、実施保育所は全国で延べ9042カ所であった。

#### (4) 子育てサロンでの世代間交流

高橋ら(2015)は、東京の板橋区に存在する多世代が参加する子育てサロンの活動を紹介している。サロンとしての登録は、「原則として月1回以上、板橋区内で地域住民による『誰もが気軽に参加できるサロン活動』を自主的・主体的に行っているグループ」であれば可能であり、2014年5月時点において、225カ所のサロンが活動を行っている。具体的な活動例としては、茶話会や趣味、健康体操、情報交換などによる仲間づくりなどがあり、サロンの運営主体も高齢者や障害者、子育て中の親子など多様である。また、「誰もが気軽に参加できる」ことから、活動の種類によっては子どもから子育て世代、高齢者に至るまで様々な年代の参加者が集まり、さながら多世代による世代間交流サロンの装用を呈しているものも少なくない。子育て世代は育児における不安や悩みを子育ての経験を持つ高齢者や専門家に尋ねることで、その不安を軽減できると推測されている。高齢者にとっても、子育て世代への支援は世代性意識や養護性の発揚につながるものと考えられ、多世代が参加する子育てサロンは、子育て世代と高齢者の両者にとって有益な場となっている可能性が示唆された。参加者は、ほとんどが女性で、参加者の95%以上が活動への満足感を持ち、また今後も活動を継続する意思を持っていた。サロンの持続的な発展を目指す上でも、活動への満足度を高く維持すること、活動継続の意思のある参加者を多く抱えることが重要である。

## 2 高齢者を対象とする地域活動

世代間交流は保育所、幼稚園が主体となっていて行われているだけではなく、公民館、社会福祉協議会、老人会、老人福祉ケア施設等が主体となったり、それらの団体や機関同士の協力で行われていたりすることも多い。「心豊かな長寿社会を考える国民の集い」(総務庁高齢社会対策室)でまとめた「平成11年の世代間交流活動事業例一覧」では、全国から

多くの事例が挙げられている。事例の数は、33の団体中、老人クラブ16、趣味の会・ボランティアグループ8、保育所・小学校2、趣味の会会員相互の世代間交流2、その他5であった。

### (1) 老人クラブでの世代間交流

世代間交流を支える組織として、老人クラブが保育所や小学校との世代間交流を進めている、島根県海士町（隠岐群島中の島）の事例がある。海士町では地域の老人クラブが14あり、3カ所の保育所、2カ所の小学校と年間を通じて交流を行っている。老人クラブとしての社会参加活動は、①交流事業：元気高齢者が独居高齢者を訪問する「友愛訪問」と、地区と地区が親睦を深めるための「地区間交流」 ②65歳未満の次期会員候補者及び会員以外の高齢者との交流事業 ③保育所・小学校との交流の三つがあり、保育所や幼稚園との世代間交流については、保育所、小学校の要請に基づき、老人クラブから必要な人材を派遣する形を取っている。人材派遣の基は公民館のシルバー人材養成事業にあり、老人クラブ連合会から公民館に人材を登録したのが始まりである。

## 3 伝統芸能を取り入れた活動

伝統とは、広辞苑によると、「ある民族や社会・団体が長い歴史を通して培い、伝えてきた信仰・風習・制度・思想・学問・芸術など。特にこれらの中心をなす精神的な在り方。また芸能とは、芸術と技能・詩歌・音楽・絵画・工芸・書道・生花・茶道などの汎称」となっている。

小・中学校では2002年に、高校では2003年に総合的な学習の時間や学校完全5日制などが含まれた、新学習指導要領が施行された。近年の地方分権化の流れを受け、新学習要領では学校や校長の裁量権が以前より拡大し、画一的な教育から地域や学校の事情に即した教育へと変化してきている。新学習要領で創設された総合的な学習の時間は、地域の人材を積極的に活用し、地域社会と学校の交流を促進することを目的の一つとしている。

山崎（2005）は、富山県五箇山地方における学校教育に民謡を取り入れる活動について研究している。五箇山地方では、戦後間もない頃から、民謡を学校教育の中に取り入れることによって、学校と地域とが一体となって教育に取り組んでいる。最初はレクリエーション的民謡といった傾向が強かったが、現在では学校教育の多くの時間で民謡を題材に取り上げ、郷土について学習するといった学校全体での取り組みが進んでいる。しかも学校



側が主体として行っているのではなく、地域の保存会が率先して行い、教員は生徒の引率や時には生徒とともに学習者として民謡を学んでいる。しかし、14歳から60歳代の7名にインタビューした結果、積極的に参加している子どももいる反面、子どもたちの中には「学校で強制的にやらされている」「他のみんながやっているから」といった意見もあることが分かった。

桂（2007）は、インターネットを通じて個人の好みの音楽を簡単にダウンロードできるなど、音楽の個人化が進み、地方の過疎化が進んでいる現在においては、昔ながらの生活様式を基盤として地域の共同体によって芸能を継承していくことは難しく、芸能を継承していくためには新たな方法を模索する必要があると述べている。

芸能が演奏される祭礼などの地域の行事及びその運営に多くの住民が参加することにより、行事やそこで演じられる芸能を自分たちが担っているという意識を持てるようにする。参加するものの居住地を、芸能が本来伝承されてきた狭い地域に限定せず、外部の者を取り込むことも必要であると述べている。

以前は町の住民が囃子や踊りに加わることはなかったが、現代では町の住民が多く加わるようになり、近郊農村と町の区別が薄れているということである。芸能が伝承されている限られた地域の芸能としてではなく、もっと広い範囲の住民も取り込み、周辺地域も含めた広い地域の芸能として、担っていくことが必要である。

また、観光客など、外部の者を行事に多く呼び込むことも一計である。行政機関等の後押しにより、演じる者の晴れの場となるような機会を設け、また見る者の目を楽しませる地方らしさを演出していくことが、これからの芸能の伝承には必要ではないかと考える。強制されてまでしたくないという人がいる反面、やってみたいと思う人もいる。参加者が増えることによって活気ある活動となり、そのことから伝統芸能を大切にしたい、継承していきたいという気持ちになっていくのではなかろうか。

#### 4 ボランティア活動

阪神淡路大震災や東日本大震災を契機として広がったボランティア活動は、被災地に元気を与え、復興に重要な役割を果たしてきた。

被災農山漁村における農林漁業の再開やこれに関連する集落共同活動などを応援するボランティア活動について、国民各層の参加を促進することは重要である。その中に「ふ

るさとふれあいプロジェクト」がある。「ふるさとふれあいプロジェクト」は、農山漁村体験やボランティア活動など、ふるさととの交流や応援を通じて、「人」と「ふるさと」を活性化していくプロジェクトである。このプロジェクトは、被災地域を初めとした農山漁村におけるボランティアへの参加を促進するために始められた。農山漁村におけるボランティアに対するニーズと都市住民を初めとするボランティアの参加希望者のニーズとのマッチングを図ることなどが盛り込まれた。

藤原ら（2006）は、高齢者の社会的役割と知的能動性を継続的に必要とする知的ボランティア活動として、子どもへの絵本の読み聞かせによる介入研究を継続的に行っている。2004年に一般公募で60歳以上のボランティアを募集した。そのボランティアによる、地域の公立小学校、幼稚園、児童館への定期的な訪問・交流活動を開始した。2004年に行った調査の結果、9カ月間の世代間交流を通じた知的ボランティア活動により、健常高齢者の主観的健康感や社会的サポート・ネットワークが増進し、地域共生意識の向上、体力が一部向上するなどの効果が見られた。また孫との交流頻度も優位に増加した。これは、絵本の読み聞かせボランティアを行うことによって、自分の孫にも絵本を読んであげたいなどの気持ちが起こり、孫とのコミュニケーションの増加につながったと考えられる。さらにこのボランティアを通じて、近隣以外の友人・知人の数も有意に増加している。また趣味のサークルとは違い、子どもへの気持ちに応える活動が求められることから、入念なリハーサル、緊急時の代役を立てるなど、ボランティア同士が協力し合うようになった。また自分自身でも健康を保つ等の意識の向上や有用感といったことが主観的健康感の向上につながっていると考えられる。

### 第3章 各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流

本章では、各世代の子どもと高齢者との世代間交流の現状と課題について検討するとともに、世代間交流の中でも幼児と高齢者の世代間交流に着目することの意義と必要性を文献から明確にする。

#### I 子どもと高齢者の世代間交流の現状と課題

我が国の少子高齢化や核家族化による影響は、子どもたちを取り巻く環境を大きく変化させている。このことが今日子どもたちが巻き起こす暴力行為やいじめなどの問題行動とも関連があるとも言われている（松本，1999）。2000年度の「我が国の文教施策」（2001）においても、子どもたちに対人関係のルールを教え、自己規律や共同の精神を育み、伝統文化を伝えるといった役割を担ってきた家庭や地域社会の「教育力」が著しく低下し、このことが、いじめや不登校、青少年の非行問題の深刻化などの様々な問題が生じる背景となっていると述べられている。

草野（2004）は、世代間交流の利点について次の六つを挙げている。（1）子どもにとって家族や学校だけに限定された人間関係の拡大（2）高齢者の社会的孤立を防ぐ（3）高齢者の能力、英知、経験の社会的活用（4）交流を通じての地域社会の統合（5）歴史的・文化的交流と伝承（6）社会問題の解決である。

さらに、子どもの年代別における世代間交流の先行研究から、世代間交流の意義や課題を考察し、特に幼児と高齢者の世代間交流の重要性を考察する。

##### 1 乳幼児期にある子どもと高齢者の交流

關戸（2006）は、高齢者と触れ合った体験が、幼児の成長に伴って将来どのような効果となって現れるのかを知る目的で調査を行った。全国の保育所・幼稚園のうち各700施設を抽出し、その職員にアンケート用紙を郵送した。その結果、高齢者と触れ合うことで将来に期待される効果として多かった回答は、「高齢者を大切にようになる」で87.2%、「人のことを思いやることができるようになる」、「家族を大切にようになる」、さらには「性格がやさしくなる」、「人を援助することができるようになる」、「人の命を大切に考

えられるようになる」であった。「どちらともいえない」と回答した項目は「自分に自信がもてるようになる」、「協調性が豊かになる」であった。

土永ら（2005）は、愛知県及び大阪府の公立保育所各 300 施設、計 600 施設に質問紙調査を行った。回答があった施設で保育所と併設している施設があるのは、13.8%であった。そのうち半数が「高齢者福祉関係施設」で、「保育所以外の児童福祉関係」が 28.6%であった。交流内容は、「高齢者を保育所の行事に招待して交流する」、「相手先の行事等に訪問して交流する」が多かった。交流活動を推進していく上での問題点は、「職員間の理解・協力」、「担当職員の負担」、「活動費」であった。交流活動の実施による変化は、『園児』では、「高齢者への関心・理解が深まる」、「社会福祉（弱者へのいたわり・思いやり）への関心」であった。『職員の変化』では、「高齢者への関心・理解が深まる」、「社会福祉（弱者へのいたわり・思いやり）への関心」、「世代の考え方や文化を学ぶ」であった。

内田ら（2012）は、兵庫県 A 市に在住する 62 歳以上の高齢者 38 名と乳幼児のいる母親 23 名を対象に、2004 年から 2005 年の 1 年間にわたる育児支援活動（「絵本の読み聞かせ」「おんぶ・だっこ」「見守り」「声かけ」などの育児支援）が、高齢者の心身の健康と母親の育児ストレスへ及ぼす影響について検討した。その結果、高齢者には歩行時間の向上、自尊心尺度得点の有意な向上が見られた。また母親では、育児サークル不参加の母親のストレス度得点は上昇していたが、参加していた母親では上昇は見られなかった。

下村ら（2012）は、高齢者と子どもの合築施設で保育職員、介護職員、保育園児の保護者に対しアンケート調査を行った。保育園児保護者 70 名中 32 名、高齢者 50 名中 23 名、介護職員 40 名中 20 名の回収率であった。「保育園選択時に高齢者との交流が理由となった」と答えた保護者は 3 名であった。自由記述において、「年長者に対して、尊敬とやさしい心で接することのできる子になってほしい」、「昔ながらの遊びや知恵など、教えてもらえたらうれしい」等の肯定的な意見があった。しかし「発表などで接するのはよいが、病気のことなどを考えると直接触れ合ったりすることは避けてほしい」、「子どもが嫌いな高齢者もいる。うるさいといわれたら子どもはショックを受ける」、「子どもに暴言を吐いて泣かせてしまうということを知った」などの意見もあった。

高齢者への調査では全員から取ることはできず、23 名（46%）と低いものであったが、「毎日交流したい」、「行事での交流を充実してほしい」などの意見があり、「交流したくない」は 0 であった。また自由記述では「高齢者の中には子どもとの交流を煩わしいと思っている人もいると思うので、その状況に応じて静かな場所を用意する必要もあるのでは」

という意見もあった。

保育職員、介護職員への調査では、それぞれ 10 名中 4 名が「肯定的」と答え、「否定的」は保育職員の 1 名であった。「どちらともいえない」は、保育職員 3 名、介護職員 5 名であった。介護職員の自由記述では「園児はやらされているという感じ」、「認知症高齢者は園児からみたら恐怖」、「子ども自身も関わるのが難しいと感じているようにみえる。怖がっているような時もあった。高齢者はほとんどの方が喜んでいただろうが、なかには子どもが苦手な方もいた」、保育職員からは、「自分自身が、高齢者とどのように接してよいかわからない」という意見があった。また交流活動の減少の理由として、「施設間の時間調整の難しさ」、「人手不足・多忙」などが挙げられていた。

## 2 児童期にある子どもと高齢者の交流

築山ら（2006）は、一定の地域で、具体的にどのような種類の施設で、どのような内容の世代間交流の取り組みが行われているかを知る目的で、京都市と神戸市の社会福祉施設及び小学校に対し、世代間交流の実態について質問紙調査を行った。737 施設・機関、小中学校 254 校に郵送し、回収数は京都市 242、神戸市 95 であった。その結果、全体の 62.9 %の施設で世代間交流活動が行われており、その頻度は「年数回の交流」は 85.3%、「月に一度程度の交流」は 13.3%であった。施設ごとの回答では、幼稚園では「年数回の交流」が 100%、児童館では「月 1 度程度の交流」が 23.7%、「日常的な交流」が 13.2%、特別養護老人ホームでは「月 1 度程度の交流」が 33.3%であった。

交流の主な成果は「地域社会とのつながり」が 61.1%、「高齢者の生きがいがづくり」が 55.6%であった。交流の計画は「両方の職員が行う」が 77.8%であった。交流頻度は、年数回の単発・イベント的な世代間交流が多く（敬老の日、地域イベントの交流、高齢者施設への慰問・体験学習など）、交流内容は「娯楽活動」「表現活動」「文化的活動」が多かった。

金田ら（2008）は、京都市にある高齢者福祉施設と児童福祉施設の複合型の施設での取り組みについて研究を行った。この施設では、夏休みに小学生がデイサービスでボランティアをする活動を行っている。その中で A 姉妹がデイサービスを利用している高齢者に折り紙を渡すと、高齢者がお返しをし、また姉妹が訪れるということで交流が始まった。姉妹の感想として「やさしくなれた」、「今まで声を掛けにくかったがこれからは近所の人や知らない人に声を掛けられそう」という言葉が聞かれた。保護者からも地域とのつながりを

期待する声もあった。なかには自主的に福祉ボランティアにかかわる保護者も出て、保護者世代の福祉活動への参加促進効果がみられた。

森田ら（2012）は、東京都 23 区にあるデイサービスにおいて、小学校と利用者の交流の有無を実態調査した。その結果、1331 件の施設の内 66 件が交流を行っていた。ほとんどは小学校の授業の一環として行っていた。頻度は「1年に1回」が4割と多く、プログラムの内容は「表現を通じた交流活動」が6割、「娯楽を通じた交流活動」が4割であった。活動の形態は、運動会や音楽会で練習したダンスや歌を披露してもてなす「子ども主導の活動」が9割で、ゲームや折り紙等の創作活動を共にする活動は46.7%、高齢者主導の活動は1.5%であった。効果の評価方法については、高齢者の表情の観察や感想などの主観的内容がほとんどであった。

田中（2007）は、児童・生徒にとって価値ある体験となる学校教育における世代間交流のあり方の検討を目的に、長野市鬼無里地域の交流活動への参与観察を行い、交流が児童・生徒の高齢者に対する認識や交流への意識等にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするための質問調査を行った。対象は小学校2年生～6年生66名、鬼無里中学校1年生～3年生31名である。交流活動への参与観察結果として、①小学生は自分たちでできることをもっと担いたいと自主的に交流活動を計画して実践していた。②中学生になると交流活動は福祉への関心を高める契機となり、「今、自分たちにできること」という発想から、高齢社会が抱える様々な問題へと目が向いてきていることがうかがえた。幼児期に頻繁な交流を経験した子どもは高齢者をよりポジティブに捉える傾向があり、イメージが肯定的であるほど高齢者との交流活動に対する積極的な取り組み意欲が高いことが分かった。

藤原ら（2007）は、子どもが高齢者に対して抱くイメージは、同居家族数や祖父母との同居経験の有無には関連が見られず、幼少期の高齢者との交流経験が豊富か否かに依存していることが示され、少子・高齢化に伴う地域社会の変容があっても、交流経験を持つことによってイメージを良好に維持できる可能性が示唆されたと述べている。

### 3 思春期にある子どもと高齢者の交流

安永ら（2012）は、神奈川県のア中学校の全校生徒735名を対象に調査を行った。その結果、祖父母との交流が頻繁である生徒は高齢者イメージが肯定的であった。また学校の支援活動である高齢者との交流やボランティアに参加している生徒は、高齢者イメージの低下は見られなかった。

村山（2011）は、小学生時における高齢者の絵本読み聞かせボランティアとの世代間交流が中学校入学後の地域活動参加意識に及ぼす長期的効果について調査した。調査対象者は川崎市の中学1年生81人で、その中で小学生時にボランティアの高齢者と交流体験がある55人を「交流体験あり群」、交流体験がない126人を「交流体験なし群」として効果の検証を行った。その結果、「交流授業体験」が「高齢者ボランティアとの親密さ」、「絵本読み聞かせへの関心」及び「高齢者イメージ」を媒介として、中学校入学後の「地域活動参加意識」の向上に影響していた。また、「性別」として、男子生徒より女子生徒の方が「絵本の読み聞かせへの関心」を媒介にして「地域活動参加意識」が高くなっていた。

#### 4 大学生と高齢者の交流

草野ら（2012）は、まず大学生と地域の高齢者がかかわり、次に高齢者と乳幼児、乳幼児の父母、高校生と交流するというように、対象の年齢や人数を増やしていき、定期的な「あそぼうかい」へ発展させるという試みを行っている。その内容の一つに「『着物』を着る、着付ける会」があり、また大学祭では駄菓子屋と紙芝居屋を開いた。交流の効果として、地域の高齢者は、「大学へ行けば乳幼児や父母、高校生、大学生と交流が持てる」ことを期待するようになり、大学生は今後世代間交流の担い手となる基盤を作ることができた。

渡邊（2010）は、看護学生との交流事業による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化を明らかにする目的で研究を行った。対象は高齢者の生涯学習大学の2年生で、今回初めて看護学生との交流に参加した38名である。交流開始前と後に調査を行った。その結果、交流の前後で、「きちんとしている」、「あたたかい」、「何を考えているのかわからない」、「強い」の4項目で有意差があった。男性は各項目に大きな差はなかったが、女性では「きちんとしている」、「あたたかい」、「何を考えているのかわからない」、看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れたことによる「話しやすい」の5項目で有意な差が見られた。一番多いのは「これからの活躍が期待できる」で、「社会に貢献できるとは思わない」は減少した。

## II 高齢者から見た世代間交流の現状と課題

亀井ら（2010）は、看護大学教員と区民による多世代交流型デイプログラムを創設した。目的は、小中学生と高齢者世代の交流活動を通じ、参加者が知恵や文化等を相互に伝え合

うことによる、高齢者のヘルスプロモーションと小中学生の高齢者理解の促進等である。デイプログラムは週に1度、12カ月間行った。その結果、初回にはうつ傾向であった高齢者の高齢者抑うつ尺度（以下 GDS-15 とする）の得点が12カ月後には有意に低下していた。また高齢者が子どもに教える場面が多く見られた。観察された参加者間に見られた内容を分類すると12のカテゴリに分けられ、その内容は【高齢者が子どもの居場所をつくり迎え入れる】、【高齢者と子どもとボランティアがお互いを知る】、【ともに参加することで刺激を受けた高齢者が素直に子どもに感じたことを表現する】、【子どもの発言が増える】、【参加者にとって特別な意味ある居場所となる】、【高齢者・子どもが自分の役割を認識してできることをする】、【参加者（高齢者・子ども）が主張する】、【それぞれの世代で楽しむ】、【会を楽しみに待つ】、【余韻をあげよう】、【会の外に交流が広がる】、【スタッフが世代間の接点を模索してプログラムを運営する】であった。

山崎ら（2004）は、長野市及び更埴市の10カ所の保育園に孫が通う祖父母を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は男性65.7歳、女性62.7歳であり、女性は59歳以下が31.0%で最も多かった。孫との交流経験の有無では、「よくある」、「ときどきある」が93.6%と、多くの祖父母が孫との交流をしていた。孫とのかかわりがもたらす肯定的な影響として、「日々の生活にはりや楽しみをもたらす」、「若々しい気持ちになる」などの回答があった。交流する理由として、「家族として当然だから」、「母親1人では大変だから」という回答が見られ、そう答えたのは「同居祖父母」が多かった。「孫の世話が楽しいから」は「遠居の祖父母」に多かった。孫に対する自分自身の存在意義については、「優しさや思いやりの心が養われる」、「行儀や言葉使いがよくなる」、「広い人間関係を学ぶことができる」、「遊びなど昔のことを教えてもらうことができる」と回答している。しかし「孫はかわいいと一緒にいると疲れる」という回答も、祖父で58.7%、祖母で57.5%あった。

内閣府が2012年に団塊の世代の高齢者に行った調査では、「今後、どんな社会活動（地域活動、ボランティア活動）に参加したいと考えているか」という質問に、「趣味、スポーツ」と答えたのは31.8%、「1人暮らしなど見守りが必要な高齢者を支援する活動」は18.2%、「地域行事（地域の催し物の運営、祭りの世話役など）を支援する活動」は15.1%、「地域の伝統や文化を伝える活動」は10.9%、「子どもを育てている母親を支援する活動」は8.1%であった。

齋藤ら（2003）は、25歳から54歳の男女635名を対象に調査を行った。その結果、親の養育態度の中で、子が「親から尊重されて育った」と認識することが、青年の家庭行事



への参加実態の調査分析を通して「青年期の子どもと両親の絆の強さは、青年の発達を阻害する者ではなく、むしろ促進するものである」との成果を示していた。また、対象を性別で見ると「異性の親に尊重された」と感じられることが多くの項目と関連が見られた。

2016年の国民生活基礎調査によると、三世代世帯が減少し、夫婦と未婚の子のみの世帯が最も多く、次いで夫婦のみの世帯となっている。戦前の家制度があったころは、祖父母と子、孫の関係も深かったが、祖父母と孫の同居が少なくなったことで、祖父母の役割や子、孫との関係も変化していると考えられる。

家族の中に乳幼児がいる場合、その子どもを中心として家族の相互理解が深まり、世代間交流が豊富になる現実が多く見られる。日出幸（2003）は、3世代世帯では、子育てが母親のみに任されるのではなく、家族全員で育児に参加する中に、高齢者の知恵やパワーが活かされていくと考えられると述べている。さらに、幼稚園・保育園に通っている4～5歳時クラスの園児220人に面接調査した。その結果、男児女児とも8割の幼児が祖父母のことが好きだと答えていた。また子育ての状況も、参加の率は低いながらも、すべての項目にかかわっていた。具体的な行動としては、日常の8項目の育児行動（遊ぶ、通園の送迎、しつけ、病気の看護、食事の世話、風呂に入れる、着替えの世話、寝かしつけ）などであった。

八重樫（2003）は、幼稚園・保育所に子どもを通わせている母親を対象に自記式調査を行った。その結果、祖父母との同居は、父方祖父母が母方祖父母より同居率が高く、同じ市・町内に住んでいる祖父母は、いずれも30%であった。子育てに困ったときの相談相手は、配偶者が70.7%と最も多かった。続いて友人であった。子育ての知識・情報源については友人が64.1%と最も多く、次に自分の父母が58.9%、幼稚園・保育所の先生が51.2%であった。同居していない祖父母の場合、母方祖父母の方が孫との交流（訪問・電話）が多かった。直接的な子育て支援（食事の世話、お風呂に入れる）等より、間接的な子育て（物を買う・一緒に遊ぶ）の方が高かった。祖父母との距離・交流（訪問・電話）については、母親の子育て不安とは関連がなかった。

杉井（2006）は、奈良県の小学校、中学校、高等学校、大学に通う児童・生徒と祖父母223名を対象に調査を行った。父方祖父母との同居の割合が、中高生で29.9%、24.9%であるが、全体としては別居の傾向が高かった。孫が小学生期には孫と祖父母の関係は最も良好で、孫が中・高校生になると祖父母との関係はやや悪くなり、反発的で時には祖父母と喧嘩したり、煩わしいと思ったりするようになる。孫が大学生になると、祖父母との関

係が大人同士の関係として好転していた。祖父母との同居の有無では、別居が多い。親近感では、どの祖父母に対しても好感を持っていると回答されているが、孫の年齢で見れば、中学生・高校生になると祖父母に対してやや否定的になっていた。そのため、関係性も小学生時は情緒的にも金銭的にも祖父母と密接な関係を築いているが、中学生になると反発的な関係が多くみられ、孫の年齢による祖父母とのかかわりの違いがあった。

## 第4章 幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究

本章では、保育所・幼稚園の職員を世代間交流の対象としたアンケート調査の結果からその意義を考察する。

筆者（南部, 2013）は、文献研究から幼児と高齢者の世代間交流について検討した結果、それは幼児にとっては育ちを支援し高齢者へのポジティブな認識をもたらしていること、高齢者にとっても自尊感情や有用感が高まるなどの効果があることを明らかにした。一方、実際の交流の回数は年に数回であったり、幼児が高齢者施設を訪問したりする形式が多く、内容も行事や発表・ゲームなどが中心であった。また、課題として職員の負担が大きいことや、高齢者の認知症による症状に対する幼児の保護者の不安や、交流することによる感染症発症などの機会の増加への対処などが必要であるとの示唆を得た。

本章では、幼稚園、保育所に通う幼児と施設を利用する高齢者の世代間交流の実際や効果、課題などについてのアンケート調査を行った結果を報告する。

幼稚園、保育所に通う幼児と施設を利用する高齢者を対象としたのは、第2章でも述べたように、エリクソン(2001)によると、幼児期は自我が芽生える時期であり、それまでの母親との未分化な関係から自分でできることが多くなり、母親への依存とともに、母親からの自立への意欲が見られる時期であり、自信をつけるとともに、昂揚感を身につけることによって外界に積極的に働きかけるようになる時期でもあるし、また、高齢期は、人生を振り返り、自分が価値ある存在であったか否かを考える時期であり、文化や英知を次の世代へ伝承していくという課題の達成が求められる時期でもあるからである。

本章では、そのような幼児と高齢者との世代間交流の実際を知り、その効果や交流を継続するための課題を検討することとする

### I 幼稚園・保育所の職員を対象とした世代間交流のアンケート調査

#### 1 目的

大阪府 A 市における幼児と高齢者との世代間交流の現状や課題について、保育所・幼稚園の職員に対する質問紙調査を通して明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

### (1) 手続き

#### 1) 調査方法と対象

大阪府A市の幼稚園・保育所113施設へアンケート用紙を郵送し、保育士・幼稚園教諭へ質問紙の記入を園長を通して依頼し、記入後返送を依頼した。研究の趣旨を説明する文章を同時に送付した。

3歳児未満の保育のみを行っている施設は高齢者と交流活動をあまりしていないと考え、今回の調査からは除いた。

#### 2) 調査内容

質問紙の内容は、關戸(2006)や土永(2005)を参考にして、回答者の属性(回答者の役職、年齢、経験年数、)施設の種類と規模、交流の有無、実施回数、交流の対象、交流の方法及び内容、交流による効果、交流をしていく上での問題点、今後の交流回数についての調査項目を準備し(資料1参照)、該当する回答を選択してもらった。また、世代間交流について感じていることや考えていることについて自由記述をしてもらった。

#### 3) 調査期間

調査期間は、2014年7月18日から8月23日である。

#### 4) 倫理的配慮

調査に当たっては、事前に畿央大学の研究倫理委員会の了承を得て実施された。また、対象施設に対しては、協力しなくても不利益は生じないこと、個人情報の保護には十分留意し、研究目的以外には使用しないこと、研究終了後には資料を破棄することをアンケートに記載した。

## 3 結果

### (1) 回答者について

アンケートは幼稚園3施設、保育所59施設、合計62施設から返送があり、回収率は54.9%であった。

回答者の属性は、表1に示すように、所長などの管理職が多かった。また、表2に示すように経験年数も11年以上がほとんどであり、なかには40年以上の経験がある回答者も6.4%いた。また、回答者の所属する設置主体を表3に示した。公立が8施設、社会福祉法人53施設、株式会社1施設であった。

表1 回答者の役職

	n	(%)
保育所	59	
所長	37	(63.8)
主任保育士	10	(17.2)
保育士	11	(19.0)
その他 (園長、副園長、他)	1	(1.7)
幼稚園	3	
園長	1	(33.3)
主任教諭	1	(33.3)
その他	1	(33.3)

n = 62 注) カッコ内は保育所・幼稚園における%

表2 回答者の経験年数

経験年数	n	(%)
0～5年	7	(11.3)
6～10年	9	(14.5)
11～15年	12	(19.4)
16～20年	6	(9.7)
20～29年	17	(27.4)
30～39年	7	(11.3)
40年以上	4	(6.4)

n = 62 注) カッコ内は%

表3 設置主体

	n	(%)
公立	8	(12.9)
社会福祉法人	53	(85.5)
株式会社	1	(1.6)

n = 62 注) カッコ内は%

子どもの人数については、表4に示したように、70名から99名という施設が57施設(91.9%)と多かった。保育士の人数は、表5に示すように、30名以上が38施設(61.3%)と多かった。併設施設の有無についての問いに対しては、表6に示すように、「あり」が23施設(37.1%)、「なし」が39施設(62.9%)であった。「あり」の内容は表7のとおりで、高齢者施設と保育施設が多く、児童養護施設などの福祉施設を併設している施設もあった。

表4 子どもの人数

人数	n	(%)
50～69名	4	(6.5)
70～99名	57	(91.9)
100名以上	1	(1.6)

n = 62 注) カッコ内は%

表5 保育士数・職員数

人数	n	(%)
9名以下	2	(3.2)
10～19名	2	(3.2)
20～29名	20	(32.3)
30名以上	38	(61.3)

n = 62 注) カッコ内は%

表6 併設施設の有無

	n	(%)
あり	23	(37.1)
なし	39	(62.9)

n = 62 注) カッコ内は%

表7 併設施設の種類と件数 (複数回答)

	n	(%)
特別養護老人ホーム	9	(24.4)
デイサービス	2	(5.4)
老人保健施設	1	(2.7)
高齢者グループホーム	1	(2.7)
知的・身体障害者施設	5	(13.5)
児童養護施設	1	(2.7)
保育所・園 (分園)	17	(45.9)
母子福祉施設	1	(2.7)

n = 76 注) カッコ内は%

## (2) 交流の形態と内容について

子どもと高齢者の交流の有無では、表8に示すように、「交流している」が59施設で、「交流していない」は3施設であった。幼児が交流をしている対象者は、表9に示すとおりで、「在園児の祖父母・曾祖父母」が33施設、「デイサービスの利用者」が30施設、「老人ホームの利用者」27施設、「地元の老人クラブの会員」21施設であった。

表8 子どもと高齢者の交流の有無

	n	(%)
している	59	(95.2)
していない	3	(4.8)

n = 62 注) カッコ内は%

表9 幼児が交流をしている対象者 (複数回答)

対象者	n	(%)
在園児の祖父母・曾祖父母	33	(26.4)
デイサービスの利用者	30	(24.0)
老人ホームの利用者	27	(21.6)
地元老人クラブの会員	21	(16.8)
老人福祉センターの利用者	8	(6.4)
その他 (グループホーム利用者、 地域の高齢者、生き生きサロン 利用者)	6	(4.8)

n = 125 注) カッコ内は%

交流活動の頻度は、表10に示したとおり、「年に1回～2回規則的に行う」が24施設 (46.2%) と多く、続いて「年に3～5回」が14施設 (26.9%) であった。年に10回以上している施設も7施設 (13.5%) あった。「不規則に交流」している施設のうち、「年に6～10回」交流している施設は3施設 (42.8%) 見られた。

表10 交流活動の頻度

		n	(%)
規則的に交流 (52設)	年に1～2回	24	(46.2)
	年に3～5回	14	(26.9)
	年に6～10回	7	(13.5)
	10回以上	7	(13.5)
n = 52			
不規則に交流 (7施設)	年に1～2回	3	(42.9)
	年に3～5回	1	(14.3)
	年に6～10回	3	(42.8)
n = 7			

注) カッコ内は規則的の交流・不規則に交流における%

交流活動の実施動機では、表11に示すとおり、「世代間の親和を深める」が54施設と多く「幼稚園・保育所運営にとって必要な事業」が20施設、「高齢者が果たす役割に意義がある」が13施設であった。

交流活動の方法では、表11に示すとおり、「高齢者を招待して一緒に遊ぶ」が41施設で、「相手先に訪問して一緒に遊ぶ」が40施設で同じくらいであった。また「双方が日常的に交流」している施設が5施設あった。表13に示すように、交流活動の内容としては、「芸能や伝承遊びなど」が37施設、「発表会などの発表を通した活動」が39施設、「折り紙等の創作を通した活動」が22施設、「ゲームなどの娯楽」が28施設であった。その他の活動の内容として、盆踊りやマラソン、運動会、相撲大会、七夕、敬老会、クリスマスなどの行事に招待する、一緒にクッキングをする、芋ほりなどの農作業を共にする、保育の参観、保育所で作った野菜を地域の一人暮らしの高齢者のお弁当に使ってもらう、保育所で使う物（七夕のこよりなど）を作ってもらう、職員がダンスや盆踊り、コントなどをする、などの記述があった。

表 11 交流活動の実施動機（複数回答）

	n	(%)
世代間の親和を深める	54	(55.6)
高齢者が果たす役割に意義がある	13	(13.3)
幼稚園・保育所運営にとって必要な事業	20	(20.6)
行政庁からの推奨に応じた	3	(3.0)
その他	7	(7.2)

n = 97 注) カッコ内は%

表12 交流活動の方法（複数回答）

	n	(%)
高齢者を施設に招待して一緒に遊ぶ	41	(47.2)
相手先に訪問して一緒に遊ぶ	40	(44.9)
双方が日常的に交流	5	(5.7)
その他	2	(2.2)

n = 88 注) カッコ内は%

表13 交流活動の内容（複数回答）

	n	(%)
発表会などの発表を通じた交流活動	39	(26.4)
芸能や伝承遊びなどの交流活動	37	(27.2)
ゲームなどの娯楽を通じた交流活動	28	(17.1)
おり紙等の創作を通じた交流活動	22	(20.0)
複合施設などの日常的な交流活動	4	(2.9)
その他（盆踊り、マラソン、運動会、相撲大会、七夕、敬老会、クリスマス、一緒にクッキング、芋ほりなどの農作業、保育の山間、保育所で作った野菜を地域のひとり暮らし高齢者の弁当に使ってもらう、保育所で使うものを作ってもらう、職員のダンス・コント）	9	(6.4)

n = 145 注) カッコ内は%

### （3）交流活動による意義

交流活動による成果についての複数回答では、表14に示すように、「高齢者を大切にす  
るようになった」が39施設（28.3%）、「人を思いやることができるようになった」27施  
設（20.0%）、「感受性が豊かになった」12施設（8.7%）、「性格が優しくなった」10  
施設（7.2%）「自分に自信が持てるようになった」8施設（5.8%）と回答されていた。



表14 交流活動による成果（複数回答）

	n	(%)
高齢者を大切にすようになった	39	(28.3)
人のことを思いやることができるようになった	27	(20.0)
感受性が豊かになった	12	(8.7)
性格が優しくなった	10	(7.2)
自分に自信がもてるようになった	8	(5.8)
人を援助することができるようになった	9	(6.5)
家族を大切にすようになった	7	(5.1)
性格が穏やかになった	3	(2.2)
協調性が豊かになった	3	(2.2)
人の命を大切にすようになった	3	(2.2)
その他（感謝する気持ちが生まれる、高齢者を尊敬するようになった、地域の人に挨拶ができるようになった、人のやさしさやぬくもりを感じているようだ）	7	(5.1)
まだよくわからない	10	(7.2)

n = 138 注) カッコ内は%

#### （４）交流の実施回数と交流の動機、交流の意義

交流をしていると答えた施設の交流の実施回数を、交流活動を規則的に実施している回答と不規則で実施している回答を込みにして、交流活動の回数と交流の実施動機の関係の頻度の関係及び幼児が高齢者と触れ合うことにより子どもへの効果があったと答えた人について、交流を始めた動機により交流回数が異なるかについて、動機の項目ごとに「はい」と回答した頻度とカイ二乗検定した結果を表15に示した。年に1～2回交流している施設では、「世代間の親和を深める」目的で交流をしている施設が23と多く、行政庁からの推奨は少なかった。年に3～5回交流している施設では、「世代間の親和を深める」が多かった。10回以上している施設では、「世代間の親和を深める」がやや多く、「高齢者が果たす役割に意義がある」や「保育所にとって重要な事業である」と認識していた。各動機と交流回数についてのカイ二乗検定の結果は有意ではなく、動機により交流回数は有意には異なっていなかった。

表15 交流の実施動機と交流をしている回数との関係

項目 実施回数	世代間の親和を深める	高齢者が果たす役割に意義	保育所にとって必要な事業	行政庁からの勧奨
1～2回	23 (42.6)	4 (30.8)	9 (45.0)	1 (33.3)
3～5回	15 (27.8)	5 (38.5)	4 (20.0)	0 ( 0 )
6～10回	9 (16.7)	2 (15.4)	4 (20.0)	2 (66.7)
10回以上	7 (13.0)	2 (15.4)	3 (15.0)	0 ( 0 )
カイ二乗	3.466	2.132	0.771	5.895

n = 90 注) カッコ内は%

### (5) 交流回数と子どもへの効果

幼児が高齢者と触れ合うことにより子どもへの効果があったと答えた人の中で、交流回数により各交流の成果の項目の頻度が異なるかについて各交流成果について「はい」と回答した頻度とカイ二乗検定をした結果を表16に示した。

子どもへの効果については、表14の交流活動の成果で述べたように、「高齢者を大切にできるようになった」と答えている施設が一番多かった。頻度と意義の関係について見ると、年に1～2回交流している施設が一番多く、次が3～5回が10施設、6～10回実施している施設は8施設であった。交流頻度が多いと高齢者を大切にしようとする意義が高くなるのではなく、1～2回でも子どもたちは高齢者を大切にしようとする成果が表れると言える。

交流活動による成果の第二位であった「人のことを思いやることができる」については、年に3～5回及び6～10回交流している、それぞれ9施設で成果があるとしていた。

年に10回以上交流している施設では、「性格が優しくなった」「高齢者を大切にしよう」「人のことを思いやることができるようになった」「高齢者を大切にしよう」「人のことを思いやることができるようになった」が多かった。

交流回数と各成果との関係については、「性格が優しくなった」は、交流回数10回以上が有意に高く、「感受性が豊かになる」は6～10回が有意に高かったが、他の項目は交流回数を多くすれば成果が現れるということではなかった。

表16 交流回数と子どもへの効果

項目 実施回数	性格が 優しく なる	高齢者 を大切 にする	人を援 助でき る	人のこ 思を いや る	性が おだ やかな る	感受性 が豊か になる	家族を 大切に する	協調性 が豊か になる	人の命 大切に する	自分に 自信を もつ
1～2	0 (0)	15 (36.8)	3 (33.3)	5 (17.9)	0 (0)	3 (25.0)	1 (14.3)	0 (0)	0 (0)	2 (20)
3～5	2 (20.0)	10 (26.3)	0 (0)	<b>9</b> (32.1)	0 (0)	3 (25.0)	3 (42.9)	0 (0)	0 (0)	4 (40)
6～ 10	3 (30.0)	8 (21.1)	5 (55.6)	<b>9</b> (32.1)	2 (66.7)	<b>5</b> (41.7)	1 (14.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0)
10回 以上	<b>5</b> (50.0)	6 (15.8)	1 (11.1)	5 (17.9)	1 (33.3)	1 (8.3)	2 (28.6)	2 (66.7)	2 (66.7)	2 (20)
カイ 二乗	21.619***	3.406	12.402*	15.880***	8.087*	7.008	4.571	10.751*	10.751*	5.985

注) カッコ内は%

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

ゴチックにしている太字は残差分析により有意である

## (6) 交流の今後と問題点

交流の今後については、表17に示すように、「もっと増やしていきたい」が15施設(25.4%)で、「現在のままでよい」が44施設(74.6%)であった。

交流活動をしていく上での問題点として、表18に示すように、「担当職員の負担」が20施設(23.5%)、「職員間の理解・協力」が15施設(17.6%)、「活動費用」5施設(5.9%)、「施設の推進体制や協力」が5施設(5.9%)、「行政・社会福祉協議会との連携」4施設(4.7%)、「担当職員の教育・訓練」が5施設(5.7%)であった。「特になし」も13施設(15.3%)あった。

子どもと高齢者の交流活動をしていない施設は3施設で、「今後、交流の機会を設けたいか」という問いに対して、3施設とも「どちらともいえない」との回答であった。

表17 交流の今後について

	n	(%)
もっと増やしていきたい	15	(25.4)
現在のままでよい	44	(74.6)
どちらともいえない	0	(0)

n = 59 注) かッコ内は%

表18 交流活動をしていくうえでの問題点（複数回答）

	n	(%)
担当職員の負担	20	(23.5)
職員間の理解・協力	15	(17.6)
活動費用	5	(5.9)
担当職員の教育・訓練	4	(4.7)
施設の推進体制や協力	5	(5.9)
行政・社会福祉協議会との連携	4	(4.7)
保育所・幼稚園協議会等の協力や連携	2	(2.4)
行政の協力	1	(1.2)
その他（交流する場所の広さ・設備、日程調整の取りにくさ、訪問施設への交通手段確保、体調に気を付ける必要性、インフルエンザなどで急に行けない、地域の老人クラブや役員の考え方、職員数の確保）	16	(18.8)
特になし	13	(15.3)

n = 85 注) カッコ内は%

### （7）世代間交流についての自由記述

回答者が子どもと高齢者の交流について感じていること、考えていることについての自由記述の質的データから、意味を考えて文章を抽出した。すると37個が抽出された。抽出された文章を、それぞれ内容をカテゴリに分類し、下位カテゴリを作成し、より抽象的なカテゴリに集約し、上位カテゴリを作成した。カテゴリは【交流の大切さ】【子どもの心の育ち】【高齢者への刺激】【事前準備の必要性】【継続の困難性】の五つに分けられた。サブカテゴリは13にまとめられた（表19）。

表19 世代間交流について感じていること、考えていること（自由記述）

カテゴリ	サブカテゴリ	項 目
交流の大切さ	交流を増やす	開園して3年目なので、今後交流を検討する
		もっと交流を増やしたい
		地域の中の保育所としての役割と思う
	毎日の交流の大切さ	自然体で高齢者と接することができるように回数を増やしたい
		何かを期待してではなく、継続することで何かを感じてくれる
		他人に接することが大変でないように慣れることが大切
		両者にとって相乗効果がある
		祖父母より高齢の人との交流
	交流を楽しむ	子どもと高齢者は楽しく交流している
		核家族化が進んでいるので交流大切
		元気な子どもたちの姿を高齢者に見てほしい
		2歳児で認識も少ないようだが自然に受け入れてくれたらと思う

		交流後は子どもたちも喜んでいる
		高齢者に会うのを楽しみにしている
子どもの心の育ち	思いやりの心を育てる	高齢者のみでなく様々な人との交流は学ぶことが多い
		高齢者への思いやりや心の育ちを育てる
		車椅子や杖をついている人へ自分から手をつないだり心を寄せている
		誰にでも優しく接する
		高齢者を大切にすることを大切にする
	子どもの自信につながる	高齢者は何をしていても喜び・褒めるので子どもの自信につながる
		言葉をかけてもらうことが喜びや自信につながる
子どもの心の育ち	毎日の交流の大切さ	毎日の自然な形での交流が大切
		地域の人とのあいさつなど常日頃から交流大切
高齢者への刺激	高齢者の感情表出をうながす	高齢者に普段見られない感情の表出がある
		高齢者の知っている歌を歌う
事前準備の必要性	交流時の工夫をする	感染症の発症の有無について報告し合い開催を検討している
		子どもと高齢者の触れ合い遊びも大切にしている
		訪問は子どもへの不安やストレスとなることあり、楽しく触れ合えるよう心がける
	施設環境を調整する	高齢者のトイレ、椅子、食事（軟菜）の準備
		保育所の環境を受け入れられる高齢者は限定される
継続の困難性	地域の人で信用できない人もいる	地域の高齢者がどんな人か分からない場合がある
		怖そうな人や不審者がいるので信用できない
	時間調整の難しさ	年間計画の実施における時間配分が難しい
		他の取り組みとの関係で難しい
	体調・感染症	感染症のため交流を控えることがある
	職員の教育・意識	介護職員の目指す方向を一致させたい
介護職員がよく変わるので継続が難しい		

#### 4 考察

幼児と高齢者の世代間交流についてのアンケート結果から、回答のあった62施設中59施設（95.2%）と、ほとんどの施設で幼児と高齢者の世代間交流が行われていた。併設施設の有無では、「あり」が23施設で「なし」が39施設であった。「あり」の内容では高齢者ケア施設が13施設と多く、併設されていても交流はしていない場合もあるが、併設施設がない場合よりも交流の環境は整っていると考えられる。しかし、今回のアンケートでは、交流している対象者が併設施設の利用者であるかどうかは分からない。質問内容を考える時に考慮する必要があった。

交流が幼児に及ぼす効果として、表14、自由記述から、保育士は幼児が自分から高齢者に声をかけるようになったり、手を引くなど高齢者を大切にするようになったり、人を思いやることができるようになったと感じていた。表16の結果より、年に1～2回の交流でも「高齢者を大切にするようになった」と回答した施設が多かった一方、「性格が優しくなる」と回答しているのは、年に10回以上交流している施設であった。性格が優しくなることや人のことを思いやることができるためには、年間を通して持続的に交流し、お互いが顔なじみになることが必要であることが示唆された。

また、表14、表16、表19の自由記述の結果などから、交流により幼児が自分に自信をつけていることから、エリクソンの「母親への依存とともに母親からの自立への意欲が見られる時期であり、自信をつけるとともに昂揚感を身につけることによって外界に積極的に働きかける」という、幼児期の発達課題は達成されていると考える。また高齢者にとっても、高齢者の感情表現を促していたと考えられるが、調査対象が保育士のみであったことから、十分な高齢者への効果を知ることはできなかった。さらに守屋の自我発達の七つの特徴に照らし合わせてみると、表14や表19の自由記述などの幼児や高齢者への交流の効果から、人間としての独自性の発達、すなわち幼児の自己形成に影響を与えていると考えられ、「遊びが生涯みられる」「発達が生涯みられる」ことが伺えた。高齢者も幼児と楽しく交流していたことから、「遊びが生涯みられる」や「回想や追憶によって過去を意味づけ直すことができる」ことができていたと考える。

また職員は、幼児と高齢者の変化や効果から交流の必要性も感じており、その仲介を自分たちがすることの重要性も感じていた。しかし、交流回数は年に1～2回という回答が多く、その回数についても「現在のままでよい」という回答が44施設（74.6%）と多く見られた。その要因は、職員の負担や施設の協力体制、保育所と高齢者施設の時間調整の困難性などであることが分かった。現在交流をしていないと答えた3施設においても、特にすぐに交流を開始することは考えられておらず、その施設の設備や職員数、参加者などの環境を整えることと関係しており、施設の環境整備や施設及び他の職員の理解・協力がなければ難しいと考えられる。また、交流の成果についても「まだよく分からない」と答えている施設が10施設あることから、成果や課題が見出されるまでにはある程度の時間が必要であることが分かった。

しかし、年に10回以上交流している施設も7施設（13.5%）あり、幼児への効果や必要性を感じていた。

今回のアンケート調査の結果から、世代間交流に期待される意義は多くあるものの、そのための環境を整えることなしに実施することは、効果がないばかりか、目的である幼児や高齢者の発達課題の達成や自我の発達を促すことにつながらず、かえって阻害することにつながる場合があることが示唆された。

世代間交流の自由記述から、世代間交流とは交流の時のみでなく、普段の保育での近隣の人の参観、朝の登園時や散歩時などに地域の人への挨拶などの小さなかわりも交流であると回答されていた。交流会のその時が楽しいだけでは、幼児は高齢者に対するポジティブな認識ややさしい気持ちを持ち続けることは難しく、さらに幼児の健やかな育ちにつながりにくいと考えられる。

また近年では地域力が低下し、地域での人と人との交流が少ないことなどから、保護者には他の人への警戒心があり、お互いがよく知り合わないと安心して交流することができない現状があることも分かった。交流する高齢者の中には認知症症状のある高齢者がいるのではないかなど、保護者は高齢者に対するマイナス面を憂慮していると考えられ、それらを考慮した交流会の持ち方が求められる。

さらに担当する職員の教育や技術訓練の必要性も示唆された。保育士は高齢者の特徴理解や認知症症状への対応や実際の支援の実際、高齢者施設の職員は子どもの成長発達などの特徴理解やかかわり方などに対する知識不足や不安があることも考えられる。これらのことから世代間交流を発展させるためには、仲介する職員の研修や交流会が必要であると考える。

## 第5章 世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査

前章で、大阪府 A 市の幼稚園・保育所職員への調査結果から多くの示唆を得たが、質問項目の不足や自由記述を記入する欄が狭かったことなどから、子どもと高齢者の世代間交流の意義や課題を明らかにするには、さらに具体的な調査が必要であると考えた。

質問紙調査の結果を踏まえ、具体的な交流内容の実際や職員が考えている課題、さらに高齢者の認知症の症状に対する子どもたちの反応や交流に当たって職員が留意していることなどを明らかにするために、インタビュー調査を行った。インタビュー調査は、インタビューガイドに沿ってインタビューをするが、その場で新たに聞きたいことが質問でき、画一的ではなく対象に合わせて内容を深められるという利点がある。

本章では、実際に世代間交流をしている保育所職員、高齢者ケア施設職員及び NPO 法人職員に対しインタビュー調査を行った結果を報告する。

今回、インタビュー調査を行った保育士 A・B は保育所勤務を経て現在は子育て支援センターに勤務している。子育て支援センターは、厚生労働省（当時 厚生省）の通達「特別保育事業の実施について」に基づく施設である。地域における保育需要に対応するため、「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）（1994 年 12 月 16 日文部・厚生・労働・建設 4 大臣合意）」及び「当面の緊急保育等を推進するための基本的考え方（緊急保育対策 5 か年事業）（1994 年 12 月 18 日大蔵・厚生・自治 3 大臣合意）」に続き、利用者の利便に配慮した保育サービスの総合的な展開を図る観点から、「特別保育事業実施要綱」を定め、1998 年 4 月 1 日から実施されたものである。内容は、地域全体で子育てを支援する基盤の形成を図るため、子育て家庭の支援活動の企画、調整、実施を担当する職員を配置し、子育て家庭等に対する育児不安等についての相談指導、子育てサークル等への支援、地域の保育需要に応じた特別保育事業等の積極的な実施・普及促進及びベビーシッターなどの地域の保育資源の情報提供等、並びに家庭的保育を行う者への支援などを実施することにより、地域の子育て家庭に対する育児支援を行うことを目的としている。この事業の実施主体は、市町村で、市町村特別区、保育所等の児童福祉施設または医療施設を運営する者に委託して実施することもできる。指定施設には、保育士の中から地域の子育て家庭の支援活動の企画、調整、実施を専門に担当する地域子育て指導者及びその補助的業務を行う子育て担当者を置いている。



## 1 目的

幼児と高齢者の具体的な交流内容の実際や職員が考えている課題、さらに認知症の症状に対する幼児の反応や交流に当たって職員が留意していることなどを明らかにする。

## 2 方法

### (1) 対象

対象は、大阪府及び奈良県下で働いている保育士3名、介護福祉士4名、高齢者ケア施設の相談員2名、NPO法人の職員1名の合計10名である。対象者の概要を表20に示す。

表20 インタビューの対象者

	年齢	性別	職種	勤務年数	施設の内容	インタビュー時間(分)
A	50代	女	保育士	30年	子育て支援センター	50
B	60代	女	保育士	38年	子育て支援センター	45
C	60代	女	保育士	40年	保育所	55
D	40代	女	NPO法人職員	5年	NPO法人	50
E	30代	女	相談員	10年	高齢者ケア施設	40
F	30代	女	相談員	8年	有料老人ホーム	32
G	40代	男	介護福祉士	20年	高齢者ケア施設	50
H	40代	女	介護福祉士	15年	有料老人ホーム	45
I	50代	男	介護福祉士	22年	高齢者ケア施設	30
J	60代	女	介護福祉士	36年	認知症デイセンター	25

### (2) 調査方法

#### 1) 調査期間

調査期間は、2015年4月から8月である。

#### 2) 調査場所

小さい静かな部屋を確保し、その中で外部に話す内容や声が漏れないようプライバシーに配慮して行った。個室が確保できない場合は、他の人と離れた静かな場所で、話す内容や声が聞き取れ、他の人には聞かれないように配慮した。実施場所は、対象者の所属する

施設の個室（6件）と他の人とほとんど会わない施設の廊下（3件）、勤務施設近くの休憩場所（1件）であった。

### 3) 手続

方法は、インタビューガイドを作成し、1) どのような内容と方法で交流を行っているのか、2) 幼児と高齢者の世代間交流の意義はどんなことだと思うか、3) 世代間交流（交流の仲介）を始めた理由はどのようなことがあるか、4) 幼児や高齢者への影響はどのようなことがあったのか、具体的な事例を聞く、5) 世代間交流をする上での課題はどのようなことか、6) 今後は認知症高齢者との交流も増えると思うが、どのようなことが課題と考えるか、7) 課題に対し、どのような対処をしたらよいと思うか、などの観点から筆者がインタビュアーになり、半構成的インタビュー調査を実施した。

### 4) 分析方法

聞き取り調査の内容は IC レコーダーに録音したものを逐語化し質的データとして分析した。世代間交流についてのインタビュー内容のうち、交流の効果と課題について答えているものを、意味内容を損ねないように整理し類型化した。大学教員と著者の2名で内容分析しカテゴリ化を行った。お互いが分析したものを持ち寄り、突合せを行い、食い違いが出た部分については何度か協議し、調整した。

### 5) 倫理的配慮

調査に当たっては、事前に当該大学の研究倫理委員会の了承をとり、対象者に対しては協力しなくても不利益は生じないこと、承諾した後であってもいつでも撤回できること、個人情報の保護には十分留意し個人が特定されることがないこと、研究目的以外には使用しないこと、研究終了後には資料を破棄することを対象者及び所属する施設の施設長、機関の所属長に対して承諾を得た。また研究の趣旨を説明する文書及び口頭にて説明し、文書にて承諾を得た。

## 3 結果

インタビュー時間は、一人につき 25 分から 55 分であった。

インタビューで得られた内容を、幼児の保育にかかわる保育士と高齢者ケアにかか

わる高齢者ケア施設職員とを比較するため、分けて分析した。

### (1) 交流のプログラム内容

インタビューから得られた内容から、実施されている交流のプログラム内容を表 21 にまとめた。アルファベットは表 20 で示した回答者であり、数字は回答者が繰り返し言った頻度である。

表 21 交流のプログラム内容

	内 容	回答者・頻度
1	ゲームなどの娯楽を通じた交流活動（ゲーム、抱っこ、手遊び、肩たたき）	ABC D2EF 2 HIJ
2	発表会などの発表を通じた交流活動（歌、側転、体操、遊戯）	ABC2DFG4H I
3	子どもの作ったものを披露（創作、おみこし）	ABCDEFGHI
4	一緒に歌を歌う	BCDGIH
5	行事を通じた交流活動（焼き芋大会、遊ぼうデー、祭り）	CCDGHIJ
6	芸能や伝承遊びなどの交流活動（こま遊び）	ACGJ
7	一緒に創作（クリスマスカード、鯉のぼり作り）	A2
8	その他（高齢者の演奏に合わせて子どもが歌う）	A

### (2) 交流の開始経過や形態

インタビューから得られた内容から、世代間交流や交流の仲介を始めた理由はどのようなことがあるかを表 22 にまとめた。アルファベットは表 20 で示した回答者であり、数字は回答者が繰り返し言った頻度である。

表 22 世代間交流を始めた理由

	内 容	回答者・頻度
1	施設の1部屋を地域に開放したことからの交流開始	CGJ
2	どちらかが交流を申し込むことにより交流開始	B
3	保育参観で自分の祖父母や地域の人に参加してもらう	AC
4	老人福祉センターや街角デイなどの施設をお互いが利用して交流	A
5	高齢者ケア施設の施設長から要請があり、NPO法人が仲介して保育所と交流	D
6	施設の夏祭りなどの行事に地域の子どもと保護者、住民が来て高齢者と交流	GH
7	地域や学校の敬老会や祭りなどの行事に施設の高齢者が招待されて参加	G
8	子どもが高齢者施設の慰問に来る（歌、踊り、ピアノなどの演奏）	FGH
9	市の委託事業として子育て世帯と地域をつなぐ取り組み	B2

### (3) 世代間交流の効果及び課題

世代間交流についてのインタビューの中で、世代間交流の効果や課題について述べられているものを抽出した。抽出したデータの大きさは、意味内容が理解できる程度の長さを1コードとした。また、抽出した部分について可能な限り対象者の言葉を用いて内容の類似したものをコード化した。表23に保育士について、表3に施設職員の結果を表示した。

表23、表24の右に記したアルファベットは表1で示した回答者であり、数字はインタビューの中で回答者が繰り返し言った頻度である（例えば、「A2」は回答者Aが2回言ったという意味である）。保育士へのインタビューから得られたコードは59コードであった。

分析の結果、保育士へのインタビューでは、表23にあるように、【子どもの特性の効果】【高齢者と子どもの相互作用】、【高齢者の経験の効果】、【交流のための組織運営の問題】の四つのカテゴリが抽出された。【子どもの特性の効果】では、《高齢者への子どもの自然な対応》、《子どもの力による変化》の二つのサブカテゴリが抽出された。【高齢者と子どもの相互作用】では《高齢者から与えてもらうことによる子どもの自主性の高まり》、《子どもの他者に対する心の成長》、《高齢者と子どもの相互作用の積み重ね》、《子どもとのかかわりによる高齢者の精神活動の変化》の四つのサブカテゴリ、【高齢者の経験の効果】では、《高齢者の経験知》、《母親の満足感》の二つのサブカテゴリ、【交流のための組織運営の問題】では、《事前準備での困難性》、《組織としての脆弱性》の二つのサブカテゴリが抽出された。

施設職員の捉えたコードは66コードであった。分析の結果、表24のように、【子どもが来ることによる変化】【高齢者と子どもの交流の効果】【施設職員の子どもへの期待】【交流のための徹底した準備】の四つのカテゴリが抽出された。【子どもが来ることによる変化】では、《子どもを見る視線や表情の変化》、《高齢者の精神活動の変化》の二つのサブカテゴリ、【高齢者と子どもの交流の効果】では、《高齢者の経験を想起する場》、《高齢者と子どもの相互作用》、《交流後の活発な態度》、《子どもの他者に対する心の成長》の四つのサブカテゴリ、【施設職員の子どもへの期待】では、《子どもの将来への成長への願い》、《職員の地域貢献に対する役割》の二つのサブカテゴリ、【交流のための徹底した準備】では、《感染症対策の遂行》、《安全の確認》、《交流に対する参加意思の尊重》、《交流に向けての組織運営》の四つのサブカテゴリが抽出された。

## 1) 高齢者との世代間交流が子どもに与えた影響

【子どもの特性の効果】では、子どもは〈高齢者の中にもいろんな状況の人がいることが自然と理解できた〉り、〈「同じことばかり言っている」という子どもに「そのときのお話をどうしてもしたいんだ」といえば「ふうん」と受け入れる〉などの[高齢者への子どもの自然な対応]をしていた。〈子どもが入ってくるだけでぱっと空気が変わる〉や〈普段はあまり笑うなどの表情がない人も交流で笑顔になる〉など《子どもの力による変化》が見られた。

【高齢者と子どもの相互作用】では、〈こんなに大きくなってと褒めてもらい〉、〈歌や踊り、側転なども「かわいい」「じょうず」と褒めてもらう〉〈高齢者に見守られると、1～2歳の子どものでも30分くらい集中して創作活動ができる〉などの《高齢者から与えてもらうことによる子どもの自主性の高まり》が見られた。

〈年長組が交流している姿をいつも見ているので、「次はぼく達の番や」と思った〉り、〈困っている人を見たら助けないといけないと自然に入っていた〉ように《子どもの他者に対する心の成長》が見られていた。

〈抱っこしてもらった高齢者のことは次に会ったときでも「あのおばあちゃん抱っこしてくれてやさしい」とよく覚えていた〉り、〈日ごろからの関わりをして顔見知りということが高齢者にも子どもにも大事で、それが優しい目線や言葉になる〉など、《高齢者と子どもの相互作用の積み重ね》が見られていた。

〈高齢者に見てもらおうという目的ができ、練習する機会〉になったり、〈握手でも相手の加減をみながらしている〉など《子どもの他者に対する心の成長》が見られていた。

## 2) 子どもとの世代間交流が高齢者に与えた影響

【高齢者の経験の効果】では、〈子どものほうが高齢者に見てもらっていることが多い〉、〈母親はうまくさせようとするが、高齢者は一つ一つ待ちながら、一緒にさせてくれたり手伝ってくれる〉ことから[高齢者の経験知]が活かされていた。

【子どもが来ることによる変化】では、〈幼児が作った腕輪などのプレゼントにぼろぼろ泣いて「いじらしい、いじらしい」と褒め、《子どもを見る視線や表情》が変化していた。また〈さびしいという思いを持つ高齢者が多いので、子どもたちが来ることで心が晴れていると感じ〉たり、〈認知症があろうがなかろうが、子どもが好きな人は好きで、笑顔になったりよしよしと手を出そうとする〉などの《高齢者の精神活動の変化》が見られた。

【高齢者と子どもの交流の効果】では、〈子どもがもじもじしていたら、おじいちゃんおばあちゃん気質を出して「おいで」「一緒にやろう」などと声をかけ〉《高齢者の経験を想起する場》となっていた。〈子どもが「何で車椅子に座っているの」と子どもの感覚で話しかけるので高齢者も普通に答える〉など 《高齢者と子どもの相互作用》が見られていた。また〈交流後に「こんなに笑っていたのか」「楽しかったな」という《交流後の活発な態度》が見られていた。

### 3) 交流が職員へ与える影響

【施設職員の子どもへの期待】として、〈これから地域で育っていく子どもたちの手伝いができればいい〉〈子どもは職員の立ち振る舞いを見ていて、残ってて、大きくなったときに優しい気持ちが育ってくれているのではないか〉などの《子どもの将来の成長への願い》や、〈自分たちも今の子どもや家族状況に合わせ、学習していく〉という《職員の地域貢献に対する役割認識》を持っていた。

表 23 保育士へのインタビュー結果

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	回答者・頻度
子どもの特性の効果	高齢者への子どもの自然な対応	高齢者と触れ合っていない子どもは、田舎に行ったときに高齢者のことを怖いと思って懐かない場合や泣く場合があるが交流している子どもは自然と受け入れる。	C
		高齢者のなかにもいろんな状況の人がいることが自然と理解できる。	B C
		小さい年齢から高齢者と交流しているので、認知症などがあり、表情のない特別養護老人ホームの高齢者に対しても普通に話しかける。	C D
		高齢者のことを「きれいじゃない」といったりする子どももいるが、老化を知る。	C
		認知症高齢者が声を出したりするのも喜んだりしているからと理解する。	C
		「同じことばかり言っている」という子どもに「その時のお話をどうしてもしたいんだ」といえば「ふうん」と受け入れる。	D
	子どもの力による変化	子どもが入ってくるだけで、ぱっと空気が変わる。	D
		普段はあまり笑うなどの表情がない人も交流で笑顔になる。	C D
		認知症で怒りっぽいのに、子どもを見るとコロッと表情が変わる。	D
		自分の孫のようで、元気をもらったとの発言がある。	A C
		長い時間子どもを抱かせてもらえる。	A
		子どもと触れあっている高齢者は子どもの声が気に障ることなく視線が柔らかい。	C

高齢者と子どもの相互作用	高齢者から与えてもらうことによる子どもの自主性の高まり	こんなに大きくなったと褒めてもらう。	B
		歌や踊り、側転なども「かわいい」「じょうず」と褒めてもらう。	B C 2
		子どものことを丸ごと受け止めてくれる。	A
		人見知りの激しい子どもも、高齢者が見てくれることで1人で創作活動ができる。	A
		見てもらうことで自信につながる。	B C
		車いすの人をみたら押してあげるなど、優しい気持ちや行動が自分から出る。	A
		高齢者が創作するのを見ることで、興味を持つ。	A
		小さい子どもでも高齢者と共に創作することで、シール貼りや折り紙折り、ハサミなどできるところをすると、子どもの満足がある。	A
	子どもの他者に対する心の成長	高齢者に見守られていると、1～2歳の子どもでも30分くらい集中して創作活動ができる。	A
		年長組が交流している姿をいつも見ているので「次は僕たちの番や」と思う。	C D
		日ごろから子どもに「これを練習してみておじいちゃんおばあちゃんにみてもらおう」など目的意識を持ってもらう	B C
		困っている人をみたら助けないといけないと自然に入っていた。	B
		保育所に通う前の子どもが通う支援センターでも、高齢者に披露することで歌の練習をしたりする。	A
		高齢者が待っていてくれるということで、張り切って出かける。	B 2 C 2
	高齢者と子どもの相互の積み重ね	優しい気持ちが子どもに積み重なっていく。	B C
		効果はすぐには目に見えるものではなく、何年か後に「ああ、こんなんやった」と見えてくるもの。	A C
		抱っこしてもらった高齢者のことは次に会ったときでも「あのおばあちゃん抱っこしてくれてやさしい」とよく覚えている。	C
		「祖父母と遊ぼうデー」で祖父母が来られない子どもがいても、地域で顔なじみの高齢者が来てくれるので淋しくない。	C
		覚えてないとは思いますが、見守られたという思いが、何かの時に、次に積み重なっていくと思う。	A
		日ごろからの関わりをして顔見知りということが高齢者にも子どもにも大事で、それが優しい目線や言葉になる。	C
	子どもとのかかわりによる高齢者の精神活動の変化	遠くにいる孫を思い出す。	B
		自分の子どもや孫の小さい時を思い出す。	C
		交流が終わった後、高齢者同士でその話をする。	C
		高齢者が一緒にハイハイして遊んでくれる。	A
		高齢者も楽器演奏や創作など、得意なことを教える。	A
		子どもに披露するために楽器を手作りしたり、練習する。	A
		幼児と一緒にすることで、教える、母親を助けるなどの気持ちを持つことができる。	A
	高齢者の経験の効果	高齢者の経験知	高齢者は何かしら雰囲気をもっているもので、子どもにとっても安心感を与える。
子どもの方が高齢者に見てもらっていることが多い。			C
100歳のおばあちゃんと会えるのを楽しみにしていて、来てくれたら周りを取り囲み鈴なりに質問したりする。			D

		母親はうまくさせようとするが、高齢者は一つ一つ待ちながら、一緒にさせてくれたり手伝ってくれる。	A
	母親の満足感	お母さんたちも「楽しかった」とお礼の言葉を言っている。	A
		同じ子どもと継続的に接することで、こんなことができるようになったと、子どもの成長を感じることができる。	C
		交流では高齢者が子どものことを丸ごと受け止めてくれるので、母親も参加しやすいし、温かい言葉などをかけてもらえホッとする場である。	A
交流のための組織運営の問題	事前準備での困難性	交流のときのみでなく、日ごろから交流を考えたプログラムを保育に入れる	C
		住んでいる地域により、参加したくても参加できない母子がいるので、交流場所の確保ができればよい。	A
		子どもと交流したいと思っても、足が悪かったりして訪問できない場合があり、送迎のある老人センターなどに子どもが来てくれるので交流できる。	A
		歩いていけない施設同士の交流では、交通手段の確保が必要。	D
		交流を持ちたいと思っても、どこに行ったらいいのかわからない。また近所の施設は手一杯と言われることもある。	D
		子育て支援センターや高齢者との交流を知らない親がいる。どのように広報していくかが問題である。	A
		発達障害の子どもも、光るものや名札を外しておくことなどを事前打ち合わせでしておくこと、対応してもらえ、子どもも楽しく交流できた。	A
		いろんな人と躊躇なく、警戒することなく、自然に付き合えるような雰囲気を作るようにしている。	C
		日程の調整に気を遣う。	D
	組織としての脆弱性	人手が足りなくて思うように交流回数を増やせない。	D
		職員が変わることで、今までできていたことが難しくなることがある。	D
		施設長などの考え方で方針が変わり交流が縮小されたり、中止となったりする。	D
		NPO 法人の仲介は無料のボランティアと思っている。通信費やその他の経費がかかる。	D

表 24 高齢者ケア施設職員へのインタビュー結果

カテゴリ	サブカテゴリ	内 容	回答者・頻度
子どもが来ることによる変化	子どもを見る視線や表情の変化	どれだけ職員が頑張っても引き出せない笑顔が、子ども相手だと出る。	G 2 J
		子どもが歩いているだけでも寝転んでいるだけでも、表情が和んでいる。	G H
		幼児が自分で作った腕輪などのプレゼントを贈るとぼろぼろ泣いて「いじらしい、いじらしい」と喜ぶ。	G
		子どもを見つめる視線や目がちがう。	E F 2 H I J
		中学生や高校生の世代が頑張っているのを優しい目で見ると。	E G
		普段は笑わない認知症高齢者も笑っているし表情がほころんでいる。	E F G H J
	高齢者の精神活動の変化	子どもたちが高齢者の場所まで行き握手や肩たたきをしてくれると、「かわいい、かわいい」と喜ぶ。	G E H I
		来てくれたらやっとなってきたという感じで喜んでいる。	F



		さびしいという思いを持つ高齢者が多いので、子どもたちが来ることで心が晴れていると感じる。	I
		認知症があろうがなかろうが、子どもが好きな人は好きで、笑顔になったり、よしよしと手を出そうとする。	F G 2 J
		夏祭りなどの行事の時は、地域の子どもや保護者、住民も来るが、利用者の家族も多く来るので、うれしい様子である。	G I J
		子どもの方が少ないので、肩たたきやゲームなどで自分の前に来てくれるのに少し待つ場合、まだかなという感じで見ている場合はあるが、待てないという様子はない。	F
高齢者と子どもの交流の効果	高齢者の経験を想起する場	体は動かなくても、何かしてあげようと手が動く人がある。	G H J
		子どもがもじもじしていたら、逆におじいちゃんおばあちゃんの気質を出して「おいで」「一緒にやろう」と声をかける。	G H J
		昔の遊びや生活を聴くだけでもよい。	G I
		高齢者が経験されたことを伝授する場があるとよい。	G I
		肩たたきなどをしてもらうことが懐かしい思いを引き出している。	F H I
		自分の子育てや子どもが小さいときのことを思い出す。	F H I
	高齢者と子どもとの相互作用	高齢者は目下の人に対する接し方、話し方で接する。非日常がそこにある。	G
		交流が自然だからいいと思う。	G I
		子どもが「何で車椅子に座っているの」と子どもの感覚で話しかけるので、高齢者も普通に答えている。	G
		高齢者も「変に思われているのでは」と考えずに接する。	H
		子どもが部屋に入ってくるだけでうれしそうにしている。エネルギーが感じられる。	H 2 I
		どんなに職員が頑張っても、子どもに対するときのような笑顔は引き出せない。	G
		高齢者が「かわいい」「おりこうさんやね」と喜んでくれるのでうれしい。	E F 2 G H I J
		「うまい」とか何でもほめてくれるのでうれしい。	E F G H I J
	交流後の活発な態度	交流場面を写真に撮り、部屋に飾ったり家族に見てもらおうとそれが話題となる。また思い出す。「こんなに笑っていたのか」「楽しかったな」	H
		交流の後に疲れている様子などはなく、戻ってきて覚えている間は「かわいかったね」「楽しかったね」など、逆に会話がはずんでいる。	F H
	子どもに対する心の成長	高齢者に見てもらおうという目的ができ、練習する機会になる。	H
		施設の祭りに地域の子どもたちだけでも参加する。餅つきなど体験できる。	H I
		握手でも相手の加減を見ながらしている。	I
		年長さんになると、保育所の先生の指示がなくても高齢者ケア施設の職員の言葉かけで動いて、高齢者とかかわることができる。	G H
車いすに座っていると、障害があるなど高齢者の障害に合わせて、肩たたきでもゆるくしているなど気を使うことができる。		I	
子どもの成長にとっていい影響があると感じる。		I	

施設職員の子 どもへの 期待	子どもの 将来の成 長への願 い	これから地域で育っていく子どもたちの手伝いができたらいいと思 う。	G
		子どもが、高齢者に対して優しくしてあげようという優しい気持ち が芽生えてくれたらと思う。	E G I
		子どもは職員の立ち振る舞いも見ていて、残っていて、大きくなっ たときに優しい気持ちが育ってくれているのではないか。	G
	職員の地 域貢献に 対する役 割認識	福祉教育できた中学生が「推薦で高校にいけました」と挨拶に来て くれてうれしいし、やりがいもあると感じた。	G
		自分たちも今の子どもや家族状況に合わせ、学習していく。	G
		施設が地域で浮いてはいけけない。また地域の人が入りにくい雰 囲気を作ってはいけけないという考えから、職員が出て行って発信す るようになった。	G
交流の ための徹 底した準 備	感染症対 策の遂行	子どものウイルスは強いので、高齢者へ感染しやすい。	F G
		保育所自体に感染が流行しているときは行事を控える。	E G
		インフルエンザや風邪が流行っているときは行事を控えるため、予 定をしていたことがキャンセルになる。	E F G
		風邪気味の子や咳の出ている子は保育所に残ってもらいなど事 前に打ち合わせをする。	G
		通所の高齢者は自宅にいるためか感染にも耐性があるが、入所の高 齢者は抵抗力が弱い。	G
		施設の入り口で子どもたちに手洗いと消毒はしてもらう。	G
		必要な物品や会場の環境調整（部屋の温度、椅子の置く場所、消毒 薬）などの準備をする。	E F G
		自分で意思表示できない人もいるので、体調をみて参加してもらう。	H I
		交流時、高齢者のフロアの担当職員は一人は出て、高齢者を見守っ ている。交流が無理な場合は、職員がそばについている。	H
	高齢者には無理に参加を勧めない	H	
	安全の確 認	怪我がないようにすることが必要である。	G H
		口で注意していても子どもたちが走ることがある。2～3歳であつて も高齢者は倒れてしまうので配慮が必要である。	H
	交流に対 する参加 意思の尊 重	手遊びや会話がどの高齢者もできるように、待っている高齢者が いたら子どもを呼んで、「私のところだけ来ない」ということがない ようにしている。	F
		自分が周りと違うということがあると高齢者は不安になり、時 には不穏になるので、全体が同じようにかかわれるように気を配る。	F
		退屈になって「もう帰る」という高齢者には無理をしないで付き添 って帰ってもらう。	H
		交流会場に入ってから、いやだという高齢者はいなかったけど、 いやだという場合も無理な参加は促さない。	F H
		認知症高齢者で、刺激に対して手が出たり大きな声が出たりする 場合は配慮する。	H
	交流に向 けての組 織運営	保育所との連携が大切と思う。	E
		高齢者と子どもの1対1での交流はなかなかもてない。	F
		施設間で一緒にできることを進めていきたい。	G
保育所により、この施設には何歳児が行くと決めている。		G F H	
事前に保育所の職員と打ち合わせをして、日程調整や注意点を 確認している。	G F H		

	施設の姿勢も変わってきて、交流を進めることに理解がある。さらに進めたい。	F
	職員は忙しいので、部屋の準備や物品の準備などの受け入れだけを行い、プログラムや進行などは相手に任せている。	H I
	今後は大学生がコーディネートして、小さい子も参加できるとよい。	H

#### (4) 認知症高齢者と幼児の世代間交流による効果と課題

インタビューの中で、認知症高齢者と幼児の世代間交流が及ぼす効果と課題を見ることによって近年増加している、認知症症状への対応を考えてみたい。

世代間交流についてのインタビューの中で、保育士と施設職員から得られたインタビュー結果から、幼児と認知症高齢者の世代間交流について述べられているものを抽出した。抽出したデータの大きさは、意味内容が理解できる程度の長さの1発言内容とした。また、抽出した部分について可能な限り対象者の言葉を用いて内容の類似したものをカテゴリ化した。表 25 にその結果を表示した。

インタビューから得られた発言内容は 92 であった。

表 25 インタビューから得られた認知症の人と幼児の世代間交流

カテゴリ	サブカテゴリ	発言内容	発言者
コミュニケーションを深める	自然に触れ合う	いつも触れ合う人とは違う人なので、引くかと思ったが、ごく自然に触れあって、普通に受け入れていた。	B 保
		一緒に手をつないでするようなこともずっとスムーズにしていた。	B 保
		老健の職員が認知症の人の行動を劇にして子どもたちに見せると、子どもたちは「困っている人がいたら助けてあげよう」と自然に受け入れていた。	B 保
		子どもたちが自然に接することがいい効果があるのかもしれない。	I 職
		子どもは人見知りをする感じもなく、気負いせずやっていた。	F 職 H 職
	子どもの不安	認知症という病気が子どもたちにはまだ難しいのかもしれない。	B 保
		なかにはこわごわしている子もいる。	J 職
		子どもも、知らないことや自分と違うことは分からないことから怖いから最初から積極的にできないということはある。	J 職
		子どもは自分から進んでできず、高齢者が「いくつ」などと働きかけて、頭をなでたりしていけるようになった。	J 職
		1対1でコミュニケーションはなかなか持てない。	J 職

進行をスムーズにする	プログラム	高齢者は、肩たたきをすごく喜んでいた。	F 職
		肩たたきをやってもらえるっていうのが、懐かしい感じがあると感じる。	F 職
		子どもはめいめいが高齢者の場所まで行って、握手したり肩たたきをするので高齢者は喜んでいる。	J 職
	関わる年齢を考慮	あまり小さい子は無理かなと考えた。	C 保
		特養は大きい子が交流させてもらう。	C 保
		大きなクラスでも、特養ばかりだと大変やから、交流は年に 2～3 回になる。	C 保
		認知症症状があっても交流できるのは 4～5 歳くらいで、小さい子はもう一つ理解できないところがある。	C 保
		小さいクラスは表情が怖い人を見て泣いちゃうっていうことがある。	C 保
		小さいうちにいろんなおじいちゃんおばあちゃんを経験して、慣れてから特養に行かせてもらうようになっていったんじゃないかなと思う。	C 保
		子どもは、おじいちゃんたちが声を出したりするのは喜んでいるからと理解する。	C 保
	子どもへの働きかけ	子どもたちのほうは保育士が、保育園を出る前から子どもたちによく注意して言って聞かせてくれているので、問題のあるような行動をする子はいなかった。	D 保
		子どもたちは優しいですし理解できるので、おとながちゃんとした対応をしてあげたら問題は起きないですね。	D 保
		子どもの誘導は保育士がしていた。	F 職
		素直に子どもたちが動いてくれたので、特に不穏になる高齢者もいらっしやらず、スムーズにできたと思う。	F 職
		こっちも来てくださいねというぐらいの軽い誘導はした。	F 職
		中心となる人が全体を動かして、スムーズにいけるように子どもを誘導する。	F 職
		子どもと高齢者が対になって交流するときに、子どもたちに声をかけてなるべく列ごとになるように配慮した。	F 職
	高齢者への働きかけ	反応が手が出てしまう、刺激に対して大きな言葉で出てしまう人に対しては、不安や不快があるので職員が対応する。	G 職
		人によっては、すぐ退屈になって「もう帰る」という人も毎回いるので、フロアスタッフが対応する。	H 職
		写真を撮って家族へのお便りで見てもらい、「こんな楽しいことをしていたのか」と分かってもらえるようにする。	H 職
		みんながみんな、子どもが好きなわけでもなく、びっくりしてちょっと暴力的になってしまうかもしれない。それは見ていて分かるので、注意して見るようにする。	H 職
役割分担	交流時に躊躇したり、警戒したりとかでなくて、自然につき合えるような雰囲気をつくるっていうほうが保育所としての役割と思う。	C 保	
	高齢者への対応は施設スタッフの人たちの仕事かなと思っていた。	D 保	
	施設側も、認知症が進んでいる方を交流の場におろしたりしないし、ある程度交流ができる元気ではっきり分かる方っていう方を選んでくれていた。	D 保	

		あまりに興奮して、怒ってしまっただけで席を外されたとかっていうのも1回ぐらいはあったかもしれないが、そんなに心配なこととかはなかったですね。	C保	
		高齢者のほうは施設側の職員が見てくれる。	F職	
		そのフロア担当のスタッフが一人はつくようにして、もし無理だったら対応できるように見ている。	H職	
		自分が周りとは違うことがあるとお年寄りには不安になるというか、不穏になることがある。	F職	
認知症について理解する	症状の理解	一遍に子どもにそう詰め込んでいっても、なかなか難しいこともある。	C保	
		子どもたちにしたら自分たちのおじいちゃんたちとイメージは違うと思う。	C保	
		子どもが「同じことばかり言ってんな、おばあちゃんな」と言っても、職員が「そのときのことお話しどうしてほしいんだって」と言えば、「ふうん、そう」とかって言ってね、そんなに子どもが嫌な態度をとるとか、そんなこともなかった。	C保	
		接している中で、子どもが「うん？」と首をかしげることもあるが、そういうときに、周りの大人が少しずつ説明をして、気をつけて説明していったほうがいいのかと思う。	C保	
		お年寄りがとても楽しみにしているが、表情が違うということがあり、大きなクラスが、一旦は行かせてもらうことになったが、子たちも、お年寄りの中にもいろんな状況の方がいることを何となく知ってくれたらいいかなという感じで。	C保	
		特に手を上げる方もいらっしやらないし、そんなに気を使っただけというイメージはない。	F職	
		気が進まないとか拒否があれば会場に行かないなど、そのときの気持ちの波がある。	F職	
			やはり保育士がいろいろと指導、教育されているので子どもが正しく接していると思う。	I職
	行動・症状への配慮	こうしないと危ないとか、そんなことはあまりない。	F職	
		けががない限りは自由に過ごしてもらおう。	G職	
		直接触れ合うようなことをする動きのある交流がよりいいかなとは思って見ている。	H職	
		子どものほうが少ないので、順番で前のほうからで、私はまだかなっていう感じで、退屈とかそういう感じの方はいらっしやらなかったというイメージですけどね。で、来てくれたらほんとに、ああ、やっと来たという感じで、喜んでくださっていたと思う。	F職	
		子どもたちが高齢者の席へ来てくれるのを待っている形。どうしてもお年寄りから出るといふんじやなくて、待つ形になる。	I職	
		何回か会って話をしていかないと、認知症なのかどうなのかって分かりづらいところもある。	I職	
		交流の会場に行って、嫌だわって印象だった方はいらっしやらないと思う。	F職	
	先入観	保護者が「心配なのよ」という声はない。	C保	
		認知症だからといって、それを前提にこちらが構えて接していくのではなく、普通の状態で会話していても、いいんじゃないかと思う。	I職	
		ある程度、軽いものであれば、子どもに先入観を与えないで、普通に接していいのではないかという気はする。	I職	

		変にそういう先入観を持つと、子どもさんがかえって戸惑うと思う。	I 職
		子どもたちも高齢者を見ながら理解するということもあると思う。	I 職
		変な先入観とがなく来ているので、非常に子どもたちもうまく喜んで、楽しく接していたように思う。	I 職
		逆に大人も教えられることがあるかも分からない。	I 職
		あまり意思表示のできない方もいるので、体の様子を見て、大丈夫そうだったらなるべく参加してもらおうようにしている。	H 職
	職員や保育士の高齢者観	小学校に「食事 1 回食べる会をしないか」と申し込んだが、教員に「子どもが怖がるといけないから」と断られた。	G 職
		子どもが戸惑ってしまうときに、保育者とか私とかの周りの大人がどう対応するかですね。	F 職
		職員にすごく嫌な言い方で「嫌やな、同じことばかり言ったらな」とか「ようわからんからほっとこう」なんて言われたら、「あ、そうか」って、「おばあちゃん、そんな何回も同じこと言うおばあちゃん、ほっといたらええねんな」っていってなってしまうと思う。	F 職
効果を高める	子どもへの効果	やっぱり子どもってすごいエネルギーとかパワーを持っている	D 保
		子どもの自信になる。	B 保
		両方にとって刺激になる。	B 保
		褒めてもらったりしてうれしくてという感じですね。	I 職
		高齢者が喜ぶ姿を見て子どもたちもよりはりきっていた。	H 職
		そういうような痛みとか、ちょっと弱い方に接する接し方も学んでくると、非常にね、今後も子どもたちの成長の過程の中で非常にいいんじゃないかとは思う。	I 職
	高齢者への効果	高齢者も喜んで、歓声をあげて拍手してくれた。	B 保
		おじいちゃんおばあちゃんたちが表情も変わって楽しめるから来てくださってたんだと思う。	C 保
		介護度がね、明らかにすごくもう認知症が緩和されてお元気になられてっていう方もおられる	D 保
		おじいちゃんおばあちゃんたちが楽しみにして参加してくれる	D 保
		子どもの顔見たら、いつも怒りっぽいのに、もうコロッと表情が変わって優しくなる方がいたりとか。	D 保
		病気とか、いろんな気持ちが出てきているときは、寂しいからちょっと一緒におってほしい気持ちがある。そういうときに、小さいお子さんとかが来てくれると、非常に心が晴れたりするのかなと感じた。	I 職
		とっっても楽しんでたイメージがある。	H 職
		やっぱりすごいうれしそうにしている。	H 職
		子どもさんとの交流の後、疲れているという印象は受けなかった。	F 職
		交流後、高齢者の会話が弾んでいた。	F 職

	子どもが来てくれるのを待つ時間を退屈とか感じていた高齢者はいなくて、来てくれたらああ、やっと来たっていう感じで、喜んでいた。	H 職
	戻ってきて覚えている間は、かわいかったね、楽しかったねっていう感じ、表情は出ていたと思う。	F 職
	ばってホールに来ただけで空気が変わるとか、そういうのはいつも感じていた。	F 職
	「お利口さんやねえ」とほめていた。	F 職
	頭をなでていた。	F 職
	女性は間違いなく喜んでた	F 職
	男性はそんなに、大きなリアクションはない。	F 職
	ありがとう、かわいい、かわいいという雰囲気である。	I 職
	普段なかなかね、接することがないので、いい刺激になっているんだと思う。	I 職
	普段笑わない人も笑っている。	H 職
	積極的には声掛けできないが、「あ、何か、こう見てあげなきゃ」みたいなことを出している。	H 職
	無邪気にボンって来られたら、もう受け入れてしまう。	H 職

## (5) インタビューの中で述べられた具体的な事例

インタビューにおいて述べられた、具体的な事例を取り上げて、世代間交流の効果を明らかにする。

### 1) A 保育士のインタビューからの具体的事例

2歳児と高齢者の世代間交流の事例である。人見知りをする年代の幼児であっても高齢者との交流が幼児や母親にとって効果があることを示す事例である。

幼児は人見知りが激しくて、子育て支援センターに来ても普段は母親以外とはあまり遊ばない。保育士が話しかけても、やや緊張して母親のそばを離れないという状況であった。その親子が老人福祉センターを利用して行われる高齢者との世代間交流に参加した。この老人福祉センターを利用している高齢者との世代間交流は、自宅が遠くて子育て支援センターに通うことができないという母親の声に応じて、老人福祉センターを借りて保育をすることになったものである。そこで、老人福祉センターを利用している高齢者と幼児との交流の場を設けてはどうかという声が上がリ、交流が開始となった。1回目の交流では、

幼児も母親も高齢者も交流を喜び、楽しく交流できたため、2回目3回目と続くことになった。回数は、まだ年に3回くらいと少ない。交流場所は、高齢者が普段使用している広い畳の部屋である。幼児たちが入ってきやすいように職員と高齢者とで部屋の入り口を風船や折り紙で作った花などで飾ったりしている。そのため幼児は喜んで高齢者の待っている部屋へと入っていく。中では高齢者が待っていて、挨拶や掛け声をかけて迎えている。部屋が畳であり広いため、幼児は思いっきりはいはいしたり、走ったりできる。母親や高齢者はそれを見たり、時には幼児と一緒に高齢者もはいはいしたりして遊んでいる。

この日の交流内容は鯉のぼり作りの創作であった。乳幼児は高齢者との交流で、全体的にゆったりとした時間の中で一緒に鯉のぼり作りをしていた。その中で、いつもは人見知りをする幼児がお母さんの元を離れて、高齢者に囲まれて鯉のぼりのシール貼りを長い時間していた。お母さんはその姿をみて「ええーっ」「こんな人見知りの子が」とすごく驚いていた。高齢者と長い時間創作活動をしていたおかげで、お母さんは下の赤ちゃんとゆったりとかかわることができ、またいつもと違う幼児の面も知ることができたと喜んでいました。

## 2) J 介護福祉士のインタビューから得られた具体的事例

認知症があり、他の人とのコミュニケーションや交流が難しくなっている高齢者においても、赤ちゃんと接することによる効果があることを示す事例である。

高齢者ケア施設の通所介護を利用する男性A氏は、認知症があり、自分からはあまり他の人と話しをすることがなく、職員など周りからの問いかけにも答えないことも多い。BPSD（行動・心理症状）により、時々急に怒鳴ったりすることがあり、笑顔も少ない。入浴などの介助も拒否することが多く食事も一口大のおにぎりにするなど、工夫することによってようやく摂取している。

J 高齢者ケア施設に勤めている職員は、子どもが生まれると職場である施設につれてきて、他の職員に紹介したり利用者へも紹介したり、一緒に出産をお祝いしてもらうことが多い。施設を利用している高齢者も喜んでおり、赤ちゃんと会うのを楽しみにしている。通所施設で働いている職員も生まれて間がない自分の子どもを連れてきて職員や通所介護を利用する利用者にも紹介していた。その時A氏に見せると、A氏は乳児を見た途端に笑顔になり、自分から乳児に話しかけていた。また「あばば」などの声も出し、乳児を笑わせようとしていた。職員が介助しながら抱かせると嬉しそうに抱いていた。

子どもが帰ってしばらくすると、乳児のことは忘れた様子で、またいつものあまり笑わないA氏にかえっていた。



#### 4 考察

インタビューの結果、世代間交流は高齢者にとっても幼児にとっても、さらに職員にとっても様々な影響を及ぼしていることが分かった。幼児は高齢者の老性変化や疾病による障害、認知症症状なども自然に受け止めて高齢者を受け入れ、かかわっていた。表情の少ない認知症高齢者に対しても自然に話をし、手遊びやゲームなどを一緒に行っていた。普段、高齢者と接していない幼児は、顔のしわや白髪、姿勢の変化や動きの変化などの老性変化に対し、田舎に行っても祖父母に懐かない場合や泣く場合があるが、交流している幼児は自然と受けとめることができていた。また、幼児は高齢者から褒めてもらったり見守られたりすることで、幼児の自主性が高まっていた。關戸（2006）や土永（2005）、南部（2014）が述べているように、高齢者との交流が幼児にとって優しさや思いやりを育むことにつながり、他者に対する心の成長へと結びついていると考えられる。

また、保育士は、幼児が高齢者と交流するに当たって、お互いが十分慣れていない場合には、幼児が高齢者に対し驚きや怖いという気持ちを持つ場合もあることを理解し、顔なじみになることを重要視していた。核家族で育っている子どもが多い現在、最初からすべての子どもが高齢者を自然に受け入れることができるのではなく、徐々に関係を深めていく中で高齢者を知り、受け入れていくのであると考えられる。下村ら（2012）は、世代間交流をしている職員や子ども、子どもの保護者などへの調査の中から、子どもの保護者の意見として「発表などで接するのはよいが、病気のことなどを考えると直接触れ合ったりすることは避けてほしい」、「子どもが嫌いな高齢者もいる。うるさいと言われたら子どもはショックを受ける」、「子どもに暴言を吐いて泣かせてしまうということを知った」などの意見もあったと述べている。そのため幼児と高齢者の世代間交流においては、事前の打ち合わせを十分に行い参加者の特性を押さえておくことや、風邪などの感染症が流行している季節には交流を控えることやうがい、手洗いなどの感染症対策を行っていた。

高齢者においても、幼児との交流によって昔のことや自分の子育てのことを思い出すなど、精神活動の変化が見られた。また、今まで培ってきた自分の経験や知識の披露、雰囲気を作るなど、経験を想起する機会になっていた。

金森（2012）は、家庭で高齢者と接することが少なくなった子どもと、生きがいを持ち自立した生き方を求められるようになった高齢者の互いの社会的ニーズに対応することができるのが高齢者と子どもの仲介世代が意図的に行う世代間交流であると述べている。高齢者自身も子どもから優しいかかわりを受けたり、反対におじいちゃん、おばあちゃん気

質を発揮して人の役に立ったりするなどの経験をすることが自尊感情を高め、有用感をもたらすことにつながると考える。これらのことから世代間交流は、高齢者と子どもの相互作用を促していると考えられる。

また、施設職員と保育士の世代間交流に対する認識を比較すると、保育士は幼児の成長をよく見ているが、施設職員は成長発達という観点が少ないことが分かった。さらに、保育士は「母親の満足」など、母親を巻き込み、母親の成長も促す効果を重視していた。幼児の成長発達の視点の違いについては、施設職員の教育において、子どもの成長発達の特性や過程などについて学ぶ機会が少なかったからではないかと考える。教育カリキュラムにおいても、高齢者や障害者の特性理解や支援方法に関する科目はあるが、子どもに対する教育はほとんど行われていない。

施設職員は、高齢者と幼児の安全確保と事故防止に十分な配慮をしていた。そのため、普段から高齢者を担当するフロアの職員が必ず交流場面に参加しており、高齢者の体調や気分の変化がないか観察していた。また、認知症があり理解力が低下している高齢者に対しても、無理な参加はしないと人権への配慮がなされていた。これは、施設職員が対象者の人権や尊厳を大切にしており、授業カリキュラムや研修会などでも重要なこととして打ち出されているからであると考えられる。介護保険の目的と倫理においても対象者の尊厳を守ることは重要な項目として出されている。

さらに施設職員は、表 24 より自分たちの高齢者に対する態度や姿勢を幼児たちが見て、何年か後であっても何か感じてくれているのではないかというような期待を持っていたり、地域貢献に対する役割意識を持っていたりすることが分かった。これらの期待感や役割意識が、負担を抱えながらも施設職員が世代間交流をしている理由ではないかと考える。

藤原ら(2006)や關戸(2006)の調査でも報告されていたように、世代間交流をする課題として仲介をする職員の負担が挙げられた。保育や介護、行事などが多い中、また幼児と高齢者の1日の過ごし方の違いなどがある中で、保育所と高齢者施設との日程の調整をすることの難しさ、さらに、仕事以外に交流を企画・運営するという負担、交流予定日における幼児の急な体調不良、移動手段の確保、施設の環境についての課題など、現在より活動回数を増やしたいと考えている施設やこれから交流活動を始めたいと考えていても、思うように増やせない現状があることが分かった。幼児や高齢者は体力や免疫力の面で容易に体調の変化をきたすことがあり、そのための職員の観察や配慮が必要で、複数の職員の確保などを考慮する必要があることが分かった。インタビューにおいても徹底した事前の

準備が行われていたことが語られていた。発達障害がある幼児についても事前に打ち合わせをすることによって、興奮する要因となることを避け、落ち着いて交流することができていた。

世代間交流の時期や時間は、交流の時のみでなく普段の保育での近隣の人の参観、朝の登園時や散歩時などに地域の人への挨拶をするなど、小さなかかわりも交流である。交流会のその時が楽しいだけでは、高齢者に対するポジティブな認識ややさしい気持ち、さらに幼児の健やかな育ちにつながらないと考えられる。

田中（2007）は、幼児期に高齢者と親密な交流を持った経験がある子どもは、児童期、思春期において、高齢者に対してポジティブなイメージを持っており、イメージが肯定的であるほど高齢者との交流活動に対する積極的な取り組み意欲が高いと調査の中で述べている。村山（2011）、藤原ら（2007）は、小学校のときの交流体験が「高齢者イメージ」や「地域活動参加意識」などを高めると述べている。これらや発達の観点から見ても、自我が形成される幼児期や児童期に異世代、とりわけ高齢者と交流を持つことは子どもの育ちにおいてよい影響を及ぼしており、特に幼児期での高齢者との交流活動が大切である。

さらに認知症症状のある高齢者と幼児の交流において、幼児は、高齢者に認知症症状があっても、普通の高齢者の状態として自然と触れ合うことができる反面、こわごわ交流したり不安を感じたりしている。このような幼児の不安を感じているのが施設職員であった。認知症症状のある高齢者とかわることについては、年少クラスでは認知症症状を理解することの難しさがあり、そのため年長クラスの幼児たちがかわることが多い。年長クラスになると、何度か高齢者との交流を体験しており、その経験の積み重ねから、認知症症状がある高齢者に対しても普通の高齢者として受け入れていると考えられる。職員や保育士の高齢者観の持ち方により、幼児にどのように説明するのか、高齢者にどのような姿勢で接しているかが、幼児に与える影響として重要であると感じる。

高齢者の体調の変化は、高齢者をよく知る施設職員が見て対応している。交流参加へ気が進まないとか暴言などの BPSD が見られる高齢者は、交流に参加しないことが多い。

交流のプログラムとしては、幼児の発表やゲームがあるが、握手や肩たたきなど幼児と高齢者の触れ合いを高齢者は喜んでいる。

杉山（2016）も言うように、認知症のケアの原則は、認知症の人が形成している世界を理解し、大切にすることである。そして、その世界と現実とのギャップをできるだけ感じさせないようにするということを理解して接すれば、認知症の人にも異常行動

をとることは少なくなり、心が休まった状態を維持していく。認知症の人は自分が話したり行動したりしたことは忘れてしまうが、いやな思いやうれしかった思いなど、相手の対応で抱いた感情だけはしっかり覚えている。幼児たちの自然な受け止め方や優しい握手は、認知症高齢者に心地よさやうれしい気持ちを残し、BPSD などの症状が出現しないで生活できることにつながっていると考えられる。

## 第6章 幼児と高齢者の世代間交流場面の観察

第4章において調査研究、第5章において交流にかかわっている職員へのインタビューを通して、幼児と高齢者の世代間交流の効果や課題について理解することができた。本章では、実際の交流場面を観察することによって、幼児や高齢者の表情や声を聞き、さらに、仲介する保育士や施設職員の進行方法などの観察を通して、より具体的に幼児と高齢者の交流の状況、相互のコミュニケーション、仲介する保育士や施設職員の進行方法の工夫などを知り、交流の効果や今後の課題を検討する。

### I 大阪府B保育所幼児及びC保育所幼児とD高齢者ケア施設の高齢者との交流

B保育所及びC保育所とD高齢者ケア施設の交流の始まりは、6年前にO市にあるD高齢者ケア施設の施設長からNPO法人に依頼があったことである。内容は、入所している高齢者の生き生きとした生活を保つため、保育所の子どもたちと交流できないかということであった。そこで、NPO法人の仲介により、O市内の4カ所の私立の保育所の幼児とD高齢者ケア施設の高齢者との世代間交流が始まった。交流回数は保育所により違い、年に1回、2回、4回、6回である。内容はNPO法人職員がそれぞれの保育所職員及び高齢者施設職員と相談して決めている。D高齢者施設は介護保険による介護老人福祉施設であり、認知症高齢者の割合は60～70%程度である。

#### 1 B保育所幼児とD高齢者ケア施設高齢者との世代間交流

##### (1) 交流方法

B保育所とD高齢者ケア施設は、年に4回の交流をしている。高齢者が保育所に来ることもあり、子どもたちが高齢者ケア施設に行く場合もある。D高齢者ケア施設の高齢者が施設の車2台で、B保育所を訪問し交流する。

##### (2) 観察方法

筆者が、2015年2月に40分くらいの世代間交流の様子を観察した。観察内容は、仲介者による進行方法、プログラム内容、交流時間、幼児及び高齢者の表情や様子で、内容は観察ノートに記録した。

### (3) 観察した内容

筆者が NPO 法人職員 2 名と共に保育所玄関で待っていると、高齢者が高齢者施設の車 2 台で 6～7 人来られた。さっそく交流場所である子どもの保育教室とは別棟の独立している教会に案内した。教会の中は保育所職員が高齢者の椅子の準備をしてくれていた。観察した日は保育士 3 名、高齢者ケア施設職員 3 名、NPO 法人職員 2 名で運営していた。

高齢者が椅子に座って待っていると、保育所の保育士の司会で年長クラスの幼児 31 名が入ってきた。高齢者は嬉しそうに拍手で迎えていた。この日に交流したのは年長クラスのみであった。

訪問した高齢者の中には軽度認知症の高齢者もおられ、子どもが好きで参加しているとのことであった。また発達障害がある様子で交流以外の行動を取っている幼児もあり、保育士がそばにつき添って一緒に参加していた。高齢者とのゲームには参加していなかったが、最後まで交流場所で過ごしていた。プログラムとして、最初に幼児が歌を 3 曲披露した。その後、高齢者と一緒にボールを使ったゲームをしていた。高齢者は終始楽しそうに拍手やゲームをしていた。幼児は年長の 1 クラスであるので、高齢者とじっくり交流することができていた。また、幼児と高齢者が近い距離で交流していたこともあり、より親密な交流となっていた。年に何度か交流することで、お互いの顔も覚えてきて、さらに仲良くなっており、幼児と高齢者、それぞれがあまり構えないで握手したり、写真に写ったりしていた。高齢者に声をかけられて、幼児もリラックスして話をしていた。

年長クラスの幼児は、「自分たちは年長クラスになると、高齢者と交流するのだ」という自覚ができるということであった。また、年度末である 3 月には年中クラス、年少クラスの幼児も参加し、歌の発表を中心とした交流をする。そのことで、年中クラスや年少クラスの幼児も自分たちも年長になると高齢者と交流するのだという自覚を持つということであった。

## 2 C 保育所幼児と D 高齢者ケア施設高齢者との世代間交流

### (1) 交流方法

C 保育所幼児は、D 高齢者ケア施設の高齢者と、年に 6 回の交流をしている。高齢者が保育所に来ることもあり、幼児が高齢者ケア施設に行く場合もある。D 高齢者ケア施設の高齢者が施設の車 2 台で、C 保育所を訪問し交流する。

## (2) 観察方法

筆者は、2015年3月に40分くらいの世代間交流を観察した。観察内容は、仲介者による進行方法、プログラム内容、交流時間、幼児及び高齢者の表情や様子で、内容は観察ノートに記録した。

## (3) 観察した内容

普段は年長クラスの幼児21名と高齢者6名くらいの交流であるが、観察した日は3月であったため、幼児が卒園を控えており、お別れ会を兼ねた会であった。そのため年少さんから年長さんまで100名くらいの幼児が一堂に会して交流をしていた。場所は保育所の一番広いホールで行われていた。この日は雨が降っており、高齢者は施設の車2台で6名来られた。保育所職員と付き添ってきた高齢者ケア施設職員が傘をさして高齢者を教室まで誘導していた。車いすの高齢者もあり、NPO法人職員は、雨で汚れた車椅子の車輪を雑巾で拭いていた。保育士は担任と副担任で6名～8名が入れ替わりながら参加しており、高齢者ケア施設職員は3名、NPO法人職員は2名であった。司会進行は保育士がマイクを持って行っていた。

プログラム内容として、まず進行役の保育士が高齢者を紹介した後、年長クラスの卒園のお祝いであることを紹介していた。その後、小さいクラスからクラスごとに2曲ずつ歌の発表を行った。幼児たちはクラスごとに座っていて、自分たちの順番がくると立って歌を披露していた。年少クラスの幼児たちも時には席を立ったりすることもあったが、ほとんどが座って他のクラスの歌の発表を聞いていた。自分たちの順番になると張り切って練習した歌を歌っていた。高齢者は、年少クラスから年中クラス、年長クラスの違いも感じることができていたようであった。歌も年齢が上がるにつれて難しい曲を歌っており、「さすが年長さんはすごいなあ」と声をあげていた。年少と年中クラスの幼児は、歌が終わると部屋から退場した。最後は、年長クラスの幼児が残り、歌を披露していた。その後高齢者から幼児へ卒園のお祝いが手渡されていた。幼児からは代表の二人がお祝いを受け取り、お礼を言っていた。

最後に、高齢者と高齢者ケア施設の職員、NPO法人職員が手でアーチを作り、幼児たちがその中を歩いて退場していた。高齢者は「おめでとう」と口々に卒園を祝う声をかけており、幼児たちは嬉しそうに「ありがとう」と答えていた。車いすの高齢者もアーチを作って幼児を送り出していた。そのまま年長クラスの幼児は自分たちの教室へ帰っていった。

全クラスの幼児が一堂に会していたことより、年中や年長さんは、お兄さんお姉さんとして頑張らないといけないと自覚し、しっかり最後まで頑張り、年少さんもお兄さんお姉さんを見て、いつもと違う雰囲気を感じたり、態度や姿勢を見習ったりするという空気ができていて、頑張れていたのではないかと感じた。そのため、40分くらいの長い時間であったが、みんなそれぞれに遊ぶこともなく最後まできちんと座って頑張っていた。

またマイクを使って先生が進行していたので、高齢者も幼児たちも聞き取りやすかったと思う。

### 3 B 保育所幼児及びC 保育所幼児とD 高齢者ケア施設の高齢者の交流の考察

高齢者ケア施設の高齢者は、4カ所の保育所の幼児と交流しており、交流も5年目ということでお互いが顔見知りになっていた。そのため、ボールを使ったゲームや手遊びにおいても、もじもじする幼児もおらず、自然に接していた。高齢者の表情も穏やかで、幼児たちの歌を「上手」「さすが年長さんね」などとほめていた。幼児たちも普段の成果を発表できる場であり、また高齢者の温かいまなざしにより、さらに一生懸命歌ったり、ゲームをしたりしていた。これらの相互作用により、幼児たちは最後まで緊張感と集中力を維持することができ、高齢者も多くの場面で笑顔が見られた。

しかし、NPO 法人が仲介することの難しさもある。幼児と高齢者の世代間交流において、NPO 法人の仲介で交流をするという形態は少ない。その理由として、D 高齢者施設がいくらかの仲介料を NPO 法人に支払っていたが、その仲介料は額が少なく、職員は必要経費の多くは持ち出しで行っていた。また、施設の方針が変わったことでこれらの交流は5年目で中止となることが決まった。NPO 法人の職員がかかわることによって、保育所や高齢者ケア施設から付き添ってくる職員数や、準備、進行などの負担が減り、交流しやすかったのではないかと考える。NPO 法人職員の負担は大きかったかもしれないが、幼児と高齢者双方に効果があり、保育士や施設職員の負担が軽減され、5年も続いてきたと考える。仲介を誰がするのか、またそのあり方など、今後の課題と考える。

## II O 市にある複合型福祉施設における世代間交流の観察

同じ敷地内に併設する保育所と高齢者デイサービスセンターが併設されている複合型福祉施設での幼児と高齢者の世代間交流の実際について観察し、頻回に交流することの効



果や継続することの課題やその対処について知り、効果的な世代間交流の在り方を考える。

### (1) 交流方法

同じ敷地内に併設する保育所の幼児と高齢者デイサービスの高齢者が、規則的・不規則で交流している。交流は幼児たちがデイサービスを訪問したり、高齢者が保育所を訪問したりして行われている。観察した日は3回の交流が行われた。1回目は、保育所幼児の誕生会で50分程度、2回目は4歳児との交流で40分程度、3回目は5歳児との交流で40分程度である。

### (2) 観察方法

観察日時は、2016年10月、10時から15時である。保育所の保育士の案内で、交流が行われる時間に保育所または高齢者デイサービスを訪問し、交流の様子を観察した。観察内容は、プログラム内容、進行方法、交流時間、幼児及び高齢者の表情や様子、保育士のかかわり方で、内容は観察ノートに記録した。

### (3) 観察した内容

保育所は0歳児から5歳児までで134名の定員である。デイサービスは、65歳以上の高齢者が利用している。1994年から、保育所の幼児とデイサービスの高齢者が交流している。交流内容は、定期的なものとは非定期的なものがある。

定期的なものは、一つ目として、毎月1回、保育所とデイサービスのそれぞれの誕生会に相手を招待している。

二つ目として、5歳児が月曜日から金曜日まで分担して訪問日を決めて、毎月1回高齢者の朝のお迎えをしている。曜日を決めているのは、デイサービスであるので利用する高齢者が毎日変わることと、同じ曜日を担当することにより顔見知りになりやすいからである。内容は、送迎車で施設に着いた高齢者を迎え挨拶するとともに荷物を持ち、エレベーターまでの10mくらいの廊下を一緒に歩きながら話をするというものである。

非定期的なものは、幼児たちが運動会などの行事のために練習したことなどを披露したり、創作したものを見てもらったりといったものや、高齢者が幼児たちの遊んでいる様子を参観するというものである。これは、数日前に計画されることもあれば、急に幼児たちが「これ作ったからおじいちゃんたちに見せに行こう」と行くことがある。時にはそのまま、デイサービスで一緒におやつを食べることもある。

交流をするに当たっては、年頭に1年の計画を立て、毎月1回打ち合わせ会議をしている。

### 1) 保育所幼児の誕生会

0歳から5歳児の保育所幼児が1部屋に集まり、今月の誕生会をしていた。後ろで7名の高齢者が椅子に座り見学していた。司会進行は保育所の保育士2名で、かわいいエプロンをつけ、冠や帽子のようなものをかぶっていた。0歳児から順番に今月の誕生日を迎える幼児の名前の紹介やプレゼントを渡していた。その後誕生日を迎える幼児がそれぞれ特技の披露をしていた。高齢者は、何度も拍手をして「おめでとう」や「すごいね」と声掛けをしていた。保育士は見学している幼児が飽きないように、ゲームやクイズなどを入れながら進めていた。

### 2) 4歳児と高齢者との交流

誕生会終了後、4歳児がデイサービスを訪問し、歌の披露や手遊び、一緒に歌を歌うなどの交流をしていた。高齢者はデイサービスで作成していたカレンダーなどを作成する手を休めて、幼児たちを迎える態勢を取っていた。保育士が「今からキリン組の子どもたちが入場します」と言い、幼児たちは1列に並んで入場していた。高齢者と施設職員は拍手で迎えていた。まず幼児たちが高齢者の前に並んで手遊びを開始したが、高齢者のほうが人数が多く、1人で2名の高齢者と手遊びをしている幼児もいた。終わりには、握手をしたり、「ぎゅっ」と言って抱き合ったりしていた。終了時に、高齢者が色塗りし、職員が作成したメダルを首に掛けてもらい、幼児たちは喜んでいて、その後1列に並んで退場していた。

### 3) 5歳児との運動会ごっこ

午後には、5歳児が運動会で披露した組み立て体操を披露したり、一緒にゲームをしたりした。場所はデイサービスのある部屋ではなく、高齢者施設の広いホールで行っていた。高齢者は全員集まっており、大きな輪を作っていた。幼児たちは、保育士の言葉かけで1列に並んで入場していた。幼児たちが内側に入り、幼児を取り囲む感じで高齢者が円を作り、見やすく、またかかわりやすくしていた。高齢者が拍手で迎えると、幼児たちは慣れているようで、ものおじすることなく高齢者の前に並んでいた。まず保育士の説明と笛に合わせて組体操をした。かなり難しい様子で、組んで姿勢を保つのにふらついていたら、

高齢者が「頑張れ、頑張れ」と応援し、うまくできたら「上手やね」と言葉かけをしていた。その後玉入れゲームや手遊び、握手をし、最後に「ぎゅっ」と抱き合いをしていた。玉入れゲームは幼児と高齢者の混合チームで、2チームに分かれて競争する形であった。3回戦で、1人の高齢者が玉を持って離さず相手チームに負けてしまったため、1人の幼児が泣き出してしまった。高齢者は認知症による理解力の低下からか、きょとんとしていた。しかし、同じチームの高齢者に「よく頑張ったよ」などと褒めてもらったり拍手をしてももらったりすると、落ち着いてきて泣き止んでいた。高齢者が色塗りをして作ってくれたメダルを首にかけてもらい、とても喜んでいて、幼児たちは嬉しそうに1列に並んで拍手の中を退場していた。

#### (4) 複合型施設での交流観察の考察

交流に当たって、保育士と高齢者施設職員が年頭に1年の計画を立て、毎月1回会議を行って、方向性や内容など大まかなことから具体的なことまでを話し合っていた。この会議があることで、交流の方法や振り返りができ、次の交流へと活かされているのではなかろうか。年に1度や数回の単発なものではなく、継続的に効果的に交流していくためには、このような頻回の話し合いを持ち、準備し、方向性をすり合わせていくことが大切である。

また複合施設であり、高齢者と交流していることを知って、幼児の保護者が保育所を選ぶとき、また高齢者や家族がデイサービスを選ぶときに、交流をしているという理由で選んでいる人も多いとのことであった。複合施設であるからといっても職員が世代間交流の必要性や効果を知り、課題を解決していこうという姿勢を持っているから、継続されていると感じた。デイサービスであることから、高齢者は家で生活しており認知症のある高齢者の割合が少なく、幼児の特性を理解した行動をとることもしやすく交流でのかかわりも進めやすいと考える。

また今回の観察で、保育士が幼児の育ちを育むためのかかわりや、幼児と高齢者双方の有用感や達成感などを引き出せるように交流のプログラムや交流方法を工夫していた。例えば、幼児たちが高齢者の前に行くとき、バラバラではなく、1列に並んで入場することなどは、幼児の緊張感を高め集中することにつながり、高齢者の拍手で迎えられることによって、歓迎されているという感覚を持つことができる。高齢者においても1列に並んだ幼児たちが入場してくるまで期待の気持ちが高められるとともに、自分たちの拍手での歓迎の気持ちが幼児たちに伝わっていることが実感できていると考える。このメリハリをつ

けた交流の仕方がいい効果をもたらしていると感じた。長い交流の歴史の中から培われた技術ではなかろうか。

### Ⅲ 大阪府 S 市にある保育所幼児と併設する高齢者施設の高齢者の世代間交流の観察

#### 1 目的

保育所と同じ法人の高齢者ケア施設での幼児と高齢者の世代間交流の実際の場면을録画し、録画記録から観察記録を作成し、高齢者、幼児の表情や行動を詳細に分析し、交流の意義を検討する。また、交流に参加した幼児及び高齢者へ交流に参加しての感想についてインタビューを行う。また保育士及び施設職員へ、交流することの効果や交流を継続させるための課題についてインタビューを行う。これらから効果的な世代間交流の在り方を考える。

#### 2 方法

##### (1) 高齢者施設、保育所の概要と交流方法

大阪府 S 市にある K 保育所では、所属する法人内に六つの保育所と二つの介護老人福祉施設があり、それぞれに世代間交流をしている。K 保育所は 0 歳児から 5 歳児までで 130 名の定員である。A 高齢者施設は、65 歳以上の高齢者が 72 名入居し 10 名の短期入所、45 名のデイサービス利用者がいる。1985 年から、保育所の幼児と施設に入居している高齢者が交流している。K 保育所は年長組の幼児が、併設する二つの高齢者施設に 7 名ずつ分かれて行き、交流する形式をとっている。その理由は、施設間が離れていて施設の送迎バスを利用しているため、1 回の交流の幼児の人数が限られているからである。

##### (2) 手続き

1) 実施日時：2017年 9月

2) 場所：A 高齢者施設 3 階食堂

交流場所である高齢者施設を事前に訪問し、部屋の広さや交流の観察方法などを確認した。

3) 参加者：保育所幼児 7 名、高齢者 23 名、保育士 3 名（園長、主任、担任）、施設職員交代で 5～6 名

4) 観察方法：ビデオを2台、部屋の対角線上に固定し、また、別の角度から1名の観察者は高齢者、1名の観察者は子どもたちをビデオを手で持って録画した。

観察内容を終了後、録画を再生し、プログラム内容、進行方法、交流時間、幼児及び高齢者の表情や様子、保育士の関わり方を観察ノートに記録した。

#### 5) インタビュー：

a. 交流後に、保育所幼児7名、保育士3名に個別で施設1階の面接室で感想を聞いた。保育所幼児のインタビューは担任保育士1名が同席した。幼児、保育士のインタビューは固定ビデオで録画した。

b. 高齢者3名に個別に交流に参加した感想を交流を行った食堂および3階のダイニングで聞いた。高齢者のインタビューはICレコーダーで録音した。

c. 高齢者施設職員に対してもインタビューを行った。保育所保育士へは交流前に3名一緒に、高齢者施設職員へは交流当日に3名一緒に、いつからどのように交流をしているのかという経緯、交流の効果、心に残る交流時の事例、交流における課題、交流を継続させるポイントなどについて聞き、ICレコーダーで録音した。

#### 6) 倫理的配慮

調査に当たっては、事前に畿央大学の研究倫理委員会の了承を得て実施された。倫理審査で提出した文書を資料3に添付した。また対象施設及び高齢者に対しては、協力しなくても不利益は生じないこと、個人情報の保護には十分留意し、研究目的以外には使用しないこと、研究終了後には必要年数保管後資料を破棄することを依頼用紙に記載した。

### (3) 分析方法

1) 交流の観察：録画した動画を時間を追って記録を作成した。

#### 2) インタビュー

① 幼児への交流後のインタビュー：録画ビデオから各幼児の発話を書き起こした。

② 高齢者への交流後のインタビュー：交流に参加した高齢者の中で、施設職員が選んでくれたコミュニケーションができる高齢者3名にインタビューしICレコーダーに録音したものを書き起こした。

③ 保育士への交流後のインタビュー：録画ビデオから各保育士の発話を書き起こした。

④ 保育士への事前インタビュー：交流の半月前に3名の保育士にインタビューしたものをICレコーダーに録音し、発話の内容を交流の効果、課題、交流を継続させ

るポイントについての観点から書き起こしカテゴリ化した。

- ⑤施設職員へのインタビュー：交流当日に高齢者施設職員 3 名にインタビューし IC レコーダーに録音し、発話の内容を交流の効果、課題、交流を継続させるポイントについての観点から書き起こし、カテゴリ化した。

### 3 結果

#### 1) 交流場面の観察

13 時 30 分過ぎから会場である 3 階食堂に施設職員が高齢者を誘導し、集まってもらった。手押し車や杖で歩行可能な高齢者は、自分の好きな席に座っていた。20 名近く高齢者が揃ったところで、幼児が到着した。高齢者は一斉に幼児を見て笑顔で迎えていた。幼児は初めて高齢者と対面するので恥ずかしがったり、緊張したりしており、保育士は食堂の小テーブルを準備し、その下に幼児を座らせて待機させていた。

入口にも高齢者が集まり、保育士の進行で交流が始まった。表 26 に録画記録から交流中の全体の流れ、高齢者の様子、子どもの様子、保育士誘導について時間を追って示した。

表 26 世代間交流のプログラム及び幼児、高齢者の様子

時間	全体の流れ	高齢者の様子	幼児の様子	保育士の誘導(担任)
13:30	職員が高齢者を食堂に誘導	車椅子の人、手押し車で、自分で歩行できる人 8 人		
13:45	幼児到着し、3 階会場に着く	一斉に幼児を見ている	幼児 7 人到着	
	職員がテーブル準備		幼児はテーブルの下に座り高齢者を見ているが、表情は硬い	幼児を小テーブルの下に座らせる
13:50	挨拶・交流の開始	高齢者拍手、特に正面の高齢者が声をかける	保育者に促されて幼児たちの挨拶。一生懸命挨拶している	7 人の幼児をならべて、「挨拶しましょう」という。挨拶時には、一人ひとり幼児の肩を触って合図する
			1 人ずつ名前を言う	
	歌(大きな栗の木の下で)	歌を聞きながら一緒に手を動かす 3 人	『大きな栗の木の下で』	歌を歌うことを説明
	歌		もっと大きな栗の木の下で、小さな栗の木の下で	
13:50	歌(森のくまさん)	手をたたく人 2 人	『森のくまさん』、保育士と輪唱	曲の紹介。輪唱は保育士がすることを説明

		B) 歌は聞いているが幼児は見えていない。		
	歌(落ちた落ちた)	入口側にも高齢者並ぶ	『落ちた落ちた、何が落ちた』の歌と振り	曲説明
		落ちたリンゴを幼児からもらう	落ちたリンゴを高齢者二人に届ける	リンゴを届けるように言う
	歌(握手でこんにちは)を歌いながら握手		『てくてく歩いて握手でこんにちは』を歌いながら高齢者Cに握手する。(恥ずかしそう、前列の中央付近の人に集中)3回繰り返す	高齢者と握手するように言う
		A) 左手を触ってもらった高齢者、うなずいている。姿勢は左手おなか、右手は胸においたまま、動かせない。最初から座っている	保育者の促しで後ろの列の高齢者とも握手するが、全員ではない	同じ人にばかり行くので、後ろの人にも行くように言う
		B) 子どもに両手を優しく撫でてもらう		
		C) 近くの高齢者まで握手の順番が来たが、男性のところには来なかった。次のプログラムへ		
14:00	劇(大きなカブ)	だんだん高齢者の合いの手が大きくなる	おじいさん、くま、孫、うさぎ、ねこ、犬、ねずみと順番に出てカブを抜こうとする	劇の紹介、カブや草の背景をセット
		C) 「うんとこしょ、どっこいしょ」の時は幼児たちのほうを見ている		
14:05		B) 劇の間はマイペースな動き		
		C) 劇見ないで横をみたり少し寝たりしている		
	歌(幸せなら手をたたこう)	笑顔になり、一緒に手をたたいたり足鳴らしたりする高齢者増える	『幸せなら手を叩こう』	歌の紹介
		B) 「手を叩こう」で、うなずいている		
	幼児の挨拶		挨拶、今日はありがとうございました	挨拶すること言う
	幼児が高齢者と握手	A) ありがとうにありがとうと答える。幼児たちのほうを見て、顔を動かしている。姿勢変わらず	ありがとう、といながら高齢者と握手して回る	高齢者と握手することと言う。
		A) 3人くらいに握手してもらう		後ろの人とも握手するように言う

				同じ高齢者ばかり重なってしまうので、実際に子どもたちの肩を押して全員の高齢者と握手できるように促す
		B) 握手してもらい幼児が近くに来ると両手を出している。やや笑顔も出ている。劇の間はふつうの表情		
		B) 多くの幼児との握手で笑顔が出ている	入口側の高齢者と握手していない子に、「この人とも握手したか」と声をかけている	
		C) 何人かの幼児に握手してもらっているが、全員ではない。2列目の左端であり、身体の高い男性で、笑顔もないので、幼児たちも忘れがち		
14:10	全員の高齢者と握手	何度もありがとうという高齢者がいる	最期に挨拶「ありがとうございました」	
		大きな拍手		
14:15	幼児退室	高齢者は見送っている		
		1人ずつ退室。自分で動ける人は手押し車を押して退室。他の人は職員による誘導を待っている。		
		車椅子を自走できる2名退室		
		A) 職員の介助で退室(車椅子)		
14:25	全員退室			

注) A (女性高齢者), B (女性高齢者), C (男性高齢者) の同じ人を表している

録画した交流の場面から幼児、高齢者の行動を見てみる。

交流内容は、歌や劇などの幼児の発表と幼児と高齢者の握手などによる触れ合いであった。最初緊張していた幼児たちは、保育士の「座って待っているように」との促しや、肩に手をおいての励ましや、合図をされることで、緊張しながらも挨拶したり、歌を歌ったりしていた。特に1列目によく声をかけてくれる高齢者がいたことから幼児たちはだんだんいつもの調子を取り戻していったようである。1回目の握手をしたことで、高齢者が



とても喜び、手や顔を動かすなどの反応も活発になったころから幼児たちはリラックスできていた。最後の握手では、保育士や職員の声掛けで2列目の高齢者や入口に座っている高齢者へも握手をして回っていた。さらに幼児がほかの幼児にも「こっちの人にも握手してあげて」という声かけもしていた。

高齢者は、幼児が3階の会場に到着した時から一斉に幼児たちを見つめ、笑顔や拍手をする高齢者もいた。1回目の握手で動きにくい手にそっと握手をしてもらった高齢者Aはその後、歌や劇をしっかりと見ていた。高齢者Bは、幼児たちに握手してもらってからは、幼児が来ると笑顔で手を出していた。歌をあまり聞いていなかった男性Cも、握手後は幼児が近くに来てくれると顔や手を動かす反応を示していた。

高齢者は難聴などがあり、幼児たちの歌を聞き取りにくかったり、認知症などで内容を理解する力が低下していたり、また幼児たちの声は高いので聞き取りにくく、内容がよくわかっていないようであったが、握手で触れ合ってから、幼児たちのことがより認識できるようになっていた。認知症であっても、快やうれしい気持ちは残っていると感じた。

## 2) 交流後のインタビュー

### 2-1) 幼児への交流についてのインタビュー

交流終了後に、個室で7名の幼児に対してインタビューした結果を表27にまとめた。

表27 幼児への交流についてのインタビュー  
( )はインタビュアーのことば

順番	幼児		これからもここへ来ておじいさんやおばあさんと遊びたいですか	その他
#1	Aちゃん 6歳 男児	楽しかった。(どんなところ)握手するところ楽しかった。(どうして)両手で握ってもらえるところ。(どんな気持ちでした) <u>楽しいな</u>	うなずく	(どんなことが頭に残っている?)おもいつかない。(今日は何をして)劇。おじいさんとおばあちゃんたちに遊んであげた
#2	Bちゃん 5歳 男児	楽しかった。(どんなところ)握手するところ。(握手してどんな所楽しかった)(どんな気持ちでした) <u>うれしかった</u> 。(おじいちゃんおばあちゃんどんな気持ち) <u>元気だよ</u> という気持ち	また、来たい。(どんなことしてあげたい)握手してあげたい。	おじいちゃん、おばあちゃん劇見て嬉しそうだった。(B君は?)ちょっとはずかしかった。

#3	Cちゃん 女兒	最初はドキドキしたけどな。 <u>頑張って</u> やっ てな。やっているうちに <u>楽しくな</u> った。(どんな所が楽しかった) 歌を歌 う所、劇するところ。おじいさん、おば あさんも <u>楽しい</u> なと思っ ている感じがした。(握手は?)何も言 わない。(楽しかった?)戸惑いの表情	(また来たい)う ん	(すごく練習し た?)うん、(練習 も楽しかった?)う ん
#4	Dちゃん 女兒	<u>緊張</u> したけど、 <u>楽し</u> かった。最初は <u>緊張</u> したけど、だんだん慣れてきた。(どん な所が楽しかった)がぶの劇(何にな ったの)うさぎ。(おじいちゃん、おば あちゃん、どうだったかな)おじいさん、 おばあさん <u>楽し</u> かったと思う。(握手ど うだった?) <u>はずかし</u> かったけど頑 張って握手した。(そしたらおじい ちゃん、おばあちゃんどうだった?)ニコ ニコの顔してた。	(また、来たいで すか?)うなず く。(何したい の?)それはまだ 考えていない。	(おおきなかぶの 練習、沢山しました か?)うなずく。 (また、頑張って ね)うなずく
#5	Eちゃん 男児	<u>嬉しい</u> 気持。(どんなところが嬉し かった)おばあちゃんたちが握手して いるところが嬉しかった。(何してあげ た)大きな栗の木の下で。(劇は何に なったの?)おじいちゃん。(あと、ず っとまわって何かしてあげたでしょ) みんなと握手した。 <u>嬉しい</u> 気持がした。 (どんなところ?)おじいちゃん、おば あちゃんに握手してもらった。(気持 ちが通じた感じ)	おうちにおじ いちゃんだけ いる。 (また、来たい ですか?)うな ずく。	(今日、手遊びし たかな?)うな ずく。 (先生助け。大 きな栗の木の下) (おじいちゃん、 おばあちゃん 嬉しい気持)
#6	Fちゃん 女	<u>楽し</u> かった。(どんなところが楽し かった)握手したところ。(握手した ところどんな気持ち) <u>嬉しい</u> 気持。 (おじいさん、おばあさん) <u>楽し</u> い(楽しい感じがした)(他には何 してあげた)(お歌うたったり、劇 した?)7人で。(ゆめかちゃんは何 のお面かぶったの?)まご。	(また、来たい ですか?)来たい。 遊んであげる。 (おじいちゃん、 おばあちゃんは 皆来てくれてど んな気持ちか な?)嬉し かった。	(一生懸命練習 した?)うん。 うなずく
#7	Gちゃん 男児	(どうでしたか?) <u>楽し</u> かった。(ど んなところ?)遊ぶとこ。(どんな遊 びをした?)大きなくりの木、(それ から)(じょうずにできた)うん。 (何になった)ネズミ。(みんなま わって何した?)握手(握手はど うでした?)おじいちゃんおばあ ちゃん(楽しそう)	(何してあげ たい?)(また、 劇見せてあげ たい?)うな ずく	

幼児の気持ちを表すことばに下線を引いた。気持ちを表す心的語は「楽しい」が7名中の6名に、「嬉しい」が2名に、「緊張」が1名、「元気」が1名であった。全員が「楽しい」「嬉しい」のポジティブな気持ちを表現していた。握手が楽しかった、嬉しかったといった幼児は4名いた。特に握手したことで高齢者が喜んでくれたことを幼児たちもうれしく感じていた。また、高齢者に自分たちが元気を与えていたという有能感を感じている幼児もいた。「また遊んであげたい」という幼児もいた。自分たちの歌や劇、握手による

って高齢者にこのような影響を与えることができ、昂揚感を感じるとともに、このように感じてくれる自分の存在を知ることによって自己肯定感が高くなっていると考えられる。

## 2-2) 高齢者へのインタビュー

交流終了後に、3名の高齢者に対して行ったインタビューの結果を表28にまとめた。感情の表現を表すことばに下線を引いた。

表28 高齢者へのインタビュー

	インタビュアー	高齢者
Iさん(職員の手引きで歩行できる)	今日の子どもたちとの交流はどうでしたか	<u>可愛くて</u> 、 <u>かわいくて</u> 。抱っこしてねんねさせてあげたい
		先生方もこの子たちを面倒見ているので <u>尊敬</u> します
	どんなところが楽しかったですか	全部の身振り手ぶりが <u>かわいかった</u>
		私たちは学校もろくにいってなくて、無学の人間なので、何もかもが <u>かわいらしく</u> てね
	歌はどうでしたか	歌は <u>上手</u> ね。あのよう <u>に頑張</u> っておとなになると思うと涙がぼろぼろ出る
		私たちの小さいときは戦争があったので。平和というのはいいですね。 <u>楽しい</u> 限り。戦争は <u>嫌</u> ですね
		先生たちも大変でしょうが、あの子たちを見守っていてあげてください。
	何回くらい参加していますか	たびたび聞いている。回数は覚えていない
		私たちの孫は30歳くらいになっている
		遅れてきた。もう少し見ていたかった
Sさん(車椅子)	今日はどうでしたか	<u>よかった</u> ですね
	どういうところがよかったですか	みんな <u>よかった</u> 。小さい子は <u>かわいい</u> 。
		うちの孫はまだ小さいから。離れたところにいる
	何回くらい参加されていますか	何回も来ている。 <u>大好き</u> です。
	どういうところがよかったですか	よく覚えて <u>頑張</u> っていると思っ てね。 <u>可愛い</u> など
	可愛いですよ。元気出ますよね	私、子ども <u>大好き</u> です。次も呼んでください。元気が出る。
	最初から参加されていましたか	初めのほうから見ていた。 <u>うれしかった</u> 。 <u>よかった</u> ですよ、とても。子どもは好きだから。
	次もまた参加されますか	参加させてください。
	今日参加されてどうでしたか	<u>感激</u> しました

Tさん(車椅子)	どういうところがよかったですか	一生懸命。よくやっていると <u>感心</u> しました。
	子どもたちはどうでしたか	何ていうか、 <u>かわいくて</u> 、かわいくて
	可愛かったですね	<u>感激</u> しました。心が <u>温か</u> くなって涙でそうでした。
	いつも参加されているのですか	初めて参加しました。
	次も参加されますか	参加したいです。 <u>ありがたい</u> こと。

高齢者へのインタビューでは「かわいかった」が3名中3名の発話にあった。また、「よかった」「感激した」「温かくなった」「感心した」「大好きです」「ありがたい」といったポジティブな感情表現がなされていた。幼児たちが一生懸命自分たちのために歌ったり劇をしたり握手してくれたりしたことがとてもうれしいようであった。

また、3名中2名が自分の孫の話に言及した。認知機能の低下は見られるが、交流に参加して温かい気持ちになり、自分の家族のことが思い出されたのであろう。戦争のことや孫のことなどいろいろと思い出し、回想することにつながっていた。

高齢者はほぼ全員が認知症であることから、「楽しかった」と答えるが、「どこが楽しかったのか」「どの場面がよかったのか」などの質問については答えられない。また詳しい内容も覚えていない。参加状況についても「いつも参加している」「今回は初めて」と答える。次回の参加については3名とも「参加したい」と答えている。認知症症状により記憶障害や今、どういう内容を幼児たちがしているのかという理解力は低下しているが、「かわいい」「よかった」「感心した」などの感情は残っていて、それを交流から感じていた。認知症高齢者にとって、これらの快や楽しい感情を持つことは認知症の進行防止やBPSDの予防となるであろう。

### 2-3) 保育士へのインタビュー

交流後の保育士の感想を表29にまとめた。

GF(おじいさん)、GM(おばあさん)と略記

(Q ) や ( ) はインタビュアーのことばである。

表 29 保育士への交流後インタビュー

インタビュアー	年長組担任 K 先生（交流は 5 歳児担当で 3 回目）
	（子どもたち）緊張していましたが、前（前列）にいらっしゃったおばあちゃん達がことばをかけてくれたり、微笑んだりしてくれたので、緊張なくいけたのではないかと思います。
	GF, GM が喜んでくれた気持ちが子どもに伝わったと思う。私も見て、子どもが楽しそうにやっているなと、私も楽しんできました。緊張しながらも楽しさが伝わったのかなと思う。
（Q 握手みたいなものはいつもはしていない？）	最後の握手はするが、ゲームの中でちょっと触れ合う握手は今年とりいれた。「おちたおちた」GF, GM 一緒にやってくれたかなと思うが、ちょっとふってみたが、ちょっとそこは伝わらなかった。
（Q 握手はどうでしたかね）	GF, GM で動けない方が多いので触れ合えたらいいなと思ったので。
（Q こどもは？）	どう接していいか、あの子たちの GF, GM より高齢の方なので、触れ合ったほうがいいのかなど。
（Q 年に何回？）	5-6 歳児は 9, 10, 11, 12 月の 4 回。子どもは 1 回ずつ 7 名ずつ（参加）。
	主任 I 先生
（Q 感想）	子どもは子どもの前でやると恥ずかしがっていますが、やはり、GF, GM の前でするという気持ちを伝えたいところはあったのかなと。
（Q あとはどうですか？） （Q 子どもいつもと違う？）	少し、緊張していた。ただ、以前から話していますので、こういう機会に GF, GM と触れ合いというところがありますので、GM に会った気持ちはどうか、GM はしゃべれないけど見に来てくれているのはどんな気持ちになっているんだろうというのは以前から振り返っていましたので、まあ、そういうところは握手したり、さわったりしながら、考えてくれたのでは。
（Q 子どもは握手が楽しかった。触れ合うのが良い。GM, GF も嬉しそうだったと感じてくれている）	そうなんです。
（Q 練習は大変ですか？）	いえ。練習は楽しそうに。
（Q ここだけで披露するだけでない）	誕生会やクラスの中で皆で代表でやったり、発表の機会は今もっています。『りんご』の手遊びは瞬発性、神経をとぎすまさないといけない。常に気持ちを集中させる。ゲーム性がある。
（Q 握手）	人と人のぬくもり、知らない人、喜んでくれるという気持ちはある。大きい組さんから「涙を流す人もいる」、「手をはなしてくれない人もいる」と聞いていた。自分にその番がまわってきたというドキドキの気持ち、素直に GM, GF 元気という気持ちがあると思います。
	園長 H 先生
（Q 感想）	この日を迎えるにあたって、子ども達が一生懸命、GM, GF に見せるからといって『大きなかぶ』の練習をしていたのが印象的。かなり、期待をもって、自分達のパワーで GM, GF が元気になるといっておりました。はずかしがってはいましたが、その通り、演技してくれ、歌をうたってくれたので、ほっとした。

	<p>入居者の方もがいつもより沢山、集まってくださっていて、前の列の窓側の方が「よっ」といつもお声をだしてくれる方なのですが、2列目や3列目のちょっと身体の不自由な方もこうやって握手の時も反応してくれていたり、一番後ろの列の(Q車いすの方)寝た感じの方がお熱があったそうですが、子ども達の声聞きたくらいとわざわざ起きて出てくれたみたいで、声をかけると何か言って反応してくれました。何をおっしゃっているのかわからなかったんです。真ん中のはじっこにいたおじいちゃんは(Q太った人ね)ずっと、こうやって反応をあまり返してくださらなかったんですが、最後、子ども達が一人一人挨拶、握手していった時に手をだして応じてくれて、みんなに応じてくれたんですね。</p> <p>で、あの、『テクテク歩いてきて』っていうお歌で握手に行った時に、真ん中のリボンつけていた白い髪の方が、お隣の方で、子どもがとまってしまったので、「あー、まだかー、まっているわよ」とおっしゃったんですね。</p> <p>そしたら、うちのあの5歳児の男の子がぱっとそれにこたえて、両手をだして、リボンをつけているGMと前にとまったGMの両方に握手した。すごい、機転をきかすことができた。そしたら、「あーまっているわ」といったGMが「はー」って体をゆすられて「ありがとう」ということを表現してくれた。お声もすごく、しゃべっておられた。</p>
(Q 子ども達も何が楽しかったと聞くと、握手といった)	<p>こうやって話さないGMもいるし、どうしたもんかなという顔をしていた。(Q子どもによっては緊張したりといった子どももいた)よかったです。</p>
	<p>私達もこういうプログラムをずっとやっても、検証という形で効果とか、高齢者さんの気持ちを聞く機会や介護職員さんの気持ちを聞く機会があったら報告していただきたいと思っています。ありがとうございました。</p>

保育士は、幼児が交流のために一生懸命練習をしており、かなり期待を持って「自分たちのパワーで元気になる」と言うように、幼児たちのモチベーションを高め、また成功するように事前から練習していた。これらのことから幼児たちの交流への期待が高まり、実際に高齢者が喜んでくれる反応を体験することで、幼児たちは有用感を感じていたと考える。また幼児たちの緊張をとるための声掛けや体へのタッチ、さらに少しずつ盛り上げるプログラムの工夫もしていた。幼児は高齢者の「まだか待っているわよ」の言葉を聞いて、二人の高齢者と握手するという、機転をきかした行動をとっていた。

### 3) 交流全体についての職員へのインタビュー

#### 3-1) 保育士への事前インタビュー

保育士園長、主任保育士、担任保育士の3名に対して集団でインタビューした結果を交流の経緯、交流の効果と課題、交流で気をつけていることなどの観点からカテゴリ化し、表30に示した。

表30 保育士への事前インタビュー

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
自然な形で交流する	自然な交流	なじみのない自分のおじいちゃんおばあちゃんよりももっと上の人を知る。
		以前の高齢者は介護度が低く一緒に運動会や演芸会ができた。一緒に折り紙を折っていたりおしゃべりをしていた。
		子どもたちの育ちや高齢者の生活レベルや生きがいなどを感じて始めたのではなく、世代間交流の良さもわからずやってみて、行ってよかったね、とはじまっている。
		何かゲームをするような集いでなく、普通の、この時間はおじいちゃんおばあちゃんと過ごすという集い。
子どもと高齢者の相互の積み重ね	家族のような思い	祖父母と離れて母親と暮らしている幼児が、入居のMさんを慕って毎月交流し合うのを楽しみにしていた。Mさんも孫のようにかわいがって。周りもN君のおじいちゃんといって。卒園して、またMさんの生活レベルが落ちてきたことなどで関係性は消えてしまった。血縁関係でないのに交流を通して深まることのできるのかと思いついて残っている。
	高齢者の生き方に触れる	全盲の高齢者が三味線を演奏されて。5歳の子なりに眼が見えなくて三味線を弾いて、自分で生活している。服も着替えてご飯も食べているのを目の当たりにして「すごい」と。人の生き方に触れて自分も頑張らないと、と感じたようである。
他者に対する子どもの心の成長	祖父母への気遣い	自分のおじいちゃん、おばあちゃんのことを口々に話して。「最近会っていないけどおじいちゃんがおつてな」と。病気や病院に通っていることを気遣ったりしている。
		交流した日は家で「おじいちゃんおばあちゃんに合いたい」「今度いつ行くの」といわれたと保護者から言われた。
	子どもの心の育ち	家に帰ってから高齢者の話をして振り返るといのもすごく大事なのかなと思った。
		人前で表現するのが苦手な子もいるので、応援しつつ、励ましつつやっている。
交流に対する子どもの期待	行きバスは遠足気分もあったが、帰りは「よかったなー」「涙流してくれて、きょううれしかったんやでー」と。	
老性変化や障害を自然に受け入れる	認知症症状の理解	小さいころからいろんな場所で表現していくことを経験して積みあがっているの、緊張しても頑張ろうという心は育っていると思う。
		クラスを分けていくので、最初に行った子の話を興味津々で聞いて、次に行ったときに自分が体験したことが結びついている。
		認知症の方で叫んだり急な動きをされるのではない。
		声を出したりするときには職員が「うれしいんやけど、何々さん、こうときましょ」と声をかけるので子どもなりに「ああ、うれしいんだ」ととらえている。
子どもの特性による高齢者への効果	高齢者の素直な喜び	「うれしいから気持ちが高ぶったみたいよ」といえば叫んでも「そうなんだ」ととらえている。
		体操している時に前に出てくる人がいて、「どうしたの」という感じで子どもはびっくりしてはいたが、「一緒に踊りたかったんだって」といえば「なんや、そうやったんか」と納得していた。
子どもと高齢者の相互の積み重ね	高年齢者の素直な喜び	初めて交流した時は1つの行事とみていた。しかし、最後に1人ずつ握手するとき、すごく握って子どもは「えっ」とびっくりするところもあるが、もっと何かできたのではないかと。
		これほど子どもたちとの1時間を楽しみにしているのか。

		お年寄りが知っている歌をいれたり、ゆっくりと歌うことで、口ずさんでずっと口を動かしたりする人もいれば、手拍子をゆっくりしている人もいて楽しんでいるかなと感じる。 ちょっと昔を思い出したり一体感を味わってもらえれば。
	子どもの明日への期待	高齢者は子どもと触れ合っとうれしい、子どもを見るだけで未来を感じている。 子どもは今日できなかったことも明日はできるかもしれない。高齢者も子どもの未来にエレルギーを感じているのでは。
交流を盛り上げる	交流を見据えた準備	事前に子どもでできる劇や組み立て体操などに取り組んでから行く。
		子どもたちにも事前に、どういう方がいるかを話したうえで行くので、ちょっと期待を持っていく。
		最初は手遊びから初めて、おじいちゃんたちとの距離がちょっと縮まって、歌を歌ってメインの劇や体操をするなどを組み立てる。
	体調に気をつける	水筒は持っていき、水分補給している。
		交流から帰ったら、1日の様子を見て子どもの体調に気をつけてみている。
		熱がある子や体調の悪い子は次回の交流に行ってもらおうなどしている。
		インフルエンザなどがクラスではやっているときは交流を見合わせず。向こうと連絡を取り合う。アルコールで消毒などはしていない。
	おじいちゃんたちの体調が悪いときは、歌だけにしてふれあいはなしにしている。	

### 3-2 ) 職員へのインタビュー

高齢者施設職員 3名に対し集団でインタビューした結果を、交流の効果と課題、交流で気をつけていることについての観点からカテゴリ化し、表 31 にまとめた。

表31 施設職員へのインタビュー

カテゴリ	サブカテゴリ	内容
子どもとの交流による高齢者の変化	笑顔になる	普段見せてくれないような笑顔をみられるのが一番いい。
		小さなお子さんが好きな方が多いので参加したい方が多い。
		普段からそんなににこにこすることが少ない人もいい笑顔だった。
		参加されただけでもニコニコされて、終わるころには感極まって泣く人もいる
	コミュニケーションを深める	普段から黙しがちで話ができない高齢者もニコニコして握手しようと一生懸命手を差し伸べていた。



		<p>最近、しゃべらなくなった方も、園児が行ったらこっちも来てという感じで手を差し伸べていた。</p> <p>手が上がりにくい人や手が震える人も一生懸命手を差し伸べていた。</p> <p>高齢者の園児を待っている姿はすごいと感じた。</p>
	高齢者への刺激	<p>交流後に「よかったわー」とフロアに戻られてからも感想を言われていた方もいる。</p> <p>部屋に引きこもりがちな人もいたので、誘って出てきて触れ合うことは刺激になる。</p> <p>子どもが好きな高齢者は、職員も把握しているので誘導させていただく。</p> <p>「また来年も私が見に行きます」という人もいる。</p> <p>耳の悪い人もいるので劇の内容まではわからないが、見ただけで無条件で小さい子がかわいくて「もう、涙出てきた」「拭くもんなかった」という人がいた。</p> <p>熱があった人も子どもが好きで参加したいとのことでアイスノンして参加していた。</p>
自己の歴史を振り返る	子どものころを回想	<p>認知症でも、自分が子どものころに戻るのではないか。</p> <p>後で写真とかを見て思い出せる人は少ない。</p>
子どもの自己肯定感の高揚	子どもの有用感	<p>先生から、子どもたちも「僕たちが元気をあげてきたんだよ」「僕たちが握手してみんな元気になってくれたんだよ」といって、子どもにもいい影響があったと聞いた。</p> <p>「自分がいるだけで喜んでくれる」と自己肯定感につながる。</p> <p>高齢者が喜んでるのが子どもに伝わっていると思う。</p>
進行をスムーズにする職員の対応	認知症症状のある人への対応	<p>独語がある人は園児がするのに妨害になったり、子どもが歌っていたら辞めずに歌ってしまったりするので、そういう人はちょっと遠くのほうで見せよう。</p> <p>歩ける方はうれしくて参加しようとして子どものほうに行ってしまうので、離れたところにいてもらう。衝突事故があっても転んでもいけないし。</p> <p>認知症で気分次第で怒ることがある男性、子どもと一緒に踊りたいと踊りに行っていた。子どもをみたらじっと座っていることができなかったみたいで。</p> <p>途中で興奮するかもしれない人は職員が近くにいて気をつける。</p> <p>声をかけてくれる人やがっつり楽しめる人は前のほうに座ってもら。</p> <p>途中でしんどいと退場する人は入口の近くに座ってもらう。</p>
	高齢者の体調への配慮	<p>高齢者をあまり早くから誘導して待たせないように時間を図っている。</p> <p>感染症が流行っているときは、連絡を取り合って中止する。</p> <p>子どもが苦手な方は参加されていない。</p>
	子どもへの声かけ	<p>子どもがもじもじしていたら「大丈夫よ」「こっちに来てあげて」と声をかけてうまく誘導している。</p> <p>1回握手したら大丈夫と思うが、行くまでがもじもじしている。「2列目も行ってあげて」と声をかけるともじもじしながら行っている。</p>

無理をしない交流を続ける	自然にすること	続けるコツは、自然に普通にすること。特別に身構えない。
		交流も生活の一部なので、特別にこれをしないといけないとかはあまり思っていない。
		職員の人数を増やして対応することもない。。
		何回か回を重ねるごとに、子どもとの握手についてももう大丈夫なんだと思う

#### 4 考察

交流場面の観察や交流後のインタビューから次のことが明らかになった。まず、幼児への効果について検討してみる。

第一として、幼児の感情、情緒面の発達への効果が挙げられる。内田ら（2008）は、子どもは生れながらにして自らの感情を外に表すだけでなく、他者の表す情動にも反応する。また言葉でも自分の情動を表現できるようになり、それが他者を動かす力を持つことに行動レベルが気づくようになると、情動表出の操作もより巧みになってくると述べている。交流後の幼児へのインタビューにおいても、自分たちが握手したことでおじいさん、おばあさんが喜んでくれたことを5～6歳の幼児では、十分に自分の情動を表現するには難しかったが、「うれしい」「楽しい」などの心的状態語で表していた。世代間交流は子どもの感情の表現を豊かにすることが示唆された。

また、感情面の発達には握手などの高齢者との直接の触れ合いにより高められた。握手などの触れ合いは、山口（2006）は、皮膚にある遅速C繊維が、スキンシップのように肌をゆっくり撫でるような刺激に反応し、腹側脊髄視床路を通り、愛情や嫌悪感といった感情を喚起させる働きがあると述べている。子どもと高齢者の握手は、高齢者へは快の刺激となったり親愛的な感情を伝達したりしていた。子どもにとっては、自分たちの握手が高齢者の感情を高める効果があることを実感し、自己昂揚感を高めていた。また子どもと高齢者への相互性を高めていた。触覚は、自己を知り、外界を知り、対人関係を築き、生命を支えるというように、生きていくための必要不可欠の重要な感覚である（山口，2006）というように、握手などの触れ合いが交流の効果を高めていた。

また、高齢者が「わかるわかる」と掛け声や拍手、手拍子などをすることで、幼児は相手に共感という受け止め方をしてもらったと感じ、高齢者と幼児の相互関係を結びつけ、親密さを強化していた。

第二に、幼児の自己有能感、自己肯定感を高める効果がある。高齢者に自分たちが元気を与えていたという有能感を感じ、高齢者にこのような影響を与えることができる自分の存在を知ることによって自己肯定感が高くなっていると考えられる。

第三に、幼児の自発性を高めていた。保育士の「後ろの人にも握手してね」などの言葉で2列目、3列目の高齢者の前へ行き握手し、さらに「こっちの人にも握手してあげて」とほかの幼児に声をかけていた。また、機転を利かせて二人の高齢者と握手するなどの行動を自然にしていた。子どもは未来への可能性を持っており、このような交流の中でも自発的な行動をし、成長している。

世代間交流は、子どもの感情面の発達を促し子どもに自信を与え、成長を促す活動であると言える。

次に高齢者への効果を検討してみる。

第一に、交流は高齢者の感情面に働きかけていた。交流後の高齢者へのインタビューから、難聴などがあり聞こえにくかったり、認知症による理解力の低下や記憶力の低下などがあったりして、幼児たちが行ったプログラムの内容はよく覚えていなくても、涙が出るほどかわいと感じていた。また笑顔を引き出し、子どもの頃のことや孫のことを思い出すなどの回想をしていた。特に途中で握手をしてからは、今まであまり幼児たちを見ていなかった高齢者も、幼児たちの方へ視線を向けたり、歌を聞こうとする様子が見られた。施設に入所している高齢者は、部屋に閉じこもりがちで発語が少なく、手の震えや動きにくさなどの身体症状がある場合も多いが、幼児との交流が刺激となり身体面や精神面、意欲や自己肯定感など様々な効果につながっていた。

南部（2013）は、高齢者施設で生活する中度から重度の認知症高齢者へ、タッチを施術することで、高齢者にリラックス感や施術する者との関係を親密にするなどの反応が見られることを明らかにした。山口（2006）も、皮膚への撫でる刺激は、高次の知的機能を司る前頭葉や、感情や情動を起こす辺縁系と神経線維の連絡が行われると述べており、触れるという行為は幼児と高齢者それぞれに効果があり、また相互の関係を親密にしていた。

第二に、過去を回想し、記憶を呼び起こす認知面への効果も見られた。高齢者のインタビューで戦争のことを語ったり、施設職員へのインタビューで高齢者が自己の歴史を振り返ったりする機会となっているとの発話もあった。

このように、交流は幼児、高齢者ともに精神面への効果が見られた。

次に保育士、施設職員の交流を実際に進めていく点についてインタビューから明らかに

なったことを考察してみる。

第一に、保育士のプログラム展開の工夫が挙げられる。うまく進行するように交流の前から練習をするなど幼児たちのモチベーションを上げるための働きかけをしており、実際の場面でも声をかけたり肩に手を置くなどの緊張をほぐすようなかわりをしていた。プログラム内容も幼児たちが緊張しているとき、ややほぐれてきたとき、うまく進行して高齢者が喜んでくれたときに合わせて曲を選び、振り付けを入れていた。盛り上がったところで劇を入れたり、中間と最後に高齢者との握手という触れ合いを入れている。幼児たちがどのように高齢者の感情面へ刺激を与えるかが交流を盛り上げる大きなポイントと捉え、交流を進行させていた。保育士は、参観日や運動会などの行事を何度も経験しているため、高齢者との交流においても対象の反応を捉えてスムーズに幼児たちがプログラムを進められるようなかわりが自然とできるのを感じた。

第二に、施設職員のインタビューから、交流の進行やプログラム内容の立案は保育士に任せて、交流がスムーズに進むように高齢者の体調管理や気持ちのサポート、幼児たちが動きやすいように幼児たちを誘導したり、声掛けをしたりするなど、保育士の補助的支援をしていた。特に高齢者の座る席の配置を考えたり、高齢者の体調をみながら参加してもらったり、部屋へ帰るなどの体調管理をしていた。子どもが好きで交流に参加したいが、独語や一緒に歌を歌うなど、交流の進行に支障があると考えられる場合には、職員の近くへ座ってもらっていた。

さらに、かかわる保育士、施設職員自身も子どもたちの自己肯定感や高齢者の特徴や障害の理解、時には高齢者の生き方を通して、自分たち自身の生き方についても考えていたと推測される。

今回観察した K 保育所と A 高齢者施設との交流は、1985 年から、自然に幼児と高齢者の交流がされてきた。介護保険法が成立する前は、高齢者も認知症症状がない人や身体障害が重くない人も多く、交流も運動会や演芸などが行われていた。その流れで今日まで交流が続けられてきており、その時その時に参加する対象に合わせて形式を変え、交流が続いてきている。保育士や高齢者施設職員は、特別に交流を運営するという感じではなく、行事の一つとして自然に行っていると述べていたように、無理をしない交流を行っていることが持続している理由の一つであると考えられる。保育士も職員も「特別に何もしていない」と言いながらも、事前の練習や調整、当日の役割分担などを自然に行っていた。お互いが、幼児や高齢者への様々な効果を見て、実感していることから交流を大切なものとして捉え

ていると感じる。

以上のように、交流場面を詳細に分析し、直接、参加した幼児や高齢者、保育士、施設職員へインタビューし、世代間交流がそれぞれの発達に大きな役割を果たしていることが明らかとなった。しかし、今回の研究は1回の観察のみの研究であるので、今後は回数を重ねて研究を深めることが必要である。

#### IV 意識調査並びにインタビュー、観察から見た世代間交流の研究方法の考察

4章、5章、6章では、質問紙調査、インタビュー調査、観察法により世代間交流の実態と課題が明らかになった。それぞれについての長所・短所について以下に述べる。

質問紙調査では、一度に多くの対象に同じ内容の質問をすることができ、地域の特徴や世代間交流に対する考えをつかむのに有効であった。しかし、多くの内容を質問したくても、多すぎるとは回答してもらいにくく、また質問の仕方によっては対象の捉え方に差があり、回答内容も違っていた。

インタビューでは、質問紙調査を事前に行っていたことから、インタビューガイドを作成しやすく、また実際のインタビュー場面においても、聞きたいことや対象が言いたいことを深めて質問できる利点がある。対象者の経験からくる意識を詳しく知ることができた。しかし、1回の調査に時間がかかることが短所であり、さらに深めて質問をしたいと考えても対象者の都合や疲労を考えると制限があった。また、インタビュアーの力量により、対象者の言いたいことをその場で的確につかんで話を促すことの難しさを痛感した。

観察法では、実際の交流の場面を観察しビデオで録画しており、子どもや高齢者の表情や発言、さらには職員の表情や進め方などを見ることができた。何が効果的であったのか、その場の表情や雰囲気でも体感できるという利点がある。しかし、質問したいことがあっても、プログラムの途中では勝手に入ることができず、子どもや高齢者、職員のその場での声を聞く時間が少なかった。

今回は三つの方法で世代間交流の実践的研究を行ったが、それぞれの長所、短所を補いながら調査をすることができた。しかし、調査の対象人数や実施回数が少ないことから、今後さらに増やして、内容を深めていくことが必要である。

## 第7章 子どもと高齢者の世代間交流の望ましい在り方

### I 世代間交流の実態と成果

子どもと高齢者の交流は、子どもにとっても高齢者にとっても相手に興味を持ち、自分からかかわろうとするような行動の変化など、多くの影響があることが分かった。

子どもにとっては、自分の祖父母より高齢である曾祖父母とも言えるような年代の高齢者との交流であるが、年齢が違っても身体や認知力などの障害があっても普通に質問し、普通に会話したり遊んだりしている。高齢者ができないことがあれば、自然と手伝っている。このことから交流の中で自然と高齢者の特徴を理解することができるとともに、子どもが持っている優しい気持ちが育まれていると考えられる。アンケート調査の自由記述で書かれていたように、車椅子で困っている人に声をかけたり押してあげたりするという行動につながっている。高齢者にとっても、子どもを見たり接したりすることによって、表情やしぐさのかわいらしさに癒され、また自分の子育てや自分自身の子どもを思い出して回想していた。また、人生や子育ての経験を想起することから来る子どもに対する優しい気持ち、母親に対する励ましや手助けなどの役割を發揮することができるのではなからうか。

また子どもも高齢者も相手から優しくされることにより、自分に向けられるまなざしの温かさを実感できる。このことは、自分の役割とともに見守ってもらっているという相互互惠性を発展させることにつながると考える。

子どもと高齢者の交流と言っても、その対象年齢や状態は様々である。まず子どもといっても、新生児から乳児、幼児、小学生、中学生、高校生、大学生と年齢の幅がちがっており、そのためそれぞれにできる内容や得られる内容が違う。特に自我が形成され始める乳幼児における時期での高齢者との交流は、その後の学童期、小・中・高校生、大学生などでの高齢者の理解や支援へと自然につながっている（田中，2007、村山，2011、藤原ら，2007）。

また、高齢者と言っても年齢も健康状態も様々で、仕事や地域・家庭での役割を持つ元気な高齢者から、疾患や障害があり介護や看護を受ける生活を送っている高齢者などがある。家族形態の状況も多種多様で、家族と同居している場合や別居であるが、子どもや孫と頻りに交流している場合、独居または高齢者夫婦のみで生活をしている場合などがある。

これらの状況から、子どもと高齢者の関係や交流と言っても一言では表せない深いものがある。そのため、単に交流をすればいいというものではなく、どういう対象者同士が交流するのか、そのためのプログラムをどのようなものにしていくのか、誰が仲介役となっていくのかなどを考えていく必要がある。

今回インタビューや観察をした中で、保育所と高齢者施設をお互いが訪問し合う形態のみではなく、施設の部屋を地域に開放していたり、施設主催の祭りなどを開催したり、地域の行事に参加したりするなど、交流の内容が多様化していることが分かった。それは、施設の方針や施設職員の認識によるところが大きい。

また子どもについても、母親を巻き込んだ高齢者との交流をすることによって、母親も子どもも安心して交流することができることが分かった。母親の高齢者に対する理解や自分の親を思い出すなどの効果もある。

今までは、保育所や高齢者ケア施設の職員が中心となって交流の企画・運営をすることが多かったが、職員への負担の多さやこのような多様性を考えた場合、地域の人やボランティア、子どもや高齢者支援に携わる専門職などとの連携を図っていくことが、対象の個別性に合った、幅広い内容の交流になると分かった。そのことから地域力の向上も図られるのではなかろうか。保育所や施設の方針や他の職員との関係など、環境面も大きく影響していることが伺えた。

## II 発達の観点から見た世代間交流

子どもたちは、高齢者との交流で最初は緊張したりもじもじしたりすることもあったが、自分たちが歌ったり握手したりすることによって、高齢者が笑顔になったり涙を流したりする様子を見て、自信をつけ昂揚感を身につけていた。これは、エリクソン（2001）が述べている遊戯期（幼児期後期）の発達課題である「自主性対罪悪感」を発揮していると考えられる。さらに、高齢者の反応から自分たちの歌や握手、存在自体が高齢者を喜ばせているという自信をつけ、自分から高齢者へ握手をしたり、他の子どもにも声をかけたりするなど積極的に働きかけるようになっていた。

高齢者は、子どもたちが緊張していたり、もじもじしたりしていると、掛け声や合いの手を入れて励ましていた。これは今までの人生の経験が統合されて、子どもたちの緊張を軽減し、いつもの元気さを発揮できることへの必要な援助となり英知を発揮していた。文

化や英知を子どもたちに伝承するまでには至らなくても、子どもたちに未来を感じ、子どもたちに有用感や主体性を発揮させていた。

子どもたちは、高齢者が喜んでくれていたことから、自分たちの祖父母を思い出し、健康を気遣っていた。高齢者自身も子どもたちから握手などの触れ合いを受け、それが刺激となり、子どもたちを観察したり自分や子どもの小さいころを回想したりしていた。幼児と高齢者との世代間交流を通じて相手を理解しようとするかかわりが、自分自身の発達を促し、またお互いに影響し合い、さらなる発達へとつながり、発達課題の達成にもつながっていたと考える。

守屋による人間の独自性についての七つの枠組みと照らし合わせて考察すると、次のように考えられる。

未来を意識し未来に向かって生きようとする「意志未来」や「発達が生涯みられる」については、子どもへの効果として見られた、「高齢者への配慮」や「やさしさの発揮」「自分から高齢者の手を引くなどの行為」があった。

高齢者の効果として、「子どもに声をかけておじいちゃん、おばあちゃん気質を出す」「子どもをゆったりと見守る」などの行動の変化が見られている。交流をすることによって、自分から相手にかかわろうとしたり、興味を持ち自分から手を差し出したりするなどの変化は、「意志未来に向かって生きようとする」人としての行動である。また「遊びが生涯みられる」についても、2歳から3歳くらいの子どもの幼児、学童、大学生であっても、褒められたり、見守ってもらったりすることにより、見てもらうために練習するという遊びに対する意志が認められる。高齢者においても、子どもと共に昔懐かしい遊びや歌、ゲームなどを通して楽しんでいる。時には子どもたちに聞かせようと歌や楽器の練習をしたり、水道管から楽器を作ったりするなどの創作活動や、子どもと共にできる創作活動を考え一緒に行うなど、遊びを通じたかかわりがあった。これらは交流がなければ、お互いに一生懸命練習したり、工夫したりアイデアを出したりするなどの遊びの広がりはなかったと思われる。

「親子の絆が生涯続く」についても、今現在の親子の関係のみではなく、以前のお互いを思い出したり、これからも続くであろう関係を想像したりしていた。

「回想や追憶によって過去を意味づける」こともできていたと考えられるし、「知識を英知に変えていくことができる」ことも、母親や子どもを手助けしていた。



職員についても「見守られたという思いが何かのときに積み重なっていく」など、自分たちのかかわりを子どもたちが見ることによって、何か感じて積み重なっているという有用感を感じるなどの効果があった。

このように、世代間交流は子どもにとっても高齢者にとっても、保育士や施設職員にとっても、人間だけが持っている未来に向けた意志を発揮させ、お互いの発達課題の達成や自我の発達に影響を与え、自己の発達を促すことにつながっていると考えられる。

### Ⅲ 世代間交流の継続・発展

現在、それぞれの地域で、地域のコミュニティを活性化させるような様々な活動が実践され、世代間交流はその方法として活用されている。しかし、その交流活動は思うように増えていかない現状がある。そこで、世代間交流が発展していくための方策を提案する。

#### 1 子どもと高齢者を仲介するコーディネーターの育成

現在、行われている世代間交流は、ほとんどを保育士や施設職員が担い、その方法も自分たちの経験を活かして行っている状態である。そこで、交流進行のスキルを高めプログラムを充実できるようなコーディネーターの育成が必要である。

木林（2005）は、高齢者と子どもの交流が双方にとって楽しみとなるようなプログラムの設定や効果的運営とその評価を行っていくためのスキルアップの必要性を指摘している。そしてスキルアップの効果について、①交流活動での経験を整理・蓄積し、他のケアスタッフへもそのノウハウを伝えていくことが可能になる、②活動の継続をもたらし、様々な人材や組織の協力が得やすくなると述べている。

#### 2 自治体や地域を巻き込んだ世代間交流

世代間交流を行う目的は個人や団体で異なるため、その目的を達成できるような方法やプログラムの工夫が必要である。また、交流を仲介、運営・企画する人だけの満足であってもよい交流とは言えない。対象のニーズや背景、求める交流内容を把握し、それにあった交流が求められる。そのためには、地域住民の特性を知っている自治体や地域を巻き込み、場所や安全などの環境が確保された交流となる必要がある。また、交流のため

の予算をつけてもらうことが必要である。これらから、国や自治体、地域を巻き込んだ活動をしていくことも必要である。さらに、参加者からの評価を行い、対象に合ったものにしていく。糸井（2012）は、評価について認知症症状を有する高齢者の場合は、観察による行動評価が行われている場合が多いが、プロセス評価として参加中の表情や他者との交流頻度などの交流そのものを測定する尺度が必要であると述べている。今後はこのような評価方法も考察する必要がある。

草野（2010）は、「市民度が高いコミュニティでは、ボランティア活動が盛んに行われ、その中で、学校や保育園、子育て支援、福祉施設などにおける世代間交流が展開されている。また、他人への信頼度が高い人は、日常生活に満足している割合が高く、人とのつながりが豊かであることを確認している。人とのつながりが小学生を育てている親にとって重要な意味がある」とソーシャル・キャピタルの重要性を述べている。

ソーシャル・キャピタルとは、米国の政治学者であるパットナム (R. D. Putnam, 2001) により概念化されたもので、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった形態での社会的しくみの特徴」と定義されている。また稲葉（2011）も、ソーシャル・キャピタルについて、人々が他人に対して抱く「信頼」、それに「情けは人の為ならず」「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉に象徴される「互酬性の規範」、人や組織の間の「ネットワーク(絆)」ということになると述べている。東日本大震災において、ボランティアや住民により互酬性の規範が発揮され、人や組織の間のネットワーク(絆)による復興の支援が行われた。国や自治体など上から計画され、市民が行っていくばかりでなく、市民の目線や必要性からの活動となることが大切である。

### 3 学問としての分野の構築

欧米では世代間交流が教育の場面でも取り入れられているが、我が国においても大学に講座が設置されるなど、研究分野での更なる発展が必要である。

間野（2004）は、インタージェネレーション研究の課題として、子どもと高齢者の「相乗効果」を説明する理論的根拠が不足していると述べている。その理由を次の三つとしている。

① 理論的根拠の検証不足として、世代間の接触が有益な変化をもたらしているという倫理的に説明した研究がほとんどなく、プログラム終了後の参加者に及ぼす心理的変化の縦断的な検証も遅れている。

② 限定的なプログラム対象層として、プログラムの対象層が不利な状況にある人たちに傾倒しており、参加者やコミュニティの利点をより重視したプログラムの開発・促進が重要である。

③ インタージェネレーション概念の拡大として、子どもと高齢者のみにとどまらず、中間世代のニーズを視野に入れたり、それを推進したりする専門家の養成などである。

村山（2011）は、「地域における世代間交流が始まって間もない我が国では、世代間交流の課題にこたえられる理論や実証研究はそれほど多くない」と実証研究の必要性を述べている。

山崎（1996）は、世代間交流を、高齢者についての教育と高齢者による教育と捉え、高齢者にとっての教育の必要性を述べている。高齢者も中間世代と共に世代間交流を推進するメンバーとして教育され、活躍することが効果的であると考ええる。

守屋（2005、2010）は、生涯発達及びその過程の創造的発達について、次のように創造的な努力の必要性について述べている。

われわれ人間は相互に育ちあう生涯発達という創造的発達の過程で、さまざまな運命的発達の問題を解決してきたし、これからも解決していくことができる。その意味では、生涯発達の過程で見られる社会化と個性化は、多くの人たちからの支援を受けながら、人がその生涯をかけて創造していく過程にほかならない。

## 終章 今後の課題

第4章、5章の保育所へのアンケート調査、保育士・高齢者施設職員へのインタビューで、世代間交流が増えない理由として、職員の負担や学習不足による不安などが挙げられていた。このことから、世代間交流を進めていく上で施設職員への支援が必要である。以下に具体的な提案を挙げてみる。

### 1 保育士と高齢者ケア施設職員の合同学習会や支援マニュアルの作成

世代間交流の仲介、進行を誰が担うかということは重要である。多くは交流する施設の保育士や職員が担っている。交流の開催や進行方法に慣れていくことは重要であるが、交流内容の多様化がしにくいのが現状であると考えられる。これらの方策として、子どもの保育にかかわる保育士と高齢者ケアにかかわる職員との合同学習会の開催を考える。保育士と高齢者ケア施設職員は、子どもと高齢者の世代間交流やそのための会議はしても、合同で学習会を行うことは少ない。また、自分の所属する子どもや高齢者の特性は理解していても、相手となる対象の特性やかかわり方の理解はあまりできていないと考えられる。インタビュー調査でも、高齢者ケア施設の職員で「進行は保育士に任せている」、「子どもの指導や観察は保育士に任せている」と答えていた職員がいた。交流プログラムもあまり変わらないものが行われることが多い。そこで、合同学習会を持ち、お互いの実践や課題を話し合う機会を持つことによって、意見交換や交流の方法、プログラム内容の充実が図られ、さらに生き活きとした交流となり、そのことから施設の意識の変化にもつながると考える。

また、世代間交流支援プログラムの作成を考える必要がある。

内容としては、①世代間交流とは、②世代間交流の歴史、③現在実施されている世代間交流の内容、④世代間交流の具体例、⑤世代間交流の課題などが考えられる。

支援プログラムの内容を実践でき、取り入れやすくするためには、更なる情報収集が必要である。

筆者は大阪府A市の保育所へのアンケート調査、大阪府下及び奈良県下で世代間交流を行っている施設の職員へのインタビュー調査、大阪府での世代間交流の実際を観察したが、地域が狭いことと調査数が少ないことから、多様な内容を把握できたとはいえない。

今後必要な調査として、全国の保育所・幼稚園、高齢者ケア施設へのアンケート調査、さらに、実際に世代間交流を行っている施設での観察数を増やすなどの内容が考えられる。

これらの調査により、実際に行っている工夫点や課題を引き出すことができると考えられる。頻回に交流をしている施設では、「特に工夫していることはない」と思っている場合もあるかもしれないが、他の施設から見れば、多様な細かい工夫があるからスムーズに継続されていると考える。それらの情報を交換することで、自分たちへ取り入れやすくなるのではないか。

最後に本論文の問題点と今後の課題について述べておく。

本論文では、子どもと高齢者の世代間交流で、特に幼児と高齢者を対象としてその意義と課題について発達心理学的観点から述べてきた。しかし、心理学的発達や自我の発達について十分に述べることはできなかったとは言えない。さらなる学修・研究が必要である。

また、本論文では保育士や高齢者ケア施設職員への調査やインタビュー、観察が中心であり、高齢者本人や子ども本人への調査は1回しかできていない。第三者的に調査するのみでなく、共に交流に参加し、それを継続していくことが必要であると考えられる。そうすることで、新たな交流の方向性が捉えられるのではなかろうか。

さらに、今回の研究の対象は幼児と高齢者の世代間交流が中心であったが、小学生・中学生など年代を広げて捉えていくことや、年齢の違う子ども同士、成人と子どもや高齢者など様々なパターンの交流も各世代によい効果を及ぼすのではないか。高齢者においても、今回は高齢者ケア施設を利用している高齢者を中心として研究したので、地域で生活する健康な高齢者と子どもの世代間交流についての調査等も今後は必要であると考えている。

また、学会での発表や雑誌などへの投稿が、広く社会にアピールすることにつながり、多くの人に興味を持ってもらい、必要性を感じてもらえ、発展へとつながるのではないか。

今後なお一層の研鑽に励みたい。

## 【参考・引用文献】

- E.H.エリクソン, J.M.エリクソン (著), 村瀬孝雄、近藤郁夫 (翻訳) 2001 ライフサイクル、その完結 みすず書房 pp.71-86&151-165
- 藤原佳典・西真理・渡辺直紀 他 2006 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム” RIRPRINTS” の1年間の歩みと短期的効果 日本公衆衛生誌 53 (9) 702-713
- 藤原佳典・渡辺直紀・西真理子 他 2007 児童の高齢者イメージに影響を及ぼす要因 日本公衆衛生誌 54(9) 615-625
- 藤原佳典 2012 世代間交流における実践的研究の現状と課題 日本世代間交流学会誌 2 3-8
- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀 2006 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS” の1年間の歩みと短期的効果 日本公衆衛生誌 53 702-714
- 日出幸昌江 2003 子育てにおける祖父母世代の参加 大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門 第51 139-152
- 稲葉暘二 2011 ソーシャル・キャピタル入門 中公新書 pp.1-24
- 糸井和佳・亀井智子・田高悦子 他 2012 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果—文献レビュー— 日本地域看護学会誌 15 (1) 33 - 44
- 亀井智子・糸井和佳・梶井文子 他 2010 都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証—Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点をあてて— 日本老年看護学会誌, 14 16-24
- 金森由華 2012 高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に— 愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇 pp.69-77
- 金田利子・黒澤祐介 2008 発達生涯と相互互惠性のある「まち」の形成—「世代間交流」を視座に— 白梅学園大学・短期大学紀要 44 15-31
- 桂博章 2007 芸能の保存と伝承について—秋田県仙北市角館を例に— 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学部門 62 29-36
- 北川公子ほか 2010 老年看護学 医学書院 pp.304-327

- 木林身江子 2005 高齢者ケアにおける世代間交流の現状 静岡県立大学短期大学部研究  
紀要 19 1-13
- 広辞苑 第四版 1991 岩波新書
- 厚生労働省 平成 28 年度 国民生活基礎調査の概要 (29 年 12 月 13 日)  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/16.pdf>
- 厚生労働省 保育指針 2000 (平成 12 年)  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf>
- 厚生労働省 保育所保育指針 2018  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf>
- 厚生労働省 認知症施策推進総合戦略 (新オレンジプラン) 2012  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html>
- 厚生労働省 認知症施策推進 5 か年計画 (オレンジプラン) 2015  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh.html>
- 厚生労働統計協会 厚生 の 指標 増刊 2017 国民衛生の動向 64(9)
- 厚生労働省 社保審－介護給付費分科会 第115回 (H26.11.19) 参考資料 1
- 草野篤子 2004 インタージェネレーションの必要性 現代のエスプリ No.444 至文堂 pp.5
- 草野篤子 2010 世代間交流の歴史 地域を元気にする世代間交流 遊行社 pp.11-13
- 草野篤子・瀧口眞央・吉村李織 他 2010 人間への信頼とソーシャル・キャピタル－東  
京品川区の地域ネットワークの調査から考える－ 白梅学園大学 短気大学教育・福祉  
研究センター研究年報 15 42-50
- 草野篤子・井上恵子 2012 地域と大学の連携と世代間交流－ジェンダーから見た交流の可  
能性－ 白梅学園大学・短期大学紀要 48 53-71
- 文部科学省 2002 年 小学校学習指導要領
- 文部科学省 我が国の文教施策 2000年  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad199001/index.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199001/index.html)
- 文部科学省 我が国の文教施策 平成12年  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad200001/](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001/)
- 文部科学省 中央教育審議会第二答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」  
1997  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/s1\\_2\\_5.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/s1_2_5.html)

- 森田久美子・小林美奈子 2012 東京都の通所介護施設における小学生との世代間交流の実態調査 日本世代間交流学会誌 2 190-191
- 守屋國光 2005 生涯発達論 風間書房 pp. 93-112& pp. 128-129
- 守屋國光 2010 自我発達論 共生社会と創造的発達 風間書房 pp. 1-10
- 村山陽 2012 小学生時の世代間交流が中学入学後の地域交流参加意識に及ぼす影響－読み聞かせ高齢者ボランティア REPRINTS の実践報告から－ 老年社会科学 34 (3) 382-393
- 村山陽 2011 「世代間交流」学の樹立に向けて 哲学 126 74-104
- 南部登志江 2013 自我発達の観点からみた子どもと高齢者の世代間交流の意義について 大阪総合保育大学紀要 8 137-148
- 南部登志江・辻丘美由紀・下鶴文英 2013 施設で生活する中期から重度期の認知症高齢者へのタクティール・タッチの効果 23-29
- 南部登志江 2014 幼児と高齢者の世代間交流の現状と課題 -A市における幼稚園・保育所へのアンケート調査から- 発達人間学研究 15 pp. 13-20
- 内閣府 平成28年度版高齢者白書（全体版）  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/index.html>
- 高齢社会福祉ビジョン懇談会 21世紀福祉ビジョン～少子・高齢社会に向けて～ 1994 28-42
- 間野百子 2004 インタージェネレーションの現状と課題 現代のエスプリ No.444 至文堂 pp. 66-72
- ロバート・D・パットナム (Robert D.Putnam) 2001 河田潤一訳 哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造 NTT出版 pp. 206-207
- 齋藤幸子・宮原忍 2003 次世代育成力を育む家庭環境についての一考察、日本子ども家庭総合研究所紀要 40 117-128
- Sally Newman 2004 今村京子訳 インタージェネレーションの必要性 現代のエスプリ No.444 至文堂 pp. 116-123
- 佐々木司・田代直人 2006 「地域子ども教室」に関する研究 (I) 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要 21 201-212
- 關戸啓子 2006 全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査 川崎福祉学会誌, 15 655-663



- 下村美保・下村一彦 2012 少子高齢社会における世代間交流の意義と課題ーその②：幼老  
合築型施設‘みどの福祉会’のアンケート調査を通してー 山形短期大学紀要 41  
179-193
- 総務庁 心豊かな長寿社会を考える国民の集い 平成 11 年の世代間交流活動事業例一覽  
杉井潤子 2006 祖父母と孫との世代間関係 ー孫の年齢による関係性の変化ー 奈良教  
育大学紀要 55 177-189
- 杉山孝博・渡辺千鶴 2016 認知症ケアがわかる本、洋泉社 pp.17-25
- 高橋知也・村山幸子・野中久美子 他 2015 多世代が参加する子育てサロンの実態に関  
する一研究 ー東京都板橋区福祉の森サロンを事例としてー 日本世代間交流学会誌  
5 57- 64
- 田中慶子 2007 超高齢社会における世代間交流のありかたー長野市鬼無里地域での実践  
を通してー 信州大学教育学部紀要 119 147-156
- 豊倉厚 2009 地域のふれあいは、子どもを真ん中に（<特集>子どもと祭り） 幼児の教  
育 108 8-13
- 築山崇・黒澤祐介・草野篤子・角間陽子 2006 世代間交流の実態調査報告ー京都市・神戸  
市のアンケート調査よりー 福祉社会研究 7 123-129
- 土永典明・岡崎利治 2005 世代間交流に関する調査研究ー高齢者福祉関係施設を併設して  
いる保育所の側面からー 九州保健福祉大学研究紀要 6 27-34
- 内田伸子 2008 よくわかる乳幼児心理学 ミネルヴァ書房 pp.104-131
- 内田勇人・藤原佳典・西垣利男 他 2012 高齢者による育児支援活動が高齢者の心身の  
健康と母親の育児ストレスへ及ぼす影響 日本世代間交流学会誌 2 33-39
- 八重樫牧子 2003 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響、川崎医療福祉学会誌  
13 233-245
- 山口創 2006 皮膚感覚の不思議 講談社 pp.21-48
- 山崎瞳 2005 郷土芸能を通じた学校の取り組みに関する研究 仏教大学大学院紀要第 33
- 山崎美佐子・角田陽子・草間篤子 2004 世代間交流におけるネットワークの可能性祖父母  
と孫の交流関係からー 信州大学教育学部紀要 112 99-110
- 山崎高哉 1996 重要になる家庭外での世代間の交流 4 社会教育施設での世代間交流の  
試み 関口礼子編 高齢化社会への意識改革 勁草書房 pp.52-67
- 安永正史他 2012 中学生の高齢者イメージに与える高齢者ボランティア活動の影響ーSD

法による測定と横断分析— 日本世代間交流学会誌 2 79-87

渡辺優子 2004 幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点 新潟青陵大学短期大学部  
研究報告 34 15-24

渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子 他 2010 地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感—「看護学生との交流事業」参加前の調査から— 山梨県立大学  
看護部紀要 12 9-18

## **Abstract**

# **A Developmental Psychological Study on Intergenerational Exchange between Children and Older People**

This thesis identifies the realities of intergenerational exchanges between young children and the older people and clarifies the significance of these types of exchanges from the perspective of developmental psychology.

In the introductory chapter, we defined intergenerational exchanges as, an activity in which persons belonging to different generations including children, the young, the late middle aged, and the older, interact with each other and share the skills, knowledge, and abilities they possess to improve themselves, while at the same time deepening their understanding of each other's cultures and values, and implementing the practice of building a healthy community that is useful to the people around and to society." The following four aspects were brought up with respect to the significance of the study of intergenerational exchanges specifically, intergenerational exchanges between children and the older people.

The present author introduces the following four points concerning the significance of studying intergenerational exchanges and particularly those that take place between young children and the older people.

The first point is that generational overlap is different for human beings than for other animals insofar as, in humans, this process cultivates culture, passes it on, and disseminates it. This gives it a special meaning.

The second point is that exchanges in which a person of one generation attempts to understand a person from another generation promote personal growth and development. Further, this leads to a mutual impact and is connected with the further development of each person.

The third point is that such exchanges support the achievement of developmental

tasks during early childhood. During this period, considerable development of motor skills occurs in a child, including the ability to walk, and it is also the period when cognitive abilities increase, and as a result, his or her moving range expands. Moreover, children can form a sense of self through their experiences and perceptions, and their self-awareness becomes firmly established. Then, they gain the ability to have self-conscious emotions related to their self-awareness, such as shame, guilt, and pride. This process is connected to the creation of a foundation for a more deliberate and self-aware cognition in later childhood. Thus, a child's interactions with members of many generations during this time, including with the elderly, support not only linguistic and motor development but also emotional development.

The fourth point is that these exchanges also promote development in the older, who are in the final stage of their lives in which they are often integrating and reassigning the significance of their lives up to that point. Additionally, they may also face the task of integrating their sense of wisdom for their nearly completed life cycle. Intergenerational exchanges with children can assist them in achieving this task.

In order to achieve this objective, the older must pass on their culture and wisdom to the next generation. As Erikson (2001) states, when we reflect on our life and consider whether or not we are worthy beings, we must have achieved the objective of passing on our culture and wisdom to the next generation. Intergenerational exchanges with children connect to the achievement of this objective. For this reason too, one can consider that intergenerational exchanges between children and the older people is an important interaction.

In Chapter 1, *The Need for Intergenerational Interaction and the Current State of the Declining Birth Rate and Aging*, we confirmed the need for intergenerational exchanges and Japan's current state of declining birth rate and aging. In addition, we were also able to confirm the need for understanding of and support for symptoms of older people with dementia, one factor that makes interaction difficult.

In Chapter 2, *History and Recent Trends Related to Intergenerational Exchanges*, after defining intergenerational exchanges, we clarified its history in Japan through

the study of documentation while also elucidating its current state and related issues in Japan.

In Chapter 3, Intergenerational Exchanges Observed in Each Generation, Especially between Children and the older people we examined the issues and the current state of intergenerational exchange between each generation and the older, and at the same time also clarified the significance and necessity of focusing on such interaction between children and the older people. From this, confirmed the perspective and purpose of this study.

In chapter 4, Research on Actual Conditions of Children and the Aged Generation Interaction, a questionnaire survey of intergenerational exchange for nurseries and kindergarten staff was discussed from the viewpoint of developmental psychology.

Through these efforts, we confirmed that intergenerational exchange between children and the older people plays an important role in achieving each of the development issues as well as in one's own development.

In Chapter 5, An Interview Survey of Staff of Day Care Centers and Older Care Facilities Conducting Intergenerational Exchanges, using such surveys we confirmed the actual content of specific interactions and the issues considered by the staff, as well as their attention to the reactions and interaction of the children towards dementia symptoms of the older people.

From Chapter 6, Observations of Intergenerational Exchanges Scenes between Children and Older people, we confirmed more specifically the interaction between children and the older people and learned about mutual communication as well as the program structure and means of progress among mediating child-care workers and staff of facilities through observation of such means of progress.

From observations of the interaction scenes and interviews of the children, the older, and the staff after the interaction, intergenerational exchange enriched the children's emotions and expressions, and the children actually felt that their handshakes had the effect of enhancing the feelings of the older, increasing their sense of self-enhancement. For the older, due to difficulties in hearing or decline in cognitive functions, they could not quite remember the content of the program

conducted by the children, but it led to effects including feeling that the program was so cute that it made them cry, made them smile, made them feel enthusiastic, and have a sense of affirmation both physically and mentally. Based on these, it was confirmed that there was acquisition of independence from social conflict, that is, the sense of guilt vis-à-vis one's independence, a developmental problem of the play period (the period after childhood) mentioned by Erikson, and manifestation of wisdom from unity vis-à-vis despair of the old age period.

In Chapter 7, The Ideal Intergenerational Exchanges between Children and Older people, we raised as measures for the development of intergenerational exchange activities the development of coordinators who support interaction, the need for intergenerational exchange activities involving local government and the local community, and the establishment of an academic field of study.

In the final Chapter, Future Challenges, remaining future challenges include considering interaction by widening the age range and including intergenerational exchange between children and healthy older of the community, not just interaction between children and the older people in care facilities.

## あ　と　が　き

本論は子どもと高齢者の世代間交流の意義や課題について発達心理学的観点から考察したものです。しかし、発達心理学的観点からとらえることは難しく、しっかりと考察できたとは言えない部分があります。今後さらに研鑽を積みたいと考えます。

実践研究では、子どもや高齢者の交流の様子を観察する場面が多く、楽しい研究でした。しかし、その内容をどのように振り返り、まとめていけばよいのかという難しさも痛感いたしました。調査にご協力してくださった幼児の皆様、高齢者様、保育士様、施設職員の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

論文を執筆するにあたり、ご指導いただきました大阪総合保育大学学長の山崎高哉先生には、厳しくも暖かいご指導を賜りました。自分のオリジナリティを出せるように常にご指導を下さり、また、研究の方向性と示唆を与えてくださいました。深く感謝申し上げます。また、大阪総合保育大学大学院教授の小椋たみ子先生には、実践研究の方法や視点、調査の分析方法などを細かく具体的にご指導をしていただきました。とくに子どもの発達への援助や観察の視点についてご指導していただきました。深く感謝いたします。また、修士からご指導してくださり、大阪総合保育大学大学院でも1・2回生時の主指導教員をしていただいた、プール学院大学教育学部教授、大阪教育大学名誉教授、大阪総合保育大学名誉教授の守屋國光先生には、長きにわたりご指導いただき、自我発達を考えることの大切さを教えていただきました。深く感謝申し上げます。また、ゼミで貴重な意見を下さり励ましてくださった大学院生の皆様に感謝申し上げます。さらに、すぐにあきらめようとする私を励ましてくださった、家族、妹弟、友人に感謝いたします。

多くの皆様のおかげで、今回の論文をまとめることができました。今後さらに研鑽してまいりますので、今後もしもご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしく願いいたします。

**【資料】**



資料 1-1 アンケート依頼

「子どもと高齢者の世代間交流についてのアンケート」のお願い

私は、大阪総合保育大学大学院研究科に所属する、南部登志江と申します。現在「高齢者と子どもの世代間交流」というテーマで博士論文に取り組んでおります。

現在の我が国では、少子高齢化や3世代世帯の激減などにより、子どもと高齢者の交流の機会が減少しています。地域力が減少しているといわれている現代において、子どもと高齢者の世代間交流は大切であると考えます。そこで子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

つきましては、恐れ入りますが、アンケートにご協力いただきますようお願いいたします。ご協力いただけない場合でも、不利益が生じる事は一切ございません。個人情報の取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします。趣旨をおくみ取りの上ご協力をくださいますようお願いいたします。

以下の質問で該当する番号に○をつけてください。またはご意見をご記入いただき、**8月23日を目処**に同封の返信封筒でご返送いただきますようお願いいたします。

2014年7月

【お問い合わせ先】

調査者 畿央大学 健康科学部看護医療学科 南部 登志江

住所 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

TEL 0745-54-1602 (大学代表)

FAX 0745-54-1600

Email [t.nanbu@kio.ac.jp](mailto:t.nanbu@kio.ac.jp)

指導教員 大阪総合保育大学大学院 守屋國光教授

住所 大阪市東住吉区湯里 6丁目 4番 26号

TEL 06-6702-0320 (大学代表)

FAX 06-0702-0322

資料 1-2 アンケート

1. あなたが所属する施設について伺います。

- ① 幼稚園 ② 保育所

2. 設置主体について伺います。

- ① 公立 ② 社会福祉法人 ③ 宗教法人 ④ 学校法人  
⑤ その他

3. 子どもの人数について伺います。

- ① 10名～29名 ② 30名～49名 ③ 50名～69名 ④ 70名～99名 ⑤ 100名以上

4. 保育士数・教員数について伺います。

- ① 9名以下 ② 10名～19名 ③ 20名～29名 ④ 30名以上

5. 併設施設の有無について伺います。

- ① あり ② なし

6. 5で「あり」と答えた人でそれはどのような施設ですか。すべてお書きください。

7. あなたが所属する施設では子どもと高齢者との交流をされていますか。

- ① している ② していない

8. 7で「交流をしている」と答えた方に伺います。

(1) 交流活動の対象者はどのような方ですか。(複数回答可)

- ① 在園児の祖父母、曾祖父母 ② 地元老人クラブの会員 ③ 老人福祉センターの利用者  
④ デイサービスの利用者 ⑤ 老人ホームの利用者  
⑥ その他

(2) 交流活動の方法について伺います。(複数回答可)

- ① 高齢者を施設に招待して一緒に遊ぶ ② 相手先に訪問して一緒に遊ぶ  
③ 双方が日常的に交流  
④ その他

(3) 交流活動の内容について伺います。(複数回答可)

- ① 芸能や伝承遊びなどの交流活動 ② 発表会などの発表を通じた交流活動  
③ 折り紙等の創作を通じた交流活動 ④ ゲームなどの娯楽を通じた交流活動  
⑤ 複合施設などでの日常的な交流活動  
⑥ その他

(4) 交流活動の頻度について伺います。

- 1) 規則的に行っている・・・①年に1回～2回 ②年に3回～5回  
③年に6回～10回 ④10回以上  
2) 不規則で行っている・・・①年に1回～2回 ②年に3回～5回 ③年に6回～10回

(5) 交流活動の実実施動機について伺います。

- ①世代間の親和を深める必要性      ②高齢者が果たす役割に意義がある
- ③ 幼稚園・保育所運営にとって必要な事業      ④行政庁からの勸奨に応じた
- ⑤その他

(6) 幼児が高齢者とふれあうことによりどのような成果がみられましたか。(複数回答可)

- ①性格がやさしくなった      ②高齢者を大切にするようになった
- ③人を援助することができるようになった      ④人のことを思いやることができるようになった
- ⑤性格が穏やかになった      ⑥感受性が豊かになった      ⑦家族を大切にするようになった
- ⑧協調性が豊かになった      ⑨人の命を大切にするようになった
- ⑩自分に自信がもてるようになった
- ⑪その他

(7) 高齢者との交流会の今後について伺います。

- ①もっと増やしていきたい      ②現在のままでよい      ③もう少し減らしたい

理由

9. 7で「交流をしていない」と答えた方にその理由を伺います。

- ①今後は交流する機会を設けたい      ②現在のままでよい      ③どちらともいえない

理由

10. 交流活動をしていくうえでの問題点について伺います。(複数回答可)

- ①活動費用      ②行政の協力      ③保育所・幼稚園協議会等の協力や連携
- ④行政・社会福祉協議会との連携      ⑤貴施設の推進体制や協力
- ⑥職員間の理解・協力      ⑦担当職員の負担      ⑧担当職員の教育・訓練
- ⑨その他

その他の内容と問題点の内容を詳しくお聞かせください。

11. 「子どもと高齢者の交流について」感じていること、考えていることを伺います。

12. アンケートをご記入いただいた方の役職について伺います。

- 1) 保育所      ①所長      ②主任保育士      ③保育士      ④その他
- 2) 幼稚園      ①園長      ②主任教諭      ③教諭      ④その他
- 3) 経験年数は、合計で何年何ヶ月かご記入ください。

(      ) 年      (      ) ヶ月

- 4) 差し支えなければ、施設名をお教えてください。

平成 27 年 月 日

様

「幼児と高齢者の世代間交流の在り方に関する研究」

ご協力をお願い（説明書）

私は、大阪総合保育大学大学院研究科に所属する南部登志江と申します。現在「高齢者と子どもの世代間交流」というテーマで博士論文に取り組んでおります。

## 1 研究の目的・意義

現在の我が国では、少子高齢化や3世代世帯の減少などにより、子どもと高齢者の交流の機会が減少しています。このことから今まで行われてきた高齢者から子ども世代への英知や文化の伝承がしにくくなっています。また子どもにとっても高齢者からのやさしいまなざしや関わりの減少は、豊かな育ちや成長を阻害し非行や虐待を招いているといわれています。地域力が減少しているといわれている現代において、子どもと高齢者の世代間交流は大切であると考えます。しかし交流の仲介をする人が少なく負担も多いことなどから、交流の機会は少なくなっています。そこで子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

つきましては、恐れ入りますが、インタビューにご協力いただきますようお願いいたします。ご協力いただけない場合でも、不利益が生じる事は一切ございません。個人情報取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします。趣旨をおくみ取りの上ご協力をくださいますようお願いいたします。

## 2 研究の方法

1) 調査方法：半構成的インタビュー方法

2) 研究参加に同意していただいた方には、以下の内容のプロフィールを書きいただきます。

プロフィールの内容：経験年数

3) 具体的調査方法：ICレコーダー使用

① 時間：30分程度で行います。時間厳守で行います。

② 場所：小さい静かな部屋を確保し、その中で外部に話す内容や声が漏れないように配慮します。疲労が少ないように椅子に座っていただきます。

③ ICレコーダーの置く場所は不快や負担感を感じない場所に置きます。

④ インタビューの間に身体的疲労や精神的負担を感じられる可能性があります。その場合は、途中でインタビューを中止することや同意の撤回を申し出ることができます。

4) 分析方法

## 本研究のデザイン：質的帰納的研究

### 3 研究の期間

2015年 3月 1日 ～ 2015年 8月 31日

### 4 倫理的配慮等

#### (1) この研究に予想される不利益および危険性

対象者に与える不利益は、録音することによって、不快や負担感を持つことです。また、インタビューの時間が30分から40分であり、対象者に疲労感を与えることが予測できます。危険性については、インタビュー時に言葉が外部に漏れ聞かれる可能性が考えられます。さらに、個人的な内容が録音され、業者委託によって逐語録を作成するため、担当した業者から個人情報の漏えいということが考えられます。

#### (2) 研究への参加とその撤回について

参加は自由意志であり、対象者が研究参加を拒否する権利、研究参加の途中で協力を随時撤回できる権利を有します。レコーダー使用について同意を撤回できます。また、インタビューガイドの内容によっては、途中で同意を撤回し、インタビューへの参加を拒否できます。参加を拒否することや途中で同意の撤回、インタビューの拒否を行っても不利益を受けません。撤回した場合は、その参加者の情報はすみやかに破棄し、研究には利用しません。

#### (3) プライバシーの保護と個人情報の保護について

小さい静かな部屋を確保し、その中で外部に話す内容や声が漏れないようプライバシーに配慮します。データは分析によって説明概念となり、匿名化が図れ、研究結果の発表時を含め研究参加者の個人名や個人を特定できるような情報は一切公表されることはありません。また、録音されたデータは業者ソフトによって完全に消去されます。また、業者と守秘義務についての契約を取り交わします。業者のホームページからセキュリティー管理を監視します。取得した情報の紙媒体は、研究室のカギのかかるロッカーに平成27年7月から平成29年3月まで保管します。電子媒体はインターネットに接続していないパソコンで使用し、情報が漏れることはありません。研究終了後に電子媒体は消去ソフトを使って処理し、紙媒体はシュレッダー処理します。

#### (4) 研究結果の公表について

大阪総合保育大学大学院研究科における学位論文として発表します。また、平成28年老年看護学会に発表する予定です。研究結果について研究対象者は知る権利があります。そのため、メールおよび電話で知りたいと申し出た研究対象者に発表場所、論文をお知らせします。

#### (5) 費用について

研究対象者に経済的負担はありません。

5 問題が発生した場合の連絡

問題等が発生した場合は、以下の連絡先までご連絡ください。

連絡先 : 畿央大学 健康科学部 看護医療学科

講師 南部 登志江

住所 : 〒635-0832

奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

電話番号 : 0745-54-1601 (大学代表)

FAX : 0745-54-1600

E-mail : t.nanbu@kio.ac.jp

指導教員 : 大阪総合保育大学大学院 教授 守屋 國光

住所 : 大阪市東住吉区湯里 6丁目 4番 26号

電話番号 : 06-6702-0320 (大学代表)

FAX : 06-6702-0322

資料 2-2 施設長への依頼書

平成 27 年 月 日

施設名

施設長 様

畿央大学

健康科学部看護医療学科

講師 南部 登志江

「高齢者と幼児の世代間交流の在り方に関する研究」について

ご協力をお願い

拝啓

盛夏の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度、私の「高齢者と幼児の世代間交流の在り方に関する研究」について、貴施設の職員・様へのインタビューを調整・ご承諾いただき、ありがとうございます。

以下のような研究のお願いと同意書とインタビューガイドを 様にお渡ししました。

1. 研究のご協力お願い
2. インタビューガイド
3. 同意書

今後とも何卒よろしく願いいたします。

敬具

資料 2-3 同意書

同 意 書

研究責任者 南部登志江 様

私は『高齢者と幼児の世代間交流の在り方に関する研究』について 南部登志江より説明文書を用いて説明を受け、目的、方法、危険性等について十分納得・理解しましたので、私の自由な意志によって、本研究に参加することに同意します。

説明を受けた項目

- 研究の目的
  - あなたに研究参加をお願いする理由
  - 研究の方法
  - 研究に参加いただく期間
  - 予測される効果及び不利益
  - 健康被害が発生した場合の補償や治療
  - 研究への参加、同意の撤回
  - 研究に関する新たな情報が得られたとき
  - プライバシーの保護

平成 年 月 日

同意者

本人氏名：

住所

電話

\* 同意していただける場合は署名もしくは記名押印をお願いします。



資料 2-4 インタビューガイド

インタビューガイド (30分～40分)

- 1) 幼児と高齢者の世代間交流の意義はどんなことだと思いますか。
- 2) 世代間交流（交流の仲介）を始めた理由はどのようなことがありますか。
- 3) 幼児や高齢者への影響はありましたか。
- 4) 具体的な事例をお聞かせください。
- 5) 世代間交流をする上での課題はどのようなことですか。
- 6) 今後は認知症高齢者との交流も増えると思いますが、どのようなことが課題でしょうか。
- 7) どのような対処をしたらよいと思われませんか。

資料3-1 インタビュー依頼

高齢者ケア施設職員（保育士）の皆様

平成29年 月 日

### インタビュー協力をお願い

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」  
に関するインタビュー調査協力をお願い

私は畿央大学きおうだいがくの 南部登志江 と申します。子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための職員への支援方法について研究しています。

つきましては、恐れ入りますが、インタビューにご協力いただきますようお願いいたします。ご協力いただけない場合でも、不利益が生じる事は一切ございません。個人情報の取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします。趣旨をおくみ取りの上ご協力をくださいますようお願いいたします。

また、下記の内容をお読みいただき、ご承諾いただける場合は同意書の署名をお願い致します。何卒、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

#### 記

#### 1. 研究課題

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」

#### 2. 研究代表者

研究代表者：南部 登志江 畿央大学健康科学部准教授

研究分担者：山崎 尚美 畿央大学健康科学部教授

研究連携者：小椋たみ子 大阪総合保育大学大学院教授

小島 賢子 京都看護大学教授

屋敷 久美 太成学院大学人間学部看護学科准教授

寺田 美和子 畿央大学健康科学部講師

島岡 昌代 畿央大学健康科学部助手

### 3. 研究の目的・意義

現在の我が国では、少子高齢化や3世代世帯の減少などにより、子どもと高齢者の交流の機会が減少しています。このことから今まで行われてきた高齢者から子ども世代への英知や文化の伝承がしにくくなっています。また子どもにとっても高齢者からのやさしいまなざしや関わりの減少は、豊かな育ちや成長を阻害し非行や虐待を招いているといわれています。地域力が減少しているといわれている現代において、子どもと高齢者の世代間交流は大切であると考えます。しかし交流の仲介をする人が少なく負担も多いことなどから、交流の機会は少なくなっています。そこで、子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための職員への支援方法について研究しています。

### 4. 研究方法および内容

1) 平成29年度：(平成29年8月～平成29年12月)

- (1) 現状把握のために高齢者ケア施設の管理者および職員への実態調査、現状と課題把握のためのインタビューを実施する
- (2) 実態把握のために交流中・交流後の高齢者の様子をビデオでの撮影、またインタビューを実施する

面接調査項目：参加者の背景（性別、年齢、職種、経験年数、有資格）

### 5. 倫理的配慮

- 1)施設職員・高齢者へのインタビューは、研究の目的及び方法を口頭と文書で説明し、データは集団として取り扱い途中の棄権については何ら不利益を蒙ることがないことを説明し、同意書の提出を持って承諾を得たものとします。
- 2)データは厳重に保管し研究者以外の閲覧は不可能とし、データは調査終了後に速やかに廃棄します。尚、本研究は研究代表者機関の倫理審査委員会の承認を得ています。

### 6. 施設職員様へのお願い

- 1) 研究参加者様はご自分の意思で参加を決定し、協力しても良いとご判断されれば、同意書にご記入をいただきます。もし、途中で同意を撤回したい場合は、同意撤回書にご記入いただき、南部登志江にご連絡ください。よろしくお願い申し上げます。

以上

なお、このインタビューはおおよそ30-45分ほど要します。場所は、研究者が施設に出向いて行います。疑問や不明な点がございましたら、下記にご連絡下さい。

研究代表者 畿央大学健康科学部・看護医療学科 南部登志江

連絡先：〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

電話：0745-54-1601(代表) E-mail:t.nanbu@kio.ac.jp

## 資料 3-2 インタビュー依頼（家族）

家族様

平成29年 月 日

### インタビュー協力をお願い

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」  
に関するインタビュー調査協力をお願い

私は畿央大学きおうだいがくの 南部登志江 と申します。子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

つきましては、恐れ入りますが、9月開催されます、保育園の子どもたちとの交流会の様子をビデオで撮影し高齢者の方にインタビューをさせていただきますようご協力お願いいたします。ビデオで撮影するのは、インタビューだけでは、高齢者の気持ちをうまく引き出すことがむつかしいと考えるからです。ご協力いただけない場合でも、不利益が生じる事は一切ございません。個人情報取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします。趣旨をおくみ取りの上ご協力をくださいますようお願いいたします。

また、下記の内容をお読みいただき、ご承諾いただける場合は同意書の署名をお願い致します。何卒、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

### 記

## 2. 研究課題

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」

### 2. 研究代表者

研究代表者：南部 登志江 畿央大学健康科学部准教授

研究分担者：山崎 尚美 畿央大学健康科学部教授

研究連携者：小椋たみ子 大阪総合保育大学大学院教授

小島 賢子 京都看護大学教授

屋敷 久美 太成学院大学人間学部看護学科准教授

寺田 美和子 畿央大学健康科学部講師

島岡 昌代 畿央大学健康科学部助手

## 3. 研究の目的・意義

現在の我が国では、少子高齢化や3世代世帯の減少などにより、子どもと高齢者の交流の機会が減少しています。このことから今まで行われてきた高齢者から子ども世代への英知や文化の伝承がしにくくなっています。また子どもにとっても高齢者からのやさしいまなざしや関わ

りの減少は、豊かな育ちや成長を阻害し非行や虐待を招いているといわれています。地域力が減少しているといわれている現代において、子どもと高齢者の世代間交流は大切であると考えます。しかし交流の仲介をする人が少なく負担も多いことなどから、交流の機会は少なくなっています。そこで、子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

#### 4. 研究方法および内容

2) 平成 29 年度：(平成 29 年 8 月～平成 29 年 12 月)

(3) 実態把握のために交流中・交流後の子どもの様子をビデオでの撮影、またインタビューを実施する

#### 5. 倫理的配慮

1) 高齢者の方へのインタビューは、ご家族に研究の目的及び方法を口頭と文書で説明し、データは集団として取り扱い途中の棄権については何ら不利益を蒙ることがないことを説明し、同意書の提出を持って承諾を得たものとします。

2) データは厳重に保管し研究者以外の閲覧は不可能とし、データは調査終了後に速やかに廃棄します。尚、本研究は研究代表者機関の倫理審査委員会の承認を得ています。

#### 6. ご家族様へのお願い

1) ご家族様は協力しても良いとご判断されれば、同意書にご記入をいただきます。もし、途中で同意を撤回したい場合は、同意撤回書にご記入いただき、南部登志江にご連絡ください。よろしくお願い申し上げます。

以上

なお、高齢者へのインタビューはおおよそ 4～5 分ほど要します。場所は、研究者が施設に出向いて行います。疑問や不明な点がございましたら、下記にご連絡下さい。

研究代表者 畿央大学健康科学部・看護医療学科 南部登志江

連絡先：〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

電話：0745-54-1601(代表) E-mail:t.nanbu@kio.ac.jp

### 資料3-3 インタビュー依頼（保護者）

保護者の皆様

平成29年 月 日

#### インタビュー協力をお願い

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」  
に関するインタビュー調査協力をお願い

私は畿央大学きおうだいがくの 南部登志江 と申します。子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

つきましては、恐れ入りますが、9月の高齢者との交流会の様子をビデオで撮影し子どもたちにインタビューをさせていただきますようご協力お願いいたします。ビデオで撮影するのは、インタビューだけでは、子どもたちの気持ちをうまく引き出すことがむづかしいと考えるからです。ご協力いただけない場合でも、不利益が生じる事は一切ございません。個人情報の取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします。趣旨をおくみ取りの上ご協力をくださいますようお願いいたします。

また、下記の内容をお読みいただき、ご承諾いただける場合は同意書の署名をお願い致します。何卒、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

#### 記

### 3. 研究課題

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」

#### 2. 研究代表者

研究代表者：南部 登志江 畿央大学健康科学部准教授

研究分担者：山崎 尚美 畿央大学健康科学部教授

研究連携者：小椋たみ子 大阪総合保育大学大学院教授

小島 賢子 京都看護大学教授

屋敷 久美 太成学院大学人間学部看護学科准教授

寺田 美和子 畿央大学健康科学部講師

島岡 昌代 畿央大学健康科学部助手

### 3. 研究の目的・意義

現在の我が国では、少子高齢化や3世代世帯の減少などにより、子どもと高齢者の交流の機会が減少しています。このことから今まで行われてきた高齢者から子ども世代への英知や文化の伝承がしにくくなっています。また子どもにとっても高齢者からのやさしいまなざしや関わりの減少は、豊かな育ちや成長を阻害し非行や虐待を招いているといわれています。地域力が

減少しているといわれている現代において、子どもと高齢者の世代間交流は大切であると考えます。しかし交流の仲介をする人が少なく負担も多いことなどから、交流の機会は少なくなっています。そこで、子どもと高齢者の世代間交流の現状や課題について知り、世代間交流を図るための支援方法について研究しています。

#### 4. 研究方法および内容

3) 平成 29 年度：(平成 29 年 8 月～平成 29 年 12 月)

(4) 実態把握のために交流中・交流後の子どもの様子をビデオでの撮影、またインタビューを実施する

#### 5. 倫理的配慮

1) 子どもさんへのインタビューは、保護者に研究の目的及び方法を口頭と文書で説明し、データは集団として取り扱い途中の棄権については何ら不利益を蒙ることがないことを説明し、同意書の提出を持って承諾を得たものとします。

2) データは厳重に保管し研究者以外の閲覧は不可能とし、データは調査終了後に速やかに廃棄します。尚、本研究は研究代表者機関の倫理審査委員会の承認を得ています。

#### 6. 保護者様へのお願い

1) 研究参加者様は協力しても良いとご判断されれば、同意書にご記入をいただきます。もし、途中で同意を撤回したい場合は、同意撤回書にご記入いただき、南部登志江にご連絡ください。よろしくお願い申し上げます。

以上

なお、子どもさんへのインタビューはおおよそ 1～2 分ほど要します。場所は、研究者が保育園に出向いて行います。疑問や不明な点がございましたら、下記にご連絡下さい。

研究代表者 畿央大学健康科学部・看護医療学科 南部登志江

連絡先：〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

電話：0745-54-1601(代表) E-mail:t.nanbu@kio.ac.jp

畿央大学 健康科学部看護医療学科  
准教授 南部 登志江 殿

研究題目 : 認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発

私は、私の家族が上記研究題目における研究に参加するにあたり、担当者から以下の項目について説明を受け、本人および家族の自由意思による参加の中止が可能であることを含め理解しましたので、この研究に参加することに同意します。

本研究について説明を受け理解した項目を□の中にレをご記入ください。

《項目例》適宜、追加・削除してください。

- 責任研究者の氏名、職名、連絡先
- 目的および方法(参加者の選択基準、割付方法、無作為割り付けの場合は、選択権がないこと)
- 期間
- 予期される利益、危険性または不便、本研究終了後の対応
- 研究の意義
- 同意が任意のものであり、同意しない場合も不利益をうけないこと
- 参加した後でも、撤回がいつでも可能であり、その場合も不利益を受けないこと
- プライバシーが守られること
- 謝礼について
- 問い合わせ先

本人署名 : \_\_\_\_\_ (印)

署名年月日 : 西暦 年 月 日

(代諾者署名) : \_\_\_\_\_

(複数署名可) \_\_\_\_\_

私は管理者として、今回の研究について上記の項目を説明し、同意をしました。

管理者署名 : \_\_\_\_\_ (印)

署名年月日 : 西暦 年 月 日

(代諾者署名) : \_\_\_\_\_

(複数署名可) \_\_\_\_\_

※本同意書は参加者、及び研究責任者が一部ずつ保管するものとする。



## 同意撤回書

畿央大学 健康科学部看護医療学科  
准教授 南部 登志江 様

1. この度、私は「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」（研究代表者 南部登志江）に関する研究に参加することに同意したことを撤回いたします。

平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

住所 〒 \_\_\_\_\_

本人氏名： \_\_\_\_\_

同意撤回の意思を確認いたしました。

平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

署名 \_\_\_\_\_

なお、論文発表前でもデータ解析が終了している場合、論文投稿中や、あるいは研究期間内にすでに発表している場合、その後撤回の申し入れがあった場合、撤回者のデータ削除はできません。

## 連 絡 票

平成 年 月 日

畿央大学 健康科学部看護医療学科

教授 南部登志江 宛

下記の研究について、研究協力を承諾し、研究結果および研修会などの情報について連絡を希望します。

記

### 研究課題名

「認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発」

### 研究代表者

研究代表者 畿央大学 健康科学部看護医療学科 准教授・南部 登志江

結果の送付を希望します。

研修会などの情報を希望します。

(希望の項目の□内にレ点を入れてください)

### 送付先

住所 〒 \_\_\_\_\_

連絡先(電話) \_\_\_\_\_

(E-mail) \_\_\_\_\_

施設代表者名: \_\_\_\_\_

インタビューガイド 保育士及び高齢者ケア施設職員

本日は、インタビューにご協力いただきありがとうございます。私は、畿央大学の  
南部登志江と申します。以下の質問をさせていただきますが、日頃  
感じていることを自由にお話してください。なお、このあと ICレコーダーのスイッチを ON  
にしますがお話しいただいた内容や個人情報の遵守はお約束いたします。

- 1) 幼児と高齢者の世代間交流の意義はどんなことだと思いますか。
- 2) 世代間交流（交流の仲介）を始めた理由はどのようなことがありますか。
- 3) 幼児や高齢者への影響はありましたか。具体的な事例をお聞かせください。
- 4) 世代間交流をする上での課題はどのようなことですか。
- 5) 今後は認知症高齢者との交流も増えると思いますが、どのようなことが課題でしょうか。
- 6) どのような対処をしたらよいと思われませんか。
- 7) 世代間交流を行うことで職員への影響はありましたか。

8) その他

何か言い残したことがあればお話しください。

以上で、質問は終わりです。逐語録を作成いたしますが、わからないことやもう少し聞きたいといった場合は、再度連絡することがあります。また、この質問を含めて研究協力をお辞めになりたい場合は、同意撤回書にご記入いただき返信ください。

ご協力ありがとうございました。

### 資料 3-8 インタビューガイド（子ども）

#### インタビューガイド 子ども

本日は、インタビューにご協力いただきありがとうございます。私は、畿央大学の  
南部登志江と申します。以下の質問をさせていただきますが、日頃  
感じていることを自由にお話してください。なお、このあと ICレコーダーのスイッチを ON  
にしますがお話しいただいた内容や個人情報の遵守はお約束いたします。

- 1) 今日の高齢者との交流会はどうだったか
- 2) どんなところが楽しかったのか
- 3) 楽しかった気持ちのほかにどんな気持ちがしたのか
- 4) 発表はどうだったか
- 5) おじいちゃん、おばあちゃんをどう思うか
- 8) その他

何か言い残したことがあればお話しください。

以上で、質問は終わりです。逐語録を作成いたしますが、わからないことやもう少し聞  
きたいといった場合は、再度連絡することがあります。

ご協力ありがとうございました。

インタビューガイド 高齢者

本日は、インタビューにご協力いただきありがとうございます。私は、畿央大学の  
南部登志江と申します。以下の質問をさせていただきますが、日頃  
感じていることを自由にお話してください。なお、このあと ICレコーダーのスイッチを ON  
にしますがお話しいただいた内容や個人情報の遵守はお約束いたします。

- 1) 今日の子どもとの交流会はどうだったか
- 2) どんなところが楽しかったのか
- 3) 楽しかった気持ちのほかにどんな気持ちがしたのか
- 4) 発表やゲームはどうだったか
- 5) 子どもをどう思うか
- 8) その他

何か言い残したことがあればお話しください。

以上で、質問は終わりです。逐語録を作成いたしますが、わからないことやもう少し聞  
きたいといった場合は、再度連絡することがあります。

ご協力ありがとうございました。